宮城県多賀城跡調査研究所年報 2022

多賀城跡

宮城県多賀城跡調査研究所

序　　文

多賀城跡調査研究所は、昭和44（1969）年の設立以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明し、その成果をもとに環境整備事業を実施することで、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの来訪者にとって親しみやすい憩いの場となる史跡公園を目指しています。

発掘調査事業は、第11次５ヵ年計画の４年目の調査として２地点の調査を実施しました。１地点目は多賀城政庁地区北方において、昨年度に引き続き遺構の構成と時期の把握、遺構の立地する地形の確認を目的とする第96次調査を実施しました。その結果、第Ⅲ期の掘立柱建物を発見し、また建物廃絶後に多数の鍛冶関連遺物が廃棄されていることもわかりました。政庁北側の使われ方を解明するうえで貴重な成果となりました。

２地点目は政庁南面地区の第Ⅰ期外郭南門西側の丘陵から低地に向かう地点において、区画施設等の把握を目的とする第97次調査を実施しました。その結果、区画施設等の遺構は削平されたため確認することはできませんでしたが、丘陵が西に向かって張り出す地形であることがわかりました。第Ⅰ期外郭南門の西側の区画施設を想定するうえで貴重な成果といえます。

環境整備事業は、宮城県の総合計画『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置付けられ、「多賀城創建1300年記念総合整備活用事業」として、多賀城創建1300年の記念の年にあたる令和6（2024）年に向けて実施しています。政庁南面地区を対象とした第11次５ヵ年計画の３年目の事業としても位置付けており、城前官衙における古代役所建物や区画施設等の遺構表示を継続して行いました。また、整備が完了した地区につきましては、部分的に供用を開始しています。今後も、管理団体である多賀城市と連携して着実に推進していきたいと考えています。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導いただいています多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対してご支援いただきました皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和５年３月

宮城県多賀城跡調査研究所
所　長　高橋　栄一

目　　次

Ⅰ．調査研究事業の計画 …… 1
Ⅱ．第96次調査 …… 2
　1．調査の目的と経過 …… 2
　2．A区の調査成果 …… 11
　3．B区の調査成果 …… 21
　4．総括 …… 45
Ⅲ．第97次調査 …… 52
　1．調査の目的と経過 …… 52
　2．調査成果 …… 53
Ⅳ．金属製品・瓦・瓦塔の追加報告 …… 63
　1．第46次調査：西門・五万崎地区出土金属製品 …… 63
　2．第3・9・16次調査：政庁西辺第3次整地層出土の瓦 …… 64
　3．第25・26次調査：多賀城廃寺跡出土の瓦塔 …… 69
Ⅴ．付章 …… 82
　1．関連研究・普及活動 …… 82
　2．組織と職員 …… 86
　3．沿革と実績 …… 87

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：北より撮影〔登録番号：Z9617〕、裏表紙写真〔登録番号：Z9825〕】

図版目次

図版1　第96・97次調査区の位置 …… 3
図版2　第96次調査区と周辺の調査 …… 4
図版3　政庁地区北方の調査 …… 5
図版4　第96次調査区遠景写真 …… 7
図版5　第96次調査・公開の様子 …… 8
図版6　第96次調査区全景写真 …… 9
図版7　遺構配置図 …… 10
図版8　A区平面図 …… 12
図版9　A区全景写真 …… 13
図版10　A区断面図 …… 14
図版11　A区写真 …… 15
図版12　SI3460竪穴建物平面・断面図 …… 16
図版13　SI3460竪穴建物写真 …… 17
図版14　SI3460竪穴建物出土遺物 …… 18
図版15　B区　平面・南北縦断面図 …… 23
図版16　B区写真 …… 24
図版17　B区北半平面図 …… 27
図版18　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層、SI3464竪穴建物ほか断面図（1）…… 28
図版19　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層、SI3464竪穴建物ほか断面図（2）…… 29
図版20　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層写真（1）…… 30
図版21　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層写真（2）…… 31
図版22　SI3464竪穴建物、SD3475溝、SX3480鍛冶炉写真 …… 34
図版23　SB3465掘立柱建物出土遺物 …… 37
図版24　SX3466切土出土遺物（1）…… 38
図版25　SX3466切土出土遺物（2）…… 39
図版26　SI3464竪穴建物、SD3470・3475溝、基本層出土遺物 …… 40
図版27　A区出土遺物写真 …… 41
図版28　SB3465掘立柱建物、SX3466切土出土遺物写真 …… 42
図版29　SX3466切土出土遺物写真 …… 43
図版30　SX3466切土、SD3470・3475溝、基本層出土遺物写真 …… 44
図版31　遺構・層の変遷 …… 48
図版32　第Ⅰ期外郭南門西側の調査、第97次調査区写真 …… 55
図版33　平面図 …… 56
図版34　調査区、SD3412溝、SK3413土坑 平面・断面図・写真 …… 57
図版35　第97次調査出土遺物 …… 59
図版36　第97次調査出土遺物写真 …… 61
図版37　第46次調査出土金銅製刀装具 …… 63
図版38　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（1）…… 65
図版39　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（2）…… 66
図版40　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（3）…… 67
図版41　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（4）…… 68
図版42　多賀城廃寺跡全体図 …… 69
図版43　瓦塔・瓦堂の部位名称 …… 69
図版44　屋蓋部実測図 …… 70
図版45　軸部・相輪部実測図 …… 72
図版46　屋蓋部（1）…… 78
図版47　屋蓋部（2）…… 79
図版48　屋蓋部（3）・軸部（1）…… 80
図版49　軸部（2）・相輪部 …… 81

表目次

第1表　多賀城跡調査研究委員会委員 …… 1
第2表　多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画 …… 1
第3表　第96・97次調査検出遺構・登録遺構番号一覧 …… 9
第4表　SB3465柱穴一覧 …… 25
第5表　第96次調査遺物写真の登録番号一覧（1）…… 40
第6表　第96次調査遺物写真の登録番号一覧（2）…… 41
第7表　SX3466の出土遺物集計 …… 46
第8表　第96次調査出土土器・陶磁器の破片集計 …… 49
第9表　第96次調査出土鉄製品・土製品・石製品ほかの点数集計 …… 50
第10表　第96次調査出土鉄製品・土製品・石製品ほかの重量集計 …… 50
第11表　第96次調査出土軒丸・軒平瓦の点数・重量集計 …… 50
第12表　第96次調査出土丸・平瓦の点数集計 …… 51
第13表　第96次調査出土丸・平瓦の重量集計 …… 51
第14表　第97次調査出土土器・磁器・石製品の破片集計 …… 62
第15表　第97次調査出土軒丸・軒平瓦、塼の集計 …… 62
第16表　第97次調査出土瓦の点数集計 …… 62
第17表　第97次調査出土瓦の重量集計 …… 62
第18表　第97次調査遺物写真の登録番号一覧 …… 62
第19表　政庁西辺第3次整地層出土の瓦観察表 …… 64
第20表　瓦塔（屋蓋部）属性表（1）…… 75
第21表　瓦塔（屋蓋部）属性表（2）…… 76
第22表　瓦塔（軸部・相輪部）属性表（1）…… 76
第23表　瓦塔（軸部・相輪部）属性表（2）…… 77
第24表　多賀城跡環境整備事業第10・11次5ヵ年計画 …… 82
第25表　令和4年度現状変更一覧 …… 83

例　　言

1．本書は、令和４年度に実施した多賀城跡第96・97次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、多賀城関連遺跡発掘調査事業、関連研究事業、普及活動の概要等および、第46次調査で出土した金属製品、第３・９・16次調査で出土した瓦、第25・26次調査（多賀城廃寺跡）で出土した瓦塔の追加報告を収録したものである。
2．当研究所の発掘調査と環境整備事業については、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認に基づいて実施している。
3．測量原点については政庁正殿身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ１°04′東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標（第Ⅹ系）の座標値は、東日本大震災後（平成24年）に実施した再測量の成果から以下のとおりである。
　正殿　　世界測地系　　X座標：−187968.3530ｍ、Y座標：13560.4850ｍ、標高：32.964ｍ
　南門　　世界測地系　　X座標：−188037.4930ｍ、Y座標：13559.3150ｍ、標高：29.799ｍ
4．本書における遺構の位置の表記については、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離（ｍ）で示している。
　例：W5 ＝ 原点から西に５ｍ、S3 ＝ 原点から南に３ｍ
5．本書で使用した遺構記号は、SB：掘立柱建物、SI：竪穴建物、SK：土坑、SD：溝、SX：切土・整地層・鍛冶炉、P：柱穴・ピットである。
6．土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖17版』日本色研事業株式会社（1996年）にもとづく。
7．瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
8．漆紙文書の解読・釈文作成については、宮城県教育庁文化財課の吉野武氏、須恵系土器の年代観と白磁の分類・年代観については、宮城県教育庁文化財課の高橋透氏にご教示頂いた。
9．当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 外郭跡Ⅰ−南門地区−』を『外郭Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南面地区−城前官衙遺構・遺物編−』を『南面Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ−城前官衙総括編−』を『南面Ⅱ』、『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ−政庁南大路・南北大路−』を『南面Ⅲ』、『多賀城施釉陶磁器』を『施釉陶磁器』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2010』と記し、複数の年報の場合は『年報1983・2006』、『年報2011～2014』などと記す。
10．本調査で得た資料については、宮城県教育委員会で保管している。
11．本書の内容の一部については、『第96次調査現地説明会資料』、『令和４年度宮城県遺跡調査成果発表会資料集』、『第49回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』で紹介しているが、本書の内容が優先する。
12．本書の整理は、遺物を、初鹿野博之・鈴木貴生・柴田とみ子・菊池摩耶、遺構を、初鹿野・鈴木・菊池が担当した。
13．本書の作成にあたっては所員で討議と検討を行い、Ⅰ・Ⅱを初鹿野、Ⅲを初鹿野・鈴木、Ⅳを高橋栄一・初鹿野・矢内雅之、Ⅴを白崎恵介・初鹿野・古田和誠・鈴木が執筆し、初鹿野・鈴木が編集した。

調査要項

多賀城跡第96・97次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会（教育長　伊東昭代）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長　高橋栄一）
調 査 員	高橋栄一・白崎恵介・初鹿野博之・古田和誠・鈴木貴生・矢内雅之
調査期間	第96次：令和４年４月26日～令和４年10月12日 第97次：令和４年５月18日～令和４年７月26日
調査面積	第96次：約280㎡　第97次：約150㎡
調査参加者	市川菖暁・伊藤竜子・氏家雅夫・奥　清志・佐藤有佳利・鈴木幸夫・畑中和子・升　孝司（多賀城跡調査研究所会計年度任用職員）、趙　娜・椿野智之・三浦毓・高野征人・狩野紗良・住吉陽太・宮坂和弥・楠裕人・佐々木晴・長岡彩幸（東北大学）
整理参加者	柴田とみ子・菊池摩耶（多賀城跡調査研究所会計年度任用職員）

Ⅰ．調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで５ヵ年計画を立案して行っている（第１表）。

令和４年度は、多賀城跡発掘調査第11次５ヵ年計画４年次目の事業として、政庁北側の政庁地区北方を対象に第96次調査、政庁南面の坂下地区を対象に第97次調査を実施した（第２表）。また、環境整備第11次５ヵ年計画３年次目の事業として政庁南面地区の遺構表示工等を、多賀城関連遺跡発掘調査第８次５ヵ年計画４年次目の事業として大崎市大吉山瓦窯跡の第２次調査を実施した。

以下、本書では主に多賀城跡第96・97次調査の内容を記すとともに、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏　　名		所　　属	専門分野
委員長	佐藤　信	東京大学名誉教授	古代史学
副委員長	藤澤　敦	東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館長	考古学
委　員	小野　健吉	大阪観光大学教授	庭園史学
委　員	熊谷　公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委　員	黒田　乃生	筑波大学教授	造園学
委　員	櫻井　一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委　員	佐々木由香	金沢大学人間社会研究領域付属古代文明・文化資源学研究センター特任准教授	植物学
委　員	藤井　恵介	東京大学名誉教授	建築史学
委　員	古瀬奈津子	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委　員	本中　眞	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	造園学

第１表　多賀城跡調査研究委員会委員（任期：令和３年４月１日～令和５年３月31日）

年　度	次数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31（令和元）年	93次	外郭北西隅（丸山・新西久保地区）	300㎡	外郭北西隅の区画施設と付属施設の確認
令和２年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和３年	95次	政庁地区北方	700㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和４年	96次	政庁地区北方	200㎡	政庁北・北西側の沢状地形における遺構の確認
	97次	外郭南辺（坂下地区）	150㎡	第Ⅰ期外郭南門西側の区画施設の確認
令和５年	98次	外郭西辺北部・中央部（新西久保地区）	700㎡	外郭西辺区画施設の確認

第２表　多賀城跡発掘調査第11次５ヵ年計画（令和４年度委員会承認）

Ⅱ．第96次調査

1．調査の目的と経過

（1）目的

第96次調査は、前年度に引き続き政庁北側の調査資料の蓄積を目的として、政庁地区北方を調査対象とした（第２表、図版１～４）。これまでに、第19・31・32・76・94・95次で調査を行っており、丘陵尾根部と丘陵斜面ないし沢状地形の範囲を調査対象としている（図版3）。

政庁北辺築地塀北側の丘陵尾根上では、第19・31・32・76次調査において、大型の掘立柱建物４棟が「コ」字形に配置された「政庁北方建物」（『補遺編』）と竪穴建物２棟（SI2806・2813）を検出した。政庁北方建物は、政庁遺構期第Ⅳ期（以下、政庁遺構期を省略する）のもので、政庁と密接な関連を持つ施設であり、地形上の制約によって政庁中軸線より西寄りに位置している（『本文編』）。また、SI2806は第Ⅲ期の中でも前半段階とみられることから、「伊治公呰麻呂の乱」による火災後の一時的な施設と推定した（『年報2004』、『補遺編』）。

政庁より北西側に続く丘陵尾根では、第94・95次調査で大型の掘立柱建物２棟を検出した（『年報2020・2021』）。SB3415は桁行６間、梁行３間の北・東に廂が付く南北棟で、年代は第Ⅲ期以降の９世紀中葉から後半頃と推定した。西側柱列は政庁西辺築地塀の北側延長線上に柱筋を揃えて位置しており、計画的に配置された建物と考えられる。SB3450は桁行６間、梁行２間の東西棟で、方向は東で北にやや偏り、等高線に平行する。年代は第Ⅲ期以降の９世紀代と推定した。

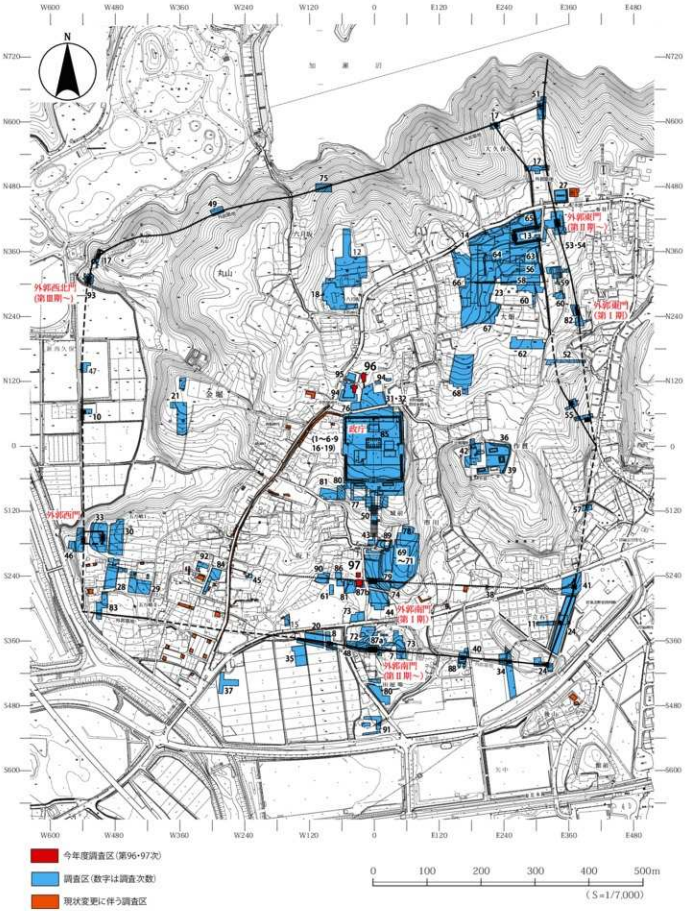
政庁の北～北東側にかけて広がる丘陵斜面および沢状地形内部では、第31・32次調査において、沢状地形の南側の斜面で第Ⅲ期以降の掘立柱建物４棟（SB1017・1022・1023・1026）（『年報1977』）、沢状地形内で第Ⅲ期の竪穴建物３棟（SI1024・1063・1065）（『年報1978』）、第94次調査Ｂ区において、沢状地形の北側の斜面で掘立柱建物を構成する可能性がある柱穴や竪穴建物１棟（SI3439）を検出した（『年報2020』）。

この他に、平成５・６年度には市道市川線（塩竈街道）西側で特別史跡の現状変更に伴う発掘調査を行い、調査面積は狭いながらも複数の掘立柱建物を検出した（『年報1993・1994』）（図版2）。

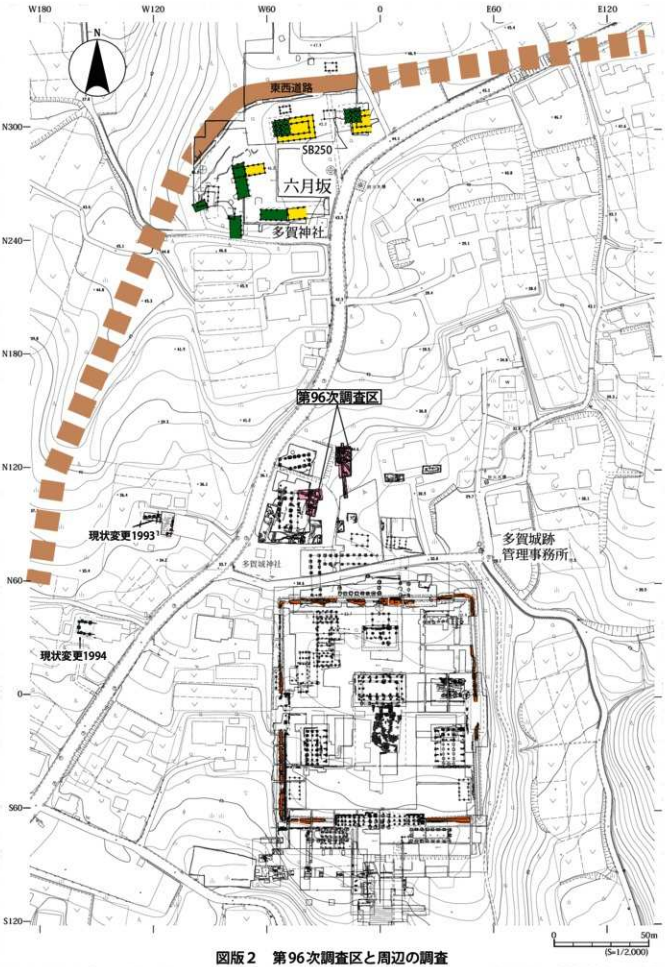
これまでの調査で、政庁地区北方では、①第Ⅲ期以降の遺構が分布すること、②丘陵尾根上に大型の掘立柱建物群である政庁北方建物や竪穴建物、丘陵斜面や沢状地形に小型の掘立柱建物や竪穴建物が分布すること、さらに、③政庁北方建物以北の丘陵尾根上にも計画的に配置された大型の建物が分布することが明らかとなった。そこで、第96次調査では、第95次調査で検出したSB3415・3450の東側において遺構の分布を把握し、加えて、沢状地形内の堆積層の分布や年代などを把握し、地形と遺構分布との関連性を確認することを目的とした。

（2）調査の経過と方法

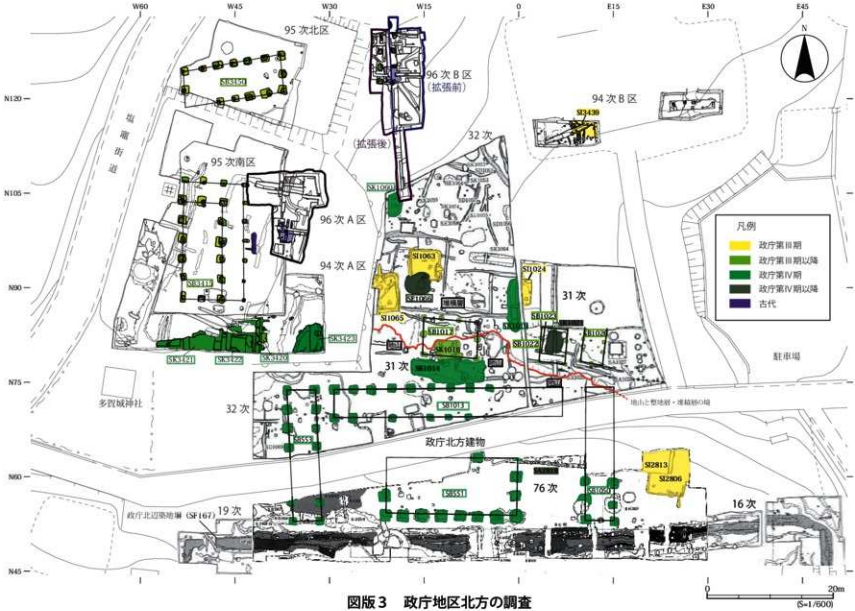
〔調査区の設定と表土除去〕 対象地は多賀城跡政庁北側隣接地に所在し、政庁正殿の基準点から北へ94～133ｍ、西へ15～43ｍの範囲に位置する（図版2）。第95次調査南区と北区の東側にそれぞ



図版１　第96・97次調査区の位置



図版２　第96次調査区と周辺の調査



図版３　政庁地区北方の調査

れ調査区を設定し、A区・B区とした。A区は第95次調査南区と一部重複しており、東西と南北の両方向で地形・層を把握するため、調査区を「T」字形とした。B区は第95次調査北区から約10m東側にあり、北西から南東へ下る緩斜面で、南北方向に長い調査区を設定した。

調査は4月26日に開始した。重機による表土除去をA区→B区の順に行い、4月27日に終了した（図版5-2）。A区では、第95次南区の遺構および東壁の一部を再検出し、その東側に沢状地形の堆積層を確認した。B区では、表土下で須恵系土器小片を含む黒褐色層がほぼ全体を覆っており、旧地形が良好に残っている状況が看取された。

〔A区の調査〕 5月9日から人力による遺構検出に着手した（図版5-3）。沢状地形の堆積土上面で、第95次南区から続く溝を検出し、一部掘り下げ等を行った。A区東半部では、第95次調査で近世以降と推定した第Ⅱ層が堆積する前段階で、地山まで広く削平を受けている状況を確認した。調査は5月25日に一旦中断し、第97次調査がほぼ完了した6月22日から再開した。沢状地形の堆積層の掘り下げを行った結果、新たに古代の竪穴建物1棟などを検出・調査した。8月1日～4日にかけて平面図・断面図の作成、9月2日に水準測量を行い、図面作成まで完了した。

〔B区の調査〕 5月16日から人力による遺構検出に着手した（図版5-4）。須恵系土器を含む黒褐色の堆積層を掘り下げながら遺構確認を行った結果、複数の遺構面があることを確認し、特にB区北半部において、最下層の地山面で柱穴や竪穴建物を検出した。また、柱穴の検出面では地山の斜面を平坦に切土していること、切土の底面付近および柱抜取穴に多量の炭を含む層が堆積し、鉄滓を含むことから、鍛冶工房の存在を想定した。これらの遺構が調査区西側に広がる可能性が高いと判断したことから、調査研究委員会での審議を経て、重機により調査区を西側に拡張した。あわせて、第32次調査区の基本層序との対応関係をみるため、南側へも延長した（図版3）。

9月5日からB区拡張部の調査を本格的に開始した。鍛冶工房の存在を推定した切土部分においては、鍛造剥片等の微細遺物を回収するため、炭の層を検出した段階で50cm単位の小グリッドを設定し、土壌の全量回収を行いながら地山面まで掘り下げて柱穴の検出を行った。その結果、柱穴を全部で8個検出し、建物全体の規模・構造を把握するには至らなかったが、東西1間以上、南北3間以上の掘立柱建物であること、切土より南側で盛土造成も行われていることを確認した。なお、切土底面で鍛冶炉とみられる遺構は検出されず、断面の堆積状況からみて、炭の層は北側から廃棄された可能性が高いと判断した。9月21日から平面図・断面図の作成と水準測量を行い、10月5日にB区の調査を完了した。

〔撤収・埋め戻し〕 現地説明会終了後の9月21日から、図面の作成と並行して遺構の養生と器材の撤収を行い、10月11日にB区、12日にA区を埋め戻して、野外調査を終了した（図版5-8）。

〔調査成果の検討・公開等〕 調査期間中の7月14・15日には、多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに調査内容を報告し、その審議を経て成果に関する指導と承認を受けた（図版5-5）。それを踏まえて9月15日には調査成果を報道機関に公開し、9月17日に現地説明会を開催した（図版5-7）。参加者は80名である。また、9月1日から9月16日には東北大学考古学実習の一環として、東北大学学生10名が調査に参加した（図版5-6）。

調査後の令和４年12月10日には、宮城県考古学会主催の「令和４年度宮城県遺跡調査成果発表会」で成果を報告するとともに、主な出土遺物を展示し、調査に関する助言を受けた。令和５年２月には『第49回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』で調査概要を報告した。

〔調査記録の作成方法〕 平面図・断面図は遺り方測量により、縮尺1/20で図面用紙に手書きで作成した。また、図面作成や遺物取上げに使用するため、政庁内に埋設された「内城」と「内城W」を基に、トータルステーション（ソキア製CX-107F）を用いて調査区内に３m四方のグリッドを設定した。

遺構の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、撮影時には色調補正のためグレーカードを使用した。空中写真撮影にはドローン（DJI製AIR2S：2,000万画素）を使用し、９月14日にＡ区とＢ区の全景、９月26日にＢ区の掘立柱建物部分について撮影を行った。空中写真の保存形式はJPEGである。

〔遺構・遺物の整理〕 遺構平面図・断面図、遺物実測図のトレースにはドローソフト（Adobe Illustrator）を、遺物拓本のデジタル化は画像編集ソフト（Adobe Photoshop）を用いた。

遺物の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、色調補正のためスパイダーチェッカーを使用した。遺構・遺物写真は画像編集ソフト（Adobe Photoshop）で補正・調整を行い、TIFF形式で保存した。

〔遺構・遺物の登録〕 第96次調査で新たに検出した遺構については、遺構登録台帳の3460～3480番に登録した（第３表）。遺物は整理用平箱で64箱分出土しており、水洗、接合の後に種類・器種・数量・特徴等を調書としてまとめ、遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物230点を抽出して登録番号を付した。登録番号は、土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・鉄滓についてはR1～R230を使用し、施釉陶磁器については『施釉陶磁器』の登録方法にならい、Ｒ番号に加えて緑釉・灰釉陶器に96-1～8、青磁・白磁にNo.332～336を付した。

撮影した写真についてはデジタル写真台帳に登録して管理している。登録番号は、遺構写真がＺ9513～9615、空中写真がＺ9616～9638、遺物写真がＺ9690～9800・9825、その他の写真（調査の様子など）がＺ9639～9656である。本書に掲載した遺構写真については、登録番号を掲載写真の右下に記載し、遺物写真については掲載写真との対応関係を第５・６表に示した。

１．政庁と第96次調査区（南から）　〔Z9619〕

２．第96次調査区遠景（南から）　〔Z9624〕

図版４　第96次調査区遠景写真

1．調査地点近景（南東から）　〔Z9640〕

2．重機による表土除去（南東から）〔Z9641〕

3．A区の調査（南から）　〔Z9643〕

4．B区の調査（北西から）　〔Z9644〕

5．多賀城跡調査研究委員会の現地指導　〔Z9647〕

6．考古学実習（遺構精査）　〔Z9651〕

7．現地説明会　〔Z9654〕

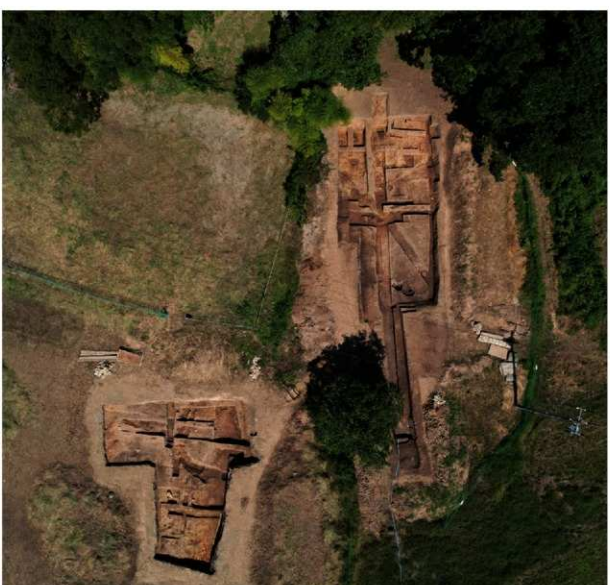
8．調査区の埋め戻し（南から）　〔Z9656〕

図版５　第96次調査・公開の様子

番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図
1060	SK	土坑	32・96	－	図版7・15	－
3415	SB	掘立柱建物	95・96	－	図版7	－
3418	SI	竪穴建物	95・96	－	図版7	－
3451	SD	溝	95・96	19p	図版8	図版10
3453	SD	溝	95・96	19p	図版8	図版10
3454	SD	溝	95・96	－	図版8	－
3455	SD	溝	95・96	20p	図版8	図版10
3460	SI	竪穴建物	96	16p	図版12	図版12
3461	SK	土坑	96	19p	図版8	図版10
3462	SD	溝	96	20p	図版8	図版10
3463	SD	溝	96	21p	図版8	図版10
3464	SI	竪穴建物	96	33p	図版17	図版18・19
3465	SB	掘立柱建物	96	25p	図版17	図版18・19
3466	SX	切土	96	25p	図版17	図版18・19
3467	SX	整地層	96	32p	図版17	図版18・19

番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図
3468	SD	溝	96	32p	図版17	図版18
3469	SD	溝	96	32p	図版17	図版18
3470	SD	溝	96	32p	図版17	図版19
3471	SK	土坑	96	33p	図版15	－
3472	SK	土坑	96	33p	図版17	－
3473	SD	溝	96	34p	図版17	図版19
3474	SD	溝	96	35p	図版17	図版19
3475	SD	溝	96	35p	図版17	図版19
3476	SD	溝	96	35p	図版15	－
3477	SD	溝	96	35p	図版15	－
3478	SD	溝	96	35p	図版15	－
3479	SD	溝	96	35p	図版15	－
3480	SX	鍛冶炉	96	36p	図版17	－
3412	SD	溝	97	58p	図版33	図版34
3413	SK	土坑	97	54p	図版34	図版34

第３表　第96・97次調査　検出遺構・登録遺構番号一覧



全景（上が北）　〔Z9627〕

図版６　第96次調査区全景写真

W51
W45
W39
W33
W27
W21
W15
N132
N126
N120
N114
N108
N102
N96
N90
N84
第 95 次調査 北区
SB3450
第 94 次
A-1 区
第 95 次調査 南区
SB3415
SD3455A・B
SK3461
SD3451
SD3462
第 96 次調査 A 区
SD3454
SI3460
SD3453
SD3463
SI3418
第 94 次
A-2 区東
第 94 次A-2 区南
SK3472
SK3466
SD3473
SD3474
SD3469
SD3468
SD3475
SB3465
SD3470
SK3467
SK3480
SI3464
SK3471
SD3476
SD3477
SD3478
SD3479
第 96 次調査 B 区
SK1060
SK
1060
SK1059
第 32 次調査 区
SI1063
SE1066
SI1065
SB1
0
10m
(S=1/250)

図版７　遺構配置図

2．A区の調査成果

（1）地形と調査区

第96次調査区が位置する政庁地区北方の地形は、外郭東門付近から西に延び、六月坂地区で南方向に分岐して政庁と城前官衙へ至る丘陵尾根に対し、政庁と作貫地区を分かつ深い谷が、政庁の北側で東から西方向へ陥入する沢状地形となる（図版1～3）。第95次調査の成果から、この沢筋と推定した一帯の旧地形や層の広がりを把握するため、第96次A区は東西約13ｍ、南北約15ｍで「T」字形の調査区を設定した。現地形は宅地造成の際の切土と盛土により平坦面となっており、現地表面の標高は34.4～35.0ｍで、北西から南東にわずかに傾斜する。旧地形は沢状地形による東西方向の傾斜が大きく、地山面の標高は、最も高いA区北西隅で34.8ｍ、最も低いA区北東隅で33.2ｍである。

（2）層序

A区は第95次南区と一部重複するため、基本層序も第95次に合わせて８層に大別した。各層の説明は第95次調査（『年報2021』）に準じるが、以下、今年度観察・変更した点を中心に記述する。

第Ⅰ層：現代の表土・盛土。厚さはA区北東隅で現地表面から最大110cmである。

第Ⅱ層：第Ⅲ層上の遺構面を覆う堆積層である。今回の調査でA区東部において、第Ⅲ層以下を大きく削平した後に堆積している状況を確認した（図版10）。厚さは最大90cmである。色調や混入物によって最大で６層（第Ⅱａ～ｆ層；第95次の細分とは非対応）に細分し、このうちａ・ｂ・ｅ層はA区全体で広くみられるが、ｃ・ｄ・ｆ層は北壁際のみに分布する。これまでの出土遺物から、近世以降と推定している。

第Ⅲ層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト層で、炭化物片と須恵系土器小片を多く含む。上面でSD3453～3455溝を検出した。

第Ⅳ層：第Ⅲ層と第Ⅴ層の間に認められる黄褐色を基調とする層で、第95次ではａ・ｂに細分した。今回の調査ではA区北壁断面（図版10-A断面）で第Ⅳａ層を再確認したが、南・東側へ面的に広がる状況は確認されなかった。

第Ⅴ層：黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト層で、炭化物片と土器小片を多く含む。第Ⅳ層同様、A区北壁断面（図版10-A）で部分的に確認したが、平面的な広がりは確認されなかった。

第Ⅵ層：第Ⅶ層を覆う堆積層で、第95次ではａ～ｃに細分した。このうち今回のA区に分布するのは第Ⅵｃ層のみで、にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層に炭化物片を少量含む。上面でSK3461土坑、SD3451溝を検出した。

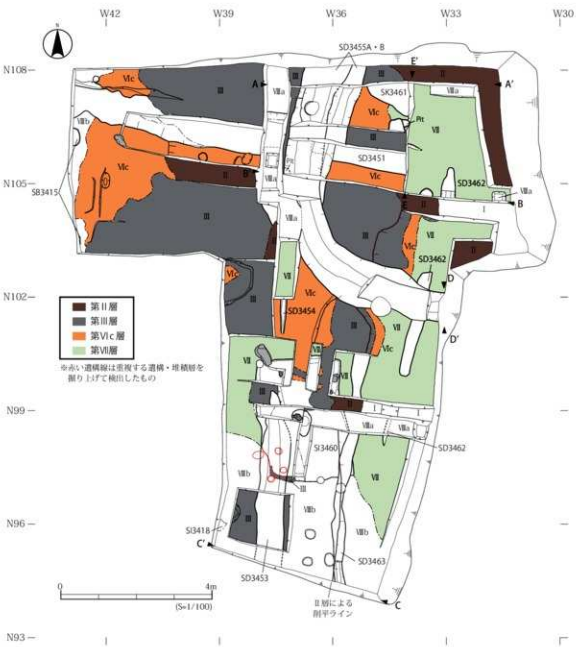
第Ⅶ層：第Ⅵ層直下で、地山ブロックを多く含む堆積層である。第95次の第Ⅶａ・ｂ層に対応し、炭化物や遺物をわずかに含むが、平面的に層の細分は認められなかったため、今回はまとめて第Ⅶ層とする。上面でSI3460竪穴建物、SD3462・3463溝を検出した。

第Ⅷ層：地山。黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト（風化した岩盤）を基調とする第Ⅷａ層と、明黄褐色（10YR7/6）岩盤の第Ⅷｂ層に分かれる。第95次の第Ⅶｃ・ｄ層は遺物を含まず、地山へ漸移的に変化していく状況を確認したため、今回は第Ⅷａ層に含めることとした。

第Ⅷb層は主にSI3460より南側に分布する。

（3）発見遺構と出土遺物

第96次A区で新たに検出した遺構は、竪穴建物1棟（SI3460）、土坑1基（SK3461）、溝2条（SD3462･3463）で、このほかに、溝4条（SD3451･3453～3455）の再検出および延長の検出等を行った。また、SB3415掘立柱建物とSI3418竪穴建物の一部を再検出した（図版8、第3表）。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、灰釉陶器、瓦、石製品、鉄製品、鉄滓、近世以降の陶器がある。



図版8　A区　平面図

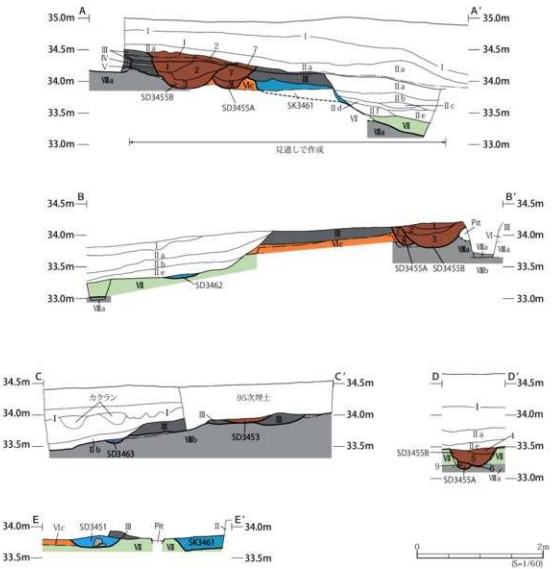
以下、第96次で新たに検出した遺構、および第95次の延長を検出した溝３条（SD3451・3453・3455）について記述する。SB3415、SI3418、SD34354については、『年報2021』の報告した内容から新たな情報を得ていないため、記述を省略する。

1．全景（上が北）　〔Z9628〕

2．全景（南から）　〔Z9524〕

3．全景（北から）　〔Z9525〕

図版9　A区　全景写真



遺構・層		土色	土性	含有物など	備考
SD3451	1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭、土器片を少量含む	自然
SD3453	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	粗砂を含む	自然
SD3455B	1	灰黄褐色(10YR5/2)	粘土質シルト	焼土粒を少量、炭化物粒、地山粒を微量含む	自然
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	暗赤褐色(5YR3/2)砂との互層、炭化物粒、焼土粒を少量、地山粒を微量含む	
	3	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	暗赤褐色(5YR3/2)砂との互層、炭化物粒、焼土粒、地山粒を微量含む	
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	暗赤褐色(5YR3/2)砂との互層、焼土粒を少量含む	自然
	5	褐色(10YR4/6)	シルト	炭化物粒、焼土粒を少量含む	
	6	黒褐色(10YR2/3)	粘土質シルト	炭化物片を含む	
SD3455A	7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒、焼土粒、地山粒を微量含む	自然
	8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土粒、地山粒を少量、炭化物粒を微量含む	
	9	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物粒を微量含む	自然
SK3461	1	褐色(10YR4/6)	シルト	灰色砂粒を多量、炭化物片を少量、炭化物粒、焼土粒を微量含む	人為
SD3462	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物粒、地山粒を少量含む	自然
SD3463	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭を少量含む	自然

図版10　A区　断面図

1．北壁（A－A′）西半断面（南から）〔Z9517〕

2．北壁（A－A′）東半断面（南から）〔Z9518〕

3．B－B′東半断面（北西から）〔Z9515〕

4．B－B′西半断面（北から）〔Z9514〕

5．南壁（C－C′）東半断面（北から）〔Z9520〕

6．南壁（C－C′）西半断面（北から）〔Z9519〕

7．SK3461 全景（東から）〔Z9538〕

8．SD3455 断面（西から）〔Z9540〕

図版11　A区　写真

① 竪穴建物

【SI3460竪穴建物】（平面図・断面図：図版12）

〔検出〕南区東部中央のN99・W36付近に位置する。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅲ・Ⅵc層に覆われる。遺構検出後、一部を床面まで掘り下げ、中央で炉を検出した。カマド・煙道・柱穴は検出されない。

層	土色	土性	含有物など	備考
1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・粒をやや多量含む	埋土
2	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土粒を多く含む	炉埋積土
3	黒色	炭		炉埋積土
4	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	硬くしまる。地山ブロックを多量含む	掘方埋土

SI3460　SD3462　SD3463　第Ⅲ層　第Ⅵc層　第Ⅶ層

図版12　SI3460竪穴建物　平面・断面図

〔重複〕 SD3453・3463溝と重複し、これらより古い。

〔規模〕 東西2.5ｍ、南北3.3ｍの不整な方形を呈する。壁は西辺で高さ約30cmである。

〔方向〕 西辺は、南北基準線より北で西に約６°偏る。

〔埋土〕 １層確認し、人為的に埋め戻されている。埋土上面には第Ⅲ層の堆積する小穴・小溝（植物の根によるものか）が多くみられ、一部は床面に及ぶ。

〔床面〕 北・西・南壁際では第Ⅶ層を床面とする。それ以外の中央から東壁際にかけては掘方埋土（４層）を床面とし、地山ブロックを多く含む硬くしまった明黄褐色（10YR6/6）シルトである。

１．全景（東から）〔Z9530〕

２．東西（F－F′）断面（南から）〔Z9531〕

３．南北（G－G′）断面南半（東から）〔Z9534〕

４．南北（G－G′）断面北半（東から）〔Z9535〕

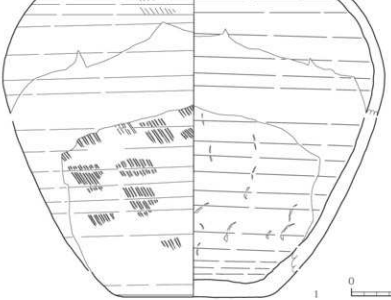
５．炉検出（東から）〔Z9536〕

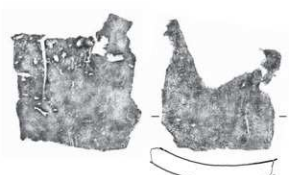
６．炉半截（東から）〔Z9537〕

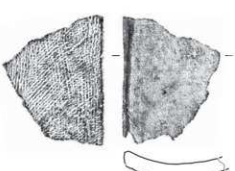
図版13　SI3460竪穴建物　写真

〔炉〕 床面ほぼ中央で地床炉を検出した。南北約70cm、東西20cm以上の範囲が被熱赤変し、中央の直径約25cmの範囲が特に強く被熱硬化している。東西断面でみると、床面から2～3cm程度浅い皿状に窪み、中央に焼土ブロックを含む層（2層）、その周囲に炭の層（3層）が分布する。

〔出土遺物〕 埋土から土師器の坏・高台坏、須恵器の坏・甕（図版14-1）、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅠA（図版14-2）・ⅠC・ⅡB類（図版14-3、27-4）が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ3がある。また、平瓦には焼瓦が認められる（図版27-2・5）。







0　20cm
(2・3:S=1/5)

(単位：cm)

No.	層	種類	残存	法量	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	埋土	須恵器　甕	頸1/3～胴上部 胴下部～底ほぼ完形	最大径(30.3)　底径11.0　器高(31.8)	外：平行タタキ→ロクロナデ 内：当て具痕→ロクロナデ	27-1a・b	R15	B16178
2	埋土	平瓦	破片	厚さ2.4	ⅠA類　焼瓦	27-2	R19	B16179
3	埋土	平瓦	破片	厚さ2.1	ⅡB類a3　凸面：部分的に斜行の縄叩き	27-3	R21	B16179

図版14　SI3460竪穴建物　出土遺物

② 土坑

【SK3461土坑】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区北東部のN 107・W 34付近に位置し、北側は調査区外に延びる。遺構確認面は第Ⅵc層で、第Ⅲ層に覆われる。東側は第Ⅱ層による削平で失われており、その部分で断面を確認した。

〔規模〕 平面形は不明で、規模は東西113cm以上、南北88cm以上である。断面形は逆台形と推定され、深さは20cm以上である。南北方向の底面は西から東へ下る傾斜である。

〔埋土〕 1層確認し、人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕 確認面の遺物だが、土師器坏、須恵器甕、須恵系土器の坏または皿、灰釉陶器の椀（図版27-7）、丸瓦ⅡB類、平瓦ⅡB類が出土した。平瓦ⅡB類にはbタイプがある。

③ 溝

【SD3451溝】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区北部のN 105～108・W 34～43に位置する。第95次で検出した全体は「コ」字状の溝で、その北東部の東西方向の溝について、再検出および延長の検出を行った。遺構確認面は第Ⅵc層で、第Ⅲ層に覆われる。東側は第Ⅱ層による削平で失われ、その部分で断面を確認した。以下、主に今回調査した部分について記述する。

〔重複〕 第95次調査区でSB3415掘立柱建物と重複し、これより新しい。SD3455溝と重複し、これより古い。

〔規模〕 今回検出した延長部分は長さ約3.5mで、第95次調査と合わせて東西方向の検出長は約11.0mである。東端部で確認した上幅は80cm、深さ17cm、断面形は逆台形を呈し、底面は西から東へ下る傾斜である。

〔方向〕 東西方向は、東西基準線より東で南に14°偏る。

〔堆積土〕 東端部で1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏・甕、須恵器の坏・長頸瓶、須恵系土器の坏または皿、平瓦ⅠA類が出土した。平瓦には焼瓦が認められる。

【SD3453溝】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区南部のN 95～100・W 37～38に位置する。北東-南西方向の溝で、遺構確認面は第Ⅲ層である。北半部を再検出するとともに、北側延長の平面検出を試みたが、確認されなかった。北端部については堆積土を掘り下げ、平面図等を記録した後に、全体をSI3460竪穴建物検出面まで掘り下げた。

〔重複〕 SI3460と重複し、これより新しい。

〔規模〕 第95次調査を合わせた検出長は16.6m、上幅は最大80cmである。堆積土を掘り下げた北端部では、深さ最大13cmで、断面形は浅い「U」字状である。底面は北から南へやや下る傾斜である。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ5～14°偏る。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から須恵器甕、須恵系土器坏または皿、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類が出土した。

【SD3455溝】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区北部のN101～108・W33～38に位置する。遺構確認面は第Ⅲ層である。第95次調査では断面のみ確認し、堆積土が水成堆積層とみられることなどから東西方向の自然流路と推定したが、今回の調査で、A区北壁から東壁にかけて弧状に曲がる平面形を検出した。堆積土を部分的に掘り下げて調査した結果、平面・断面形から人為的な溝の可能性が高いと判断した。新旧2時期があり、古い方からA→Bとする。

〔重複〕 SD3451・3462溝と重複し、これらより新しい。

〔規模〕 B溝は検出長約8.5m、幅最大155cm、深さ57cm、断面形は逆台形状である。A溝は北西-南東方向部分のみ検出し、検出長約3.7m、幅70cm以上、深さ42cm、断面形は逆台形状である。A・Bともに、底面は北から南、西から東へ向かって下る傾斜である。

〔堆積土〕 B溝は北半部で3層（1～3層）、東端部で3層（4～6層）確認し、いずれも自然堆積である。このうち2～4層は、砂とシルトの互層からなる水成堆積層である。A溝は北半部で2層（7～8層）確認し、自然堆積である。なお、B溝の東端断面（図版10-D断面）で最下層に確認した9層も、A溝の可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏・蓋・甕、須恵器の坏・長頸瓶・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅡA・ⅡB・ⅡC類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはa1・a3・bタイプがある。

【SD3462溝】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区東部のN98～106・W32～35に位置する。北東-南西方向の溝を断続的に検出し、規模・堆積土から一連の溝と判断した。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅱ層による削平を受ける。北端部と南端部で断ち割りを行った。なお、位置・方向的にSD3451溝と一連で、SD3451が「コ」字状から方形になる可能性も想定したが、SD3451東端の溝底面とSD3462北端の検出面では、後者が約30cm低く、同一の溝となる可能性は低いと判断した。

〔重複〕 SD3455溝と重複し、これより古い。

〔規模〕 検出長は7.6m、上幅は断面で最大60cm、深さ9cmで、断面形は浅い「U」字状である。底面は、南から北へやや下る傾斜である。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ約13°偏る。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の甕、須恵器の瓶または壺が出土した。

【SD3463溝】（平面図：図版8、断面図：図版10）

〔検出〕 A区南部のN 94～101・W 35～36に位置する。北東−南西方向の溝で、溝の南側は調査区外へ延びる。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅵ層に覆われる。南端部のみ断ち割りを行った。

〔重複〕 SI3460竪穴建物と重複し、これより新しい。

〔規模〕 検出長は6.0 m、上幅最大42cm、深さは8 cmで、断面形は浅い「U」字状とみられる。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ約8°偏るが、南半部で折れてほぼ南北方向となる。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏、須恵器の坏・甕が出土した。

④ 基本層出土遺物

第Ⅶ層から土師器の甕、須恵器の瓶または壺、丸瓦Ⅱ類が出土した。

第Ⅵ層から須恵器の坏・甕、平瓦が出土した。

第Ⅲ層から土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の小皿・坏または皿・高台坏または高台皿、灰釉陶器の瓶（図版27−9）、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠC・ⅡB・ⅡC類、砥石が出土した。軒平瓦２点は分類不明の顎部付近の小片で、赤彩が残存する。平瓦ⅡB類にはaタイプ２・bタイプがあり、丸瓦ⅡB類と平瓦ⅠA類には焼瓦が認められる。

第Ⅱ層から土師器の坏・高台坏・鉢・甕、須恵器坏・瓶または壺・甕、須恵系土器坏または皿・高台坏または高台皿、白磁の碗または皿（図版27−10・11）、灰釉陶器の瓶（27−8）、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠC・ⅡB・ⅡC類、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄滓、近世以降の陶器が出土した。軒平瓦は分類不明の小片で、顎部に鋸歯文がある。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ２・bタイプがあり、平瓦ⅡC類には刻印記号「上」がみられる（27−6）。丸瓦と平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。鉄滓には椀形滓がある。

第Ⅰ層から土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・高台坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿、軒平瓦、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠC・ⅡB・ⅡC類が出土した。軒平瓦は分類不明の顎部付近の小片で、赤彩が残存する。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ１がある。

3．B区の調査成果

（1）地形と調査区

第96次B区は、政庁北側に入る沢状地形の北側に位置する。現況は北西から南東へ下る緩斜面で、現地表面の標高は32.6～35.5 mである。調査の経過で記述した通り、南北方向に長い調査区を設定し、遺構の検出状況に応じて西側と南側に拡張した結果、東西最大9 m、南北約30 mの範囲を調査した。

B区の西側約10 mにある第95次北区は、過去に盛土造成がされているため、現地表面でB区と1 m以上の高低差がある。地山検出面の標高は、第95次北区の北東隅が35.6 m、B区の北西隅が34.9 mで、高低差は約0.7 mである。

（2）層序

７層に大別した。第96次Ａ区との関係については、層の特徴が類似するＡ区第Ⅲ層とＢ区第Ⅱ層が対応する可能性が高いが、Ａ区第Ⅳ層以下との対応については明確でない。

第Ⅰ層：現代の表土・盛土。厚さはＢ区北端で約30cm、Ｂ区南端で約70cmである。

第Ⅱ層：暗褐色（10YR3/4）シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに含む。須恵系土器小片を多く含む。Ｂ区北端以外のほぼ全域に分布し、厚さは最大34cmである。Ｂ区南端部で、第32次第２層に対応することを確認した。

第Ⅲ層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに含む。Ｂ区北半部（Ｎ117以北）に全体的に分布し、厚さは最大20cmである。Ｂ区南半部には分布しないため、第32次との対応関係は不明である。上面でSD3475溝、SX3480鍛冶炉などを検出した。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、地山粒と炭化物粒をわずかに含み、酸化鉄がやや多く混ざる。Ｂ区北端部を除く全域に分布し、厚さは最大31cmである。上面でSK3471土坑、SD3476～3479溝を検出した。南端部で第32次第４層と対応することを確認した。

第Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、地山ブロックをやや多く含み、酸化鉄がやや多く混ざる。Ｂ区南端部に分布し、厚さは最大22cmで、第32次第５層に対応する。

第Ⅵ層：第Ⅳ・Ⅴ層下に分布する褐色でやや硬くしまった層である。Ｂ区中央部（Ｎ114～124付近）で検出した第Ⅵａ層と、Ｂ区南端部（Ｎ111以南）で検出した第Ⅵｂ層に分かれるが、両者の前後関係は明確でない。第Ⅵａ層は褐色（10YR4/3）シルトで、地山粒をわずかに含む。上面でSI3464竪穴建物を検出した。また、第Ⅳ層との境に炭・焼土を薄い層状に含む部分がある（図版15炭集中）。第Ⅵｂ層は褐色（10YR4/4）粘土質シルトで、地山粒・炭化物を含み、酸化鉄が多く混ざる。第32次調査の第６層に対応し、上面でSK1060土坑を検出した。

第Ⅶ層：主に明黄褐色（10YR6/7）の岩盤からなる地山。Ｂ区北部（Ｎ124以北）で確認した。上面でSB3465掘立柱建物、SX3466切土、SX3467整地層などを検出した。なお、Ｂ区北東部で風倒木とみられる落ち込みを検出し（図版15）、周辺（Ｎ125以北・Ｗ19以東）には攪乱を受けたとみられるブロック状の岩盤が堆積していたが、精査の結果、非常に硬くしまっていて岩盤との境が不明瞭なこと、遺物を含まないことから、古代の遺構が形成されるより古い風倒木痕と判断し、ここでは地山に含めて報告する。

（3）発見遺構と出土遺物

第96次Ｂ区で検出した遺構は、掘立柱建物１棟（SB3465）、竪穴建物１棟（SI3464）、土坑３基（SK3471・3472・1060）、溝10条（SD3468～3470・3473～3479）、鍛冶炉１基（SX3480）で、このほかに、掘立柱建物に伴う切土（SX3466）、整地層（SX3467）がある（図版15、第３表）。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、青磁、白磁、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、漆紙文書、近世以降の陶器がある。

以下、各遺構について記述するが、掘立柱建物に付属すると判断した切土・整地層・溝については

図版15　B区　平面・南北縦断面図

1．全景（上が北）〔Z9630〕

2．南北（H－H′）N 129 付近の断面〔Z9592〕（南東から）

3．南北（H－H′）N 123 付近の断面〔Z9550〕（東から）

4．南北（H－H′）断面南半（北から）〔Z9544〕

図版16　B区　写真

まとめて報告する。なお、SK1060土坑は第32次調査と基本層序の対応関係を確認するために一部を再検出したもので、詳細は省略する。

① 掘立柱建物と切土・整地層・溝

B区北部のN 122～N 131・W 18～24の範囲で、SB3465掘立柱建物、SX3466切土、SX3467整地層、SD3468～3470溝を検出した。SX3466の南側にSX3467が分布し、切土底面および整地層上面でSB3465の柱穴を検出したこと、切土はSB3465の北側柱列に位置・方向を合わせていること、切土底面で検出したSD3468～3470も切土と一連の堆積で埋まっていることから、これらを一連の遺構と判断した。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅵa層に覆われる。

【SB3465掘立柱建物】（平面図：図版17、断面図：図版19）

〔検出〕 B区北部のN 122～131・W 19～23の範囲で、8個の柱穴を検出した。東西1間以上、南北3間以上で、西側と南側は調査区外に延びる可能性があり、建物全体の規模・方向は確定していない。ここでは、北東隅の柱穴を基準（N1E1）とし、N1～4、E1～2の組み合わせで表記する。このうち、N1E2の柱穴は東半部を底面まで半截して調査した。

〔重複〕 SI3464竪穴建物、SD3473溝と重複し、これらより古い。また、建物の構築に伴って、SX3466切土・SX3467整地層による造成が行われており、柱穴はこれらの造成後に掘り込まれる。

〔柱間〕 柱抜取穴の中央付近で計測すると、E1列は北から2.3-2.5-2.4 m、E2列は北から2.3-2.4-2.4 mである。東西方向は2.0～2.1 m間隔となる。

〔方向〕 南北方向の柱列は、南北基準線より北で東に0～1°偏する。東西方向の柱列は、東西基準線より東で北へ1～5°偏する。

〔柱穴〕 柱穴検出面の標高は、E1列では33.2～34.3 m、E2列では33.6～34.2 mである。北から南へ緩やかに傾斜しており、東西方向はほぼ平坦だが、N3E1とN4E1はSI3464の削平を受けているため40～50cm低い。掘方平面形は隅丸方形を基調とし、長辺59～89cm、短辺50～80cmである。掘方埋土は、検出面では地山ブロックを多く含む黄褐色・褐色シルトを基調とする。半截したN1E2は掘方の深さ66cmで、2層に分かれる。すべての柱穴で柱抜取穴を検出し、このうち北半部を中心に5個の柱抜取穴には炭を多く含む層が堆積しており、後述するSX3466の下層（7層）と一連の堆積である。それ以外の3個の柱抜取穴には、炭化物・地山ブロックを少量含む褐色（10YR4/4）シルトが堆積する。半截したN1E2では、7層下の廃棄層8層が柱の痕跡をある程度反映しているとみられ、直径24cm以下と推定される。

柱穴	検出面標高m	掘方cm 南北	掘方cm 東西	柱抜取穴	備考
N1E2	34.2	89	30～	●	西半部未検出、東半部半截、深さ66cm
N2E2	34.1	82	73	●	
N3E2	33.9	97	80	●	南半部はSX3467整地層上面で検出
N4E2	33.6	72	87	○	SX3467整地層上面で検出

柱穴	検出面標高m	掘方cm 南北	掘方cm 東西	柱抜取穴	備考
N1E1	34.3	707	60	●	抜取穴が大きく、掘方南半部未検出
N2E1	34.0	82	73	●	
N3E1	33.4	50	59	○	SI3464竪穴建物床下で検出
N4E1	33.2	62～	89～	○	SI3464竪穴建物床下で一部検出

●は炭を多く含む（SX3466-7層対応）

第4表　SB3465柱穴一覧

〔出土遺物〕 掘方埋土からは、土師器の甕、須恵器の坏（図版23-1）・瓶または壺、鉄滓が出土した。柱抜取穴からは、土師器の坏（23-2）・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・鉢（23-3）・瓶または壺・甕、平瓦ⅠA類、鉄滓が出土した。土師器坏には、両面にミガキと黒色処理を施したもの（23-2）がある。また、柱穴確認面の出土遺物として、鉄滓、鞴の羽口があり、鉄滓には椀形滓（23-4）がみられる。

【SX3466切土】（平面図：図版17、断面図：図版18・19）

〔検出〕 B区北部のN 125～131・W 18～24の範囲で検出した。南北方向の斜面に対して地山を切下げて、平坦に改変している。北端部では東西5.2 m以上にわたって切土による段を確認し、SB3465掘立柱建物の北側柱列に位置・方向を合わせている。

〔重複〕 SD3473・3474溝と重複し、これらより古い。

〔規模〕検出範囲は東西5.2ｍ以上、南北3.7ｍで、西側は調査区外に延び、南側は第Ⅳ層による削平を受ける。底面において３条の溝（SD3468～3470）や段差を検出したが、埋土は切土と一連のため､ほぼ同時に掘り込まれたと考えられる。南北方向の勾配は、切土より北側の地山が９～10°(約17％）に対し、切土底面は調査区西壁際で２～３°（約４％）である。

切土北端部の段差は、Ｎ130･Ｗ22付近で最大60cm（底面標高34.2ｍ）を測る。東西両側は徐々に浅くなり、調査区西壁際で53cm（同34.3ｍ）、東端部では12cm（同34.4ｍ）である。段の方向は、東西基準線より東で北へ５°偏する。東端部で南に屈曲し、南北方向も長さ0.9ｍ分検出したが、それより南側は不明確で徐々に浅くなるとみられる。

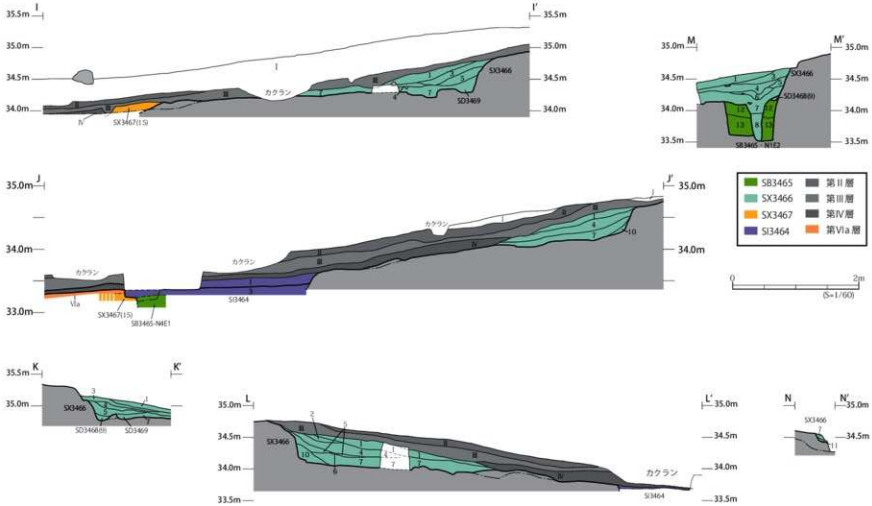
〔埋土・堆積土〕11層に分かれ、大部分が切土北端部の段付近に分布する。１・４・６・７・８層が人為的な埋戻しもしくは廃棄層で、２・３・５・９・10・11層が自然堆積である。９～11層は、北端部から東端部にかけての段直下に分布し、９層はSD3468内にも堆積する。７・８層は炭化物を多く含む廃棄層で、Ｎ127以北の切土底面直上に広く分布するほか、SD3469・3470内、SB3465の柱抜取穴内（第４表）にも分布する。６層は均質な粘土で、SB3465-N1E2柱抜取穴の上部にできた窪地に廃棄されたとみられる。自然堆積の５層を挟んで、４層で再び炭化物を多く含む廃棄層が形成される。２・３層が自然堆積した後に、地山ブロックを多く含む１層で埋め戻される。

〔出土遺物〕遺物は１層、２～６層、７・８層に分けて取り上げており､ここでは「上層」「中層」「下層」として報告する。なお、微細遺物回収のため50cmグリッドを設定して層ごとに土壌回収を行っているが、それらの資料は選別終了後に改めて報告する予定であり、ここでは、野外調査時に現場で回収した遺物を対象に報告する。また、鉄製品についてもサビ落とし終了後に改めて報告する予定である。

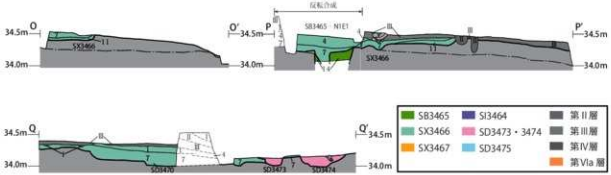
下層からは、土師器の坏（図版24-１・２）・高台坏（24-３）・蓋・甕（24-４）、須恵器の坏（24-５～12）・高台坏・蓋（24-13・14）・稜埦（図版25-１～４）・鉢・瓶または壺・甕（25-５）、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄滓、鞴の羽口、土玉（図版28-９・10）、凝灰岩切石、石英塊、漆紙文書（図版30-(1)）が出土した。土師器坏には両面にミガキと黒色処理を施したもの（24-１）があり、須恵器蓋・稜埦には、両面にミガキを施したもの（24-13・14、25-１～４）がある。また、土師器の坏･甕には漆が付着したものがみられる（24-４）。平瓦ⅠＡ類にはａタイプ、ⅡＢ類にはａタイプ３があり、平瓦ⅠＡ類とⅡＢ類には焼瓦が認められる。鉄滓には、椀形滓（25-６・７）がみられる。漆紙文書(1)はウルシ面に２文字あり、オモテ面から左文字で観察される。

中層からは、土師器の坏・蓋・甕、須恵器の坏・高台坏・高坏（図版25-９）・蓋（25-８）・鉢・短頸壺（25-11）・瓶または壺・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＤ・ⅡＢ類、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄滓、鞴の羽口、土錘（図版30-５）、漆紙文書（30-(2)(3)）が出土した。土師器の坏・蓋には両面にミガキと黒色処理を施したものがあり、須恵器の蓋には両面にミガキを施したものが認められる。須恵器の壺には平城宮分類の壺Ｇとみられるもの（25-10）がある。平瓦ⅡＢ類にはａタイプ３とｂタイプがあり、平瓦ⅡＢ類には焼瓦が認められる。鉄滓には椀形滓（25-12）がみられる。漆紙文書(2)は、オモテ面とウルシ面の両方に文字があり、ウルシ面は複数文字とみられる。(3)は上端部

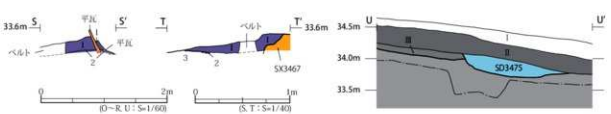
図版17　B区北半　平面図



図版18　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層、SI3464竪穴建物ほか　断面図（1）



遺構・層		土色	土性	含有物など	備考	大別
SX3466	1	暗褐(10YR4/6)	シルト	地山粒を多量、地山ブロックを少量、炭化物粒を微量含む	人為	上層
SX3466	2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒、地山粒を微量含む	自然	中層
	3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒、地山粒を微量含む	自然	
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒を多量、地山粒を少量含む	廃棄	
	5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を多量含む	自然	
	6	明黄褐色(10YR7/6)	粘土	炭化物粒を極微量含む	廃棄	
SB3465 −N1E2	7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物粒を極多量、地山粒を多量、炭化物片を少量、地山ブロックを微量含む	(抜取ピ)	下層
SX3466 SD3469 SD3470					廃棄	
SB3465 −N1E2	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒を極多量、地山粒を少量含む。	廃棄	
SX3466 SD3468	9	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を極多量、地山ブロックを少量含む	自然	
SX3466	10	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を多量、地山ブロックを少量含む	自然	
	11	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒、地山ブロックを少量含む	自然	
SB3465 −N1E2	12	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を極多量、地山ブロックを多量含む	堀方理土	
	13	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・粒を極多量含む		
SB3465 −N1E1	14	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを極多量、炭化物粒、焼土粒を微量含む	堀方理土	



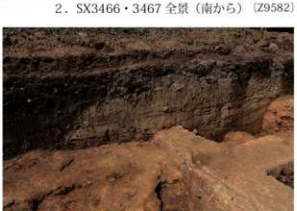
遺構・層		土色	土性	含有物など	備考
SX3467	15	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ブロック・粒を多量、炭化物粒を微量含む	整地
SI3464	1	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒を多量、地山ブロックを少量、炭化物粒、焼土粒を微量含む	埋土
	2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物粒を多量、炭化物片、焼土粒を微量含む	燃焼部構築土
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・粒を多量に含む	堀方理土
SD3473	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・粒、炭化物粒を微量含む	自然
SD3474	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒を微量、炭化物粒を極微量含む	自然
SD3475	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物粒、焼土粒を微量含む	自然

図版19　SB3465掘立柱建物、SX3466切土・3467整地層、SI3464竪穴建物ほか　断面図（2）

1．全景（上が北）〔Z9635〕

2．SX3466・3467 全景（南から）〔Z9582〕

3．SX3466・3467 全景（南西から）〔Z9558〕



4．SX3466 断面（I－I′）北半（南東から）〔Z9588〕

5．SX3466 断面（K－K′）（北西から）〔Z9585〕

図版20　SB3465 掘立柱建物、SX3466 切土・3467 整地層　写真（1）

1．SX3466 断面（L－L′）北半（西から）〔Z9584〕

2．SX3466 断面（Q－Q′）西半（南から）〔Z9587〕

3．SX3467 断面（R－R′）西半（南から）〔Z9600〕

4．SB3465-N1E2 断面（東から）〔Z9567〕

5．SB3465-N2E1 検出（東から）〔Z9561〕

6．SB3465-N3E1 検出（東から）〔Z9562〕

7．SB3465-N2E2 検出（西から）〔Z9568〕

8．SB3465-N3E2 検出（西から）〔Z9569〕

図版21　SB3465 掘立柱建物、SX3466 切土・3467 整地層　写真（2）

において、ウルシ面の文字がオモテ面から見えていると考えられる。オモテ面下半部にも漆が付着しているため、さらに文字が残っている可能性がある。

上層からは、土師器の坏・高台埦・蓋・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・鉢・瓶または壺・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡB類、鉄塊系遺物、鉄滓、鞴の羽口が出土した。土師器の坏・高台埦・蓋には両面にミガキと黒色処理を施したものがあり、須恵器の蓋には両面にミガキを施したものがある。平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

このほかに遺構確認面の出土遺物として、土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏（図版25-13）・蓋・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類、鉄製品が出土した。土師器の坏には両面にミガキと黒色処理を施したものがあり、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

【SX3467整地層】（平面図：図版17、断面図：図版18・19）

〔検出〕 B区北西部のN122～125・W19～24の範囲で検出した。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅵa層に覆われる。SX3466切土同様、SB3465掘立柱建物の構築に伴う造成と考えられ、上面で柱穴3個（N3E2・N4E1・N4E2）を検出した。遺物は出土していない。

〔重複〕 SI3464竪穴建物と重複し、これより古い。

〔規模〕 検出範囲は東西4.0m、南北2.6mで、西側は調査区外に延びる。南側も未検出だが、第Ⅵa層に覆われることを確認した（図版18-J断面）。断ち割りを行っていないため、厚さは不明である。

〔埋土〕 検出面では、地山ブロックを多く含む黄褐色（10YR5/6）シルトで、炭化物をわずかに含む。

【SD3468・3469・3470溝】（平面図：図版17、断面図：図版18・19）

B区北西部（N125～130・W21～24）のSX3466切土底面（第Ⅶ層上面）で検出した溝群についてまとめて記述する。SD3468とSD3469は重複し、SD3469が新しい。

SD3468はSX3466の段直下で検出した東西方向の溝で、東端は未検出だが、SB3465-N1E2柱穴（図版18-M断面）の9層が対応するとみられる。西端はSD3469の削平により徐々に浅くなって失われる。検出長0.6m、幅最大16cm、深さ最大10cmで、断面形は浅い「U」字形である。底面は西から東へわずかに下る傾斜で、方向はほぼ東西基準線に沿う。堆積土は地山粒を多く含む褐色（10YR4/4）シルトで、遺物は出土していない。

SD3469はSD3468と交差する北西-南東方向の溝で、西側は調査区外に延び、南東端は未検出である。検出長0.7m、幅最大35cm、深さ最大6cm、断面形は浅い「U」字形で、底面は北東から南西方向にわずかに下る傾斜である。方向は東西基準線より東で南に約30°偏する。埋土はSX3466-7層と一連であり、出土遺物もSX3466として取り上げている。

SD3470は、SB3465-N1E2～N2E2柱列のすぐ東側に沿う南北方向の溝である。検出長4.2m、幅最大59cm、深さ最大15cm、断面形は逆台形状で、底面は北から南へ下る傾斜である。方向は南北基準線に沿う。埋土はSX3466-7層と一連であり、出土遺物の大部分はSX3466として取り上げて

いる。溝底面付近の遺物として、須恵器の高台坏（図版26-2）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類があり、平瓦には焼瓦が認められる。

② 竪穴建物

【SI3464竪穴建物】（平面図：図版17、断面図：図版18・19）

〔検出〕 B区中央のN 122～125・W 19～21付近に位置する。遺構確認面は第Ⅵa層で、第Ⅳ層に覆われる。遺構検出後、一部を床面まで掘り下げて調査した。

〔重複〕 SB3465掘立柱建物、SX3467整地層と重複し、これらより新しい。SD3475溝と重複し、これより古い。

〔平面形・規模〕 東西2.4ｍ以上、南北3.0ｍの方形で、西辺にカマド・煙道が付属する。西壁は床面から最大30cm立ち上がる。東辺は第Ⅳ層による削平を受け、壁の立ち上がりは確認されない。

〔方向〕 北辺は、東西基準線より西で南に14°偏る。

〔埋土〕 1層確認し、人為的に埋め戻されている。

〔床面〕 掘方埋土（3層）を床面とする。

〔カマド〕 西辺南寄りで検出した。西壁よりやや外側に張り出し、短い煙道が付く。北半部を床面まで掘り下げたところ、燃焼部周辺の床面上に炭の層（2層）が分布する。右袖部分に平瓦が立った状態で出土しており、カマド構築材の可能性があるが、据方は未確認である。平瓦は取り上げていないが、ⅡB類とみられる。煙道は幅最大24cmで、西壁から約20cm西に延びる。

〔出土遺物〕 埋土から土師器の甕、須恵器の甕、須恵系土器の坏または皿、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類、鞴の羽口（図版26-1）が出土している。

③ 土坑

【SK3471土坑】（平面図：図版15）

〔検出〕 B区南半部のN 117・W 20付近に位置する。遺構確認面は第Ⅳ層で、第Ⅱ層に覆われ、東半部は未検出である。平面検出のみを行い、遺物は出土していない。

〔平面形・規模〕 北西-南東方向が80cm以上、北東-南西方向が115cmで、方形と推定される。

〔埋土〕 地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトで、人為的に埋め戻されている。

【SK3472土坑】（平面図：図版17）

〔検出〕 B区北端部のN 132・W 20付近に位置し、西側は調査区外に延びる。遺構確認面は第Ⅶ層である。平面検出のみを行い、遺物は出土していない。

〔規模〕 規模は東西46cm以上、南 北135cm以上の円形と推定される。

〔堆積土〕 地山ブロックを少し含む暗褐色（10YR3/4）シルトで、自然堆積とみられる。

④ 溝

【SD3473溝】（平面図：図版17、断面図：図版19）

〔検出〕 B区北部のN 126～130・W 19～20に位置する、南北方向の溝である。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅳ層に覆われ、南部は未検出である。検出した部分については、SB3465掘立柱建物およびSX3466切土の調査のため、土層観察用のベルトを残して底面まで掘り下げた。

〔重複〕 SB3465掘立柱建物（N2E1柱穴）、SX3466切土と重複し、これらより新しい。

〔規模〕 検出長は3.0m、上幅最大30cm、深さは15cmで、断面形は「U」字状である。底面は北から南へ下る傾斜である。

1．SI3464検出（東から）〔Z9604〕

2．SI3464検出（南から）〔Z9605〕

3．SI3464カマド調査状況（東から）〔Z9610〕

4．SI3464断面（R-R′）東半（南東から）〔Z9609〕

5．SD3475断面（U-U′）（西から）〔Z9614〕

6．SX3480検出（南から）〔Z9615〕

図版22　SI3464竪穴建物、SD3475溝、SX3480鍛冶炉　写真

〔方向〕 南北基準線にほぼ一致する。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏・蓋・甕、須恵器の坏・高台坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類、鉄滓が出土した。土師器の蓋には両面にミガキと黒色処理を施したものがあり、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

【SD3474溝】（平面図：図版17、断面図：図版19）

〔検出〕 B区北部のN 127～130・W 18～20に位置する、南北方向の溝である。遺構確認面は第Ⅶ層で、第Ⅳ層に覆われ、南部は未検出である。検出した部分については、SX3466切土の調査のため、土層観察用のベルトを残して底面まで掘り下げた。

〔重複〕 SX3466と重複し、これより新しい。

〔規模〕 検出長は2.4 m、上幅最大83cm、深さは23cmで、断面形は浅い「U」字状である。底面は北から南へ下る傾斜で、途中に6 cmの段差が認められた。

〔方向〕 南北基準線より北で西へ約7°偏る

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏、須恵器の坏・瓶または壺、須恵系土器の坏または皿、軒平瓦、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。須恵器の瓶または壺の底部には、漆の付着したものがみられる。軒平瓦は二重弧文510である。

【SD3475溝】（平面図：図版17、断面図：図版19）

〔検出〕 B区東部のN 120～128・W 15～19に位置する。遺構確認面は第Ⅲ層で、第Ⅱ層に覆われる。弧状にめぐる溝で、東側は調査区外に延びる。北半部は検出後に底面まで掘り下げ、平面形がやや角張る部分が確認された。

〔重複〕 SI3464竪穴建物と重複し、これより新しい。

〔規模〕 溝の外径は約7.5 m、溝に囲まれた内部は南北4.2 m、東西2.1 m以上である。溝の幅は最大192cm、深さ26cm、断面形は浅い「U」字状である。底面を検出した北半部では、北西から南東へ向かって下る傾斜である。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏（図版26-3）・坏または皿（26-4）・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類が出土した。平瓦ⅡB類にはbタイプがある。

【SD3476～3479溝】（平面図：図版15）

B区南部（N 110～118・W 18～20）で平面検出のみ行った4条の溝について、まとめて記述する。確認面は第Ⅳ層上面で、第Ⅱ層に覆われる。SD3476とSD3477は重複し、SD3476が新しい。

SD3476は検出長0.6ｍ、幅最大27cmで、西側は調査区外に延びる。方向はほぼ東西基準線に沿う。堆積土は炭化物を多く含む黒褐色（10YR3/1）粘土質シルトで、自然堆積である。須恵系土器の小皿が出土している。

SD3477は検出長2.9ｍ、幅最大23cmで、南側は調査区外に延びる。方向は南北基準線より北で東に6°偏する。堆積土は炭化物を多く含む灰黄褐色（10YR4/2）シルトで、自然堆積である。

SD3478は検出長0.8ｍ、幅最大113cmで、東西両側が調査区外に延びる。方向はほぼ東西基準線に沿い、やや湾曲する。堆積土は炭化物を多く含む灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

SD3479は検出長0.8ｍ、幅最大48cmで、東西両側が調査区外に延びる。方向は東西基準線より東で北に7°偏する。堆積土は炭化物を多く含む黒褐色（10YR3/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

⑤ 鍛冶炉

【SX3480鍛冶炉】（平面図：図版17）

〔検出〕 Ｂ区北東部で、SD3475溝に囲まれた内部のＮ124・Ｗ16付近に位置する。遺構確認面は第Ⅲ層で、第Ⅱ層に覆われる。平面検出のみ行った。

〔規模〕 炉は東西34cm、南北30cmの楕円形で、第Ⅲ層を掘りくぼめて火床としている。壁面は全体的に黒色で硬化しているほか、北壁に暗赤褐色（5YR3/2）の酸化が確認される。

〔堆積土〕 暗褐色（7.5YR3/3）シルトに炭化物粒が混ざり、焼土粒や鉄滓をわずかに含む。

⑥ 基本層出土遺物

第Ⅴ層から平瓦ⅠＡ類が出土した。

第Ⅳ層から土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・長頸瓶・瓶または壺・甕、須恵系土器の小皿・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ・ⅡＣ類、鉄塊系遺物、鉄滓が出土した。軒平瓦には偏行唐草文620、平瓦ⅠＡ類にはａタイプがあり、平瓦ⅡＢ類には焼瓦が認められる。

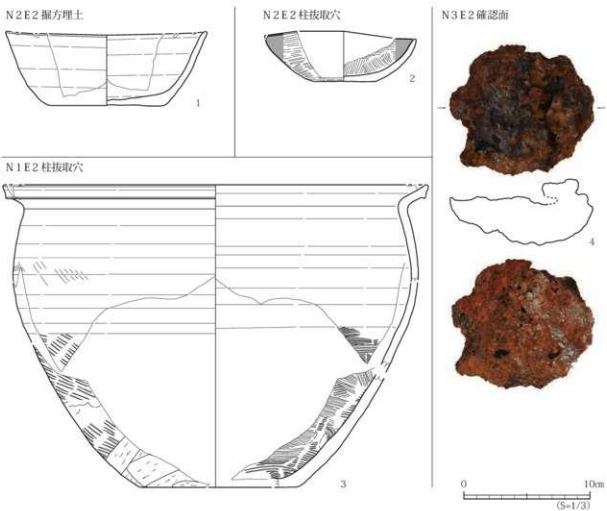
第Ⅲ層から土師器の坏・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・鉢・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＣ・ⅡＢ・ⅡＣ類、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄滓が出土した。須恵器の蓋には両面にミガキを施すものが認められる。軒平瓦には単弧文640の焼瓦、平瓦ⅡＢ類にはｂタイプがあり、丸瓦と平瓦ⅡＢ類には焼瓦が認められる。鉄滓には椀形滓（図版26-5）がみられる。

第Ⅱ層から土師器の坏・高台坏・鉢・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・鉢・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏・小皿（図版26-7）・坏または皿・高台坏または高台皿・鉢、青磁の碗（図版30-11）、灰釉陶器（30-15）、軒丸・軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦Ⅰ・ⅠＡ・ⅠＣ・ⅠＤ・ⅡＢ・ⅡＣ類、鉄製品、鉄塊系遺物、鉄滓、鞴の羽口、砥石もしくは台石が出土した。土師器の坏には両面にミガキと黒色処理を施したものがあり、須恵器の蓋には両面にミガキを施すものが認められる。また、須恵器の坏には漆の付着したものがみられる。軒丸瓦には蓮花文313、軒平瓦には単弧文640がある。平瓦

ⅠＡ類にはａタイプ、ⅡＢ類にはａタイプ１～３とｂタイプがある。丸瓦ⅡＢ類と平瓦ⅡＢ類ａタイプ１には、刻印文字瓦「物」が各１点あり、丸瓦と平瓦には焼瓦が認められる。鉄滓には椀形滓（図版26-6）がみられる。

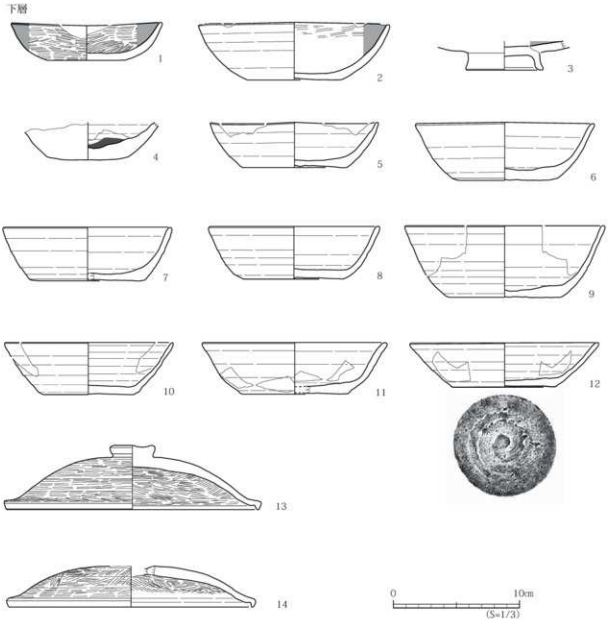
第Ⅰ層から土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・高台坏・蓋・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、白磁の碗（図版30-13）、灰釉陶器の埦（30-16）・皿（30-17）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＢ・ⅠＣ・Ⅱ・ⅡＢ・ⅡＣ類、鉄滓が出土した。須恵器の蓋には両面にミガキを施すものがある。平瓦ⅠＡ類にはａタイプ、ⅡＢ類にはａタイプ２があり、平瓦ⅡＢ類には焼瓦が認められる。鉄滓には椀形滓がみられる。

そのほか、出土層が不明確な資料として、白磁の碗（図版30-12）、緑釉陶器（30-14）・灰釉陶器（30-18）の高台部がみられる。



No.	層	種類		現存	法量	特徴	写真図版	登録	遺物番号
1	版方埋土	須恵器	坏	口1/6～底部1/1	口径(16.0)　底径9.0　器高5.9	外内：ロクロナデ　底：切り離し不明→手持ちヘラケズリ	28-1	R134	B16179
2	抜取穴	土師器	坏	口1/3～底部ほぼ完形	口径12.0　底径5.0　器高4.0	外内：ミガキ→黒色処理　底：ミガキ	28-2	R135	B16179
3	抜取穴	須恵器	鉢	口1/3～胴上半 胴下半～底部1/6	口径(33.6)　底径(12.0) 器高(24.0)	外：(胴)叩き→(口～胴上半)ロクロナデ→(胴下半)ケズリ 内：(胴)当て具→(口～胴上半)ロクロナデ→(胴下半)ハケ目→(胴下半)ヘラナデ	28-3ａ・ｂ	R160	B16180
4	遺構確認面	椀形鍛冶滓		－	長11.5　最大幅10.5 最大厚5.3　重600g	下面に木炭片	－	R208	B16183

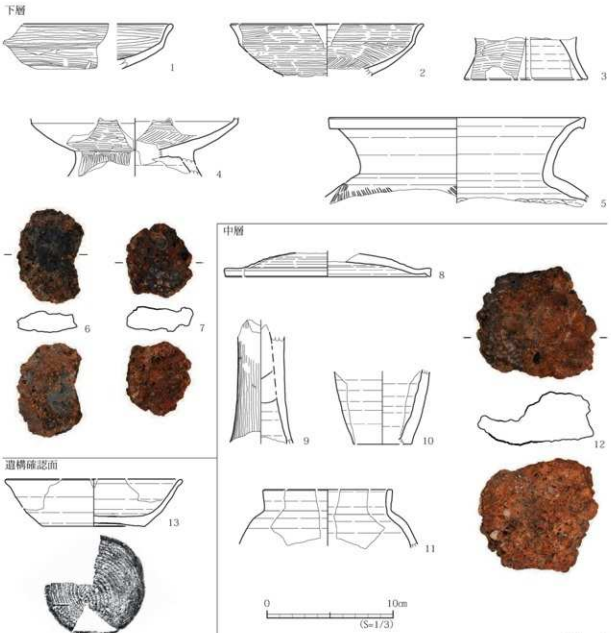
図版23　SB3465掘立柱建物　出土遺物



（単位：cm）

No.	層	種類	残存	口径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	遺物番号
1	下層	土師器　坏	□1/4～底部1/1	(12.0)	6.0	3.0	外内：ミガキ→黒色処理　底：ミガキ	28-11	R138	B16181
2	下層	土師器　坏	□1/3～底部1/2	(15.0)	7.5	4.6	外：ロクロナデ　内：ミガキ→黒色処理　底：磨滅により切り離し不明	28-12	R149	B16181
3	下層	土師器 高台坏 or 高台埦	高台部1/1	－	6.2	－	外：黒色処理(器面の風化が著しい)　内：器面の風化が著しい 底：高台貼付	28-13	R142	B16181
4	下層	土師器　甕	底部ほぼ完形	－	6.5	－	外：器面の風化が著しい　内：ロクロナデ　内面に漆付着	28-4	R169	B16179
5	下層	須恵器　坏	□1/3～底部1/2	(13.4)	8.3	3.6	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	28-14	R145	B16181
6	下層	須恵器　坏	□1/3～底部1/2	(14.0)	8.4	4.6	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	28-15	R144	B16181
7	下層	須恵器　坏	□～底部4/5	(13.4)	9.2	4.3	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	28-16	R151	B16181
8	下層	須恵器　坏	□1/2～底部1/1	(13.6)	8.0	4.2	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り　外内に火襷痕	29-4	R92	B16181
9	下層	須恵器　坏	□一部～底部2/3	(15.9)	8.8	5.7	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	29-1	R95	B16181
10	下層	須恵器　坏	□1/3～底部1/1	(13.4)	7.4	4.1	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り　外内に火襷痕	29-5	R121	B16181
11	下層	須恵器　坏	□1/3～底部4/5	(14.7)	8.5	4.1	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	29-2	R111	B16181
12	下層	須恵器　坏	□1/4～底部1/1	(15.0)	8.0	3.5	外内：ロクロナデ　底：回転ヘラ切り	29-3	R137	B16181
13	下層	須恵器　蓋	□1/3～ つまみ1/1	(20.0)	－	5.1	つまみはつぶされた宝珠形　外：ロクロナデ→回転ケズリ→回転ミガキ →(縁辺)手持ちミガキ 内：ロクロナデ→ミガキ 外内面に火襷痕・重ね焼き痕　外面縁辺にスサの繊維質残る	29-7	R150	B16182
14	下層	須恵器　蓋	□～体部1/3	(19.4)	－	－	外内：ロクロナデ→ミガキ　外面に自然釉付着　内面に重ね焼き痕	29-6	R162	B16182

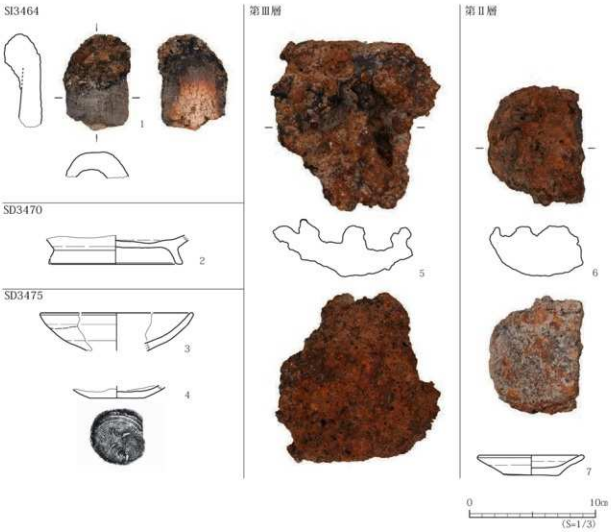
図版24　SX3466切土　出土遺物（1）



（単位：cm）

No.	層	種別	残存	法量	特徴	写真図版	登録	取番号
1	下層	須恵器　横瓶	口～体部～部	－	外内：ロクロナデ→ミガキ	28-5	R110	B16179
2	下層	須恵器　横瓶	口1/5～体部	口径(15.2)	外：ロクロナデ→回転ケズリ→回転ミガキ 内：ロクロナデ→ミガキ	28-6	R125	B16179
3	下層	須恵器　横瓶カ	脚部1/4	底径(9.6)	外：ロクロナデ→ミガキ　内：ロクロナデ	28-7	R157	B16179
4	下層	須恵器　横瓶	体部1/6	－	外：ロクロナデ→ミガキ 内：(脚部)ロクロナデ→ミガキ　底：高台貼付	28-8	R165	B16179
5	下層	須恵器　甕	口1/3～胴上部	口径(20.2)	外：タタキ→ロクロナデ　内：当て具→ロクロナデ	29-8	R140	B16182
6	下層	椀形鍛冶滓	－	長8.2　最大幅5.3　最大厚1.8　重70g	上面部分的に流動状	－	R204	B16183
7	下層	椀形鍛冶滓	－	長6.0　最大幅5.4　最大厚2.3　重80g	上面発泡	－	R205	B16183
8	中層	須恵器　蓋	口1/3～体部	口径(16.2)	外内：ロクロナデ	30-1	R104	B16182
9	中層	須恵器　高坏	脚1/2	－	外：ロクロナデ→ミガキ　内：ロクロナデ 内面に擦合痕	30-2	R118	B16182
10	中層	須恵器　壺	体部～底部破片	－	外内：ロクロナデ　底：回転糸切りカ 胎土に黒色粒を含む　壺G	30-3	R114	B16182
11	中層	須恵器　短頸壺	口～胴上部破片	－	外内：ロクロナデ	30-4	R172	B16182
12	中層	椀形鍛冶滓	－	長9.7　最大幅9.3　最大厚4.2　重410g	上面部分的に流動状	－	R209	B16183
13	遺構確認面	須恵器　坏	口一部～底部1/1	口径(14.1)　底径8.1　器高3.8	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	30-6	R47	B16182

図版25　SX3466切土　出土遺物（2）



No.	図版－番	種類	残存	法量	特徴	写真図版	登録	総番号
1	SI3464 埋土上層	羽口	先端部1/3～胴部1/3	長(7.4)　幅(5.2)　厚0.8～1.9	外：ケズリ　内：ナデ　先端部外面に溶着滓	－	R225	B16183
2	SD3470 埋土	須恵器　高台坏	高台部1/1	底径10.6	外内：ロクロナデ(器面の風化が著しい) 底：高台貼付	30-7	R133	B16182
3	SD3475 堆	須恵系土器　坏	口1/6～体部	口径(12.0)	外：ロクロナデ　内：器面の風化が著しい	30-8	R45	B16182
4	SD3475 堆	須恵系土器　皿か	底部1/1	底径4.3	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	30-9	R46	B16182
5	第Ⅲ層	楕形鍛冶滓	－	長13.5　最大幅13.2　最大厚5.2 重920g	上面部分が二波動状	－	R217	B16183
6	第Ⅱ層	楕形鍛冶滓	－	長9.4　最大幅8.0　最大厚4.2 重510g	－	－	R212	B16183
7	第Ⅱ層	須恵系土器　小皿	ほぼ完形	口径8.5　底径4.4　器高1.6	外内：ロクロナデ　底部：回転糸切り(風化が著しい)	30-10	R55	B16182

図版26　SI3464竪穴建物、SD3470・3475溝、基本層　出土遺物

図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号
23	4上	Z9690	1 左	Z9698	2左	Z9706	6右	Z9714	10右	Z9722	4	Z9730	9	Z9738
	4下	Z9691	1 右	Z9699	2右	Z9707	7左	Z9715	11左	Z9723	5左	Z9731	10	Z9739
25	6上	Z9692	26 5上	Z9700	3左	Z9708	7右	Z9716	11右	Z9724	5右	Z9732	11	Z9740
	6下	Z9693	5下	Z9701	3右	Z9709	8左	Z9717	1左	Z9725	28 6左	Z9733	12	Z9741
	7上	Z9694	6上	Z9702	27 4左	Z9710	8右	Z9718	1右	Z9726	6右	Z9734	28 13	Z9742
	7下	Z9695	6下	Z9703	4右	Z9711	9左	Z9719	28 2	Z9727	7左	Z9735	14	Z9743
	12上	Z9696	27 1a	Z9704	5	Z9712	9右	Z9720	3a	Z9728	7右	Z9736	15	Z9744
	12下	Z9697	1b	Z9705	6左	Z9713	10左	Z9721	3b	Z9729	8	Z9737	16	Z9745

第５表　第96次調査遺物写真の登録番号一覧（１）

1～5：SI3460、7：SK3461 確認面、9：第Ⅲ層、6・8・10・11：第Ⅱ層　　(1・7～11：S=1/3、2～6：S=1/5)

図版27　A区　出土遺物　写真

図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号
29	1	Z9746	29	7左	Z9755	30	4右	Z9764	30	11左	Z9776	30	15右	Z9779	30	(1)赤外線	Z9793
	2	Z9747		7右	Z9756		5a	Z9767		11右	Z9777		16左	Z9780		(2)左	Z9794
	3	Z9748		7下	Z9757		5b	Z9768		12左	Z9772		16右	Z9781		(2)右	Z9795
	4左	Z9749	30	8	Z9758		6左	Z9769		12右	Z9784		17左	Z9785		(2)赤外線左	Z9796
	4右	Z9750		1	Z9759		6右	Z9770		13左	Z9782		17右	Z9786		(2)赤外線右	Z9797
	5左	Z9751		2	Z9760		7	Z9771		13右	Z9783		18左	Z9787		(3)右	Z9798
	5右	Z9752		3左	Z9761		8	Z9773		14左	Z9789		18右	Z9788		(3)左	Z9799
	6左	Z9753		3右	Z9762		9	Z9774		14右	Z9790		(1)左	Z9791		(3)赤外線	Z9800
	6右	Z9754		4左	Z9763		10	Z9775		15左	Z9778		(1)右	Z9792			

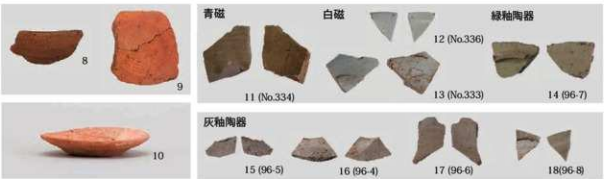
第6表　第96次調査遺物写真の登録番号一覧（2）

1～3：SB3465、4～16：SX3466　　（1～8・11～16：S=1/3、9・10：S=2/3）

図版28　SB3465掘立柱建物、SX3466切土　出土遺物　写真

図版29　SX3446切土　出土遺物　写真

（1～8：S=1/3）



1～6・(1)～(3)：SX3466、7：SD3470、8・9：SD3475、
10・11・15：第Ⅱ層、13・16・17：第Ⅰ層、12・14・18：層不明

(1～4・6～18：S=1/3、5：2/3、(1)～(3)：等倍)

図版30　SX3446切土、SD3470・3475溝、基本層　出土遺物　写真

4．総括

（1）遺物

第96次調査Ａ・Ｂ区では、土器（土師器、須恵器、須恵系土器）、施釉陶磁器（青磁、白磁、緑釉陶器、灰釉陶器）、瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）、土製品（羽口、土玉、土錘）、石製品（砥石または台石、凝灰岩切石、石英塊）、鉄製品、鉄滓、漆紙文書、近世以降の陶器が出土した（第８～13表）。特に、Ｂ区のSX3466切土から古代の遺物がまとまって出土しており、以下で特徴を記述し、年代を検討する。それ以外に年代を推定しうる一部の遺物については、遺構の年代を検討する際に個別に言及する。

１）SX3466切土出土土器

SX3466は、SB3465掘立柱建物の構築に伴い切土が行われたもので、SB3465廃絶後に、複数の廃棄層や人為埋戻し層と、その間に自然堆積層を確認した。現場では上・中・下層に分けて遺物を取り上げ、第７表に集計した。なお、下層と一連の堆積として認められたSB3465北半部の柱抜取穴（第４表の●）、およびSD3470溝出土遺物も、ここでは下層として扱う。層ごとにみると、建物廃絶直後に廃棄され、切土の底面直上や柱抜取穴内部に広く分布する下層の出土量が多い。遺物の種類でみると、土師器坏・甕と須恵器坏の破片数が多いが、口縁部破片で集計すると、各層で須恵器坏が60％前後を占める。中層と下層は炭・鉄滓を多く含む廃棄層（４・７層）が主体で、土器の内容にも大きな差が認められないため、これらの資料を中心に年代を検討する。

【土師器】坏、高台坏（埦）、蓋、甕がみられ、坏と甕が多い。口縁部の点数でみると、坏は下層での出土点数が多く、甕を上回る。内面にミガキ・黒色処理を施すもの（「内黒」とする）と、内外両面にミガキ・黒色処理を施すもの（「両黒」とする）がある。内黒の坏は基本的に調整にロクロを使用しているが、器面は摩滅しており、底部の切り離しが分かるものはない。全体の器形が分かるものは１点（図版24-2）で、底径が口径の半分程度である。両黒の坏（図版23-2、24-1）はやや小ぶりである。そのほかに出土点数は少ないものの、高台の付く坏（または埦）と蓋についても、内黒のものと両黒のものが確認できる。甕は破片資料のみで、口縁部は調整にロクロを使用しているものが多いが、非ロクロとみられるものも含まれる。

【須恵器】坏、高台坏、高坏、稜埦、蓋、壺、鉢、瓶、甕がみられる。須恵器の坏は特に下層において、全体の器形が分かるものが多く出土している（図版24-5～12）。器形は体～口縁部が直線的に外傾し、逆台形状を呈するものが主体である。法量は口径13.4～15.9cm、底径8.0～9.2cm、器高3.5～5.7cmで、底径／口径比は0.53～0.69、器高／口径比は0.23～0.36である。底部の切離しは、中・下層で抽出した底部資料31点すべてが回転ヘラ切りである（註１）。これらの特徴に類似する一括資料として、城内では大畑地区のSI2153竪穴住居跡（『年報1992』）、SK2321土坑８～10層（『年報1995』）があり、前者が８世紀末～９世紀前葉、後者が８世紀後葉頃～９世紀初頭頃に位置付けられる。また、９世紀中葉に位置付けられる大畑地区SE2101B井戸第Ⅲ層出土土器（天長９年＝832年銘の漆紙文書と共伴）（『年報1991』）にも類似するが、SE2101B資料は底部が回転糸切りで、底径が口径の1/2以下の個体を一定数含んでいるため、今回の出土資料よりやや新しいと考える。よって、

SX3466出土土器の年代は、下層・中層を中心として、８世紀後葉～９世紀前葉に位置付けられる。

特徴的な遺物として、中層から平城宮分類の壺Ｇ（図版25-10）が出土している。生産年代は８世紀後葉～９世紀初頭に限定されることから、坏の年代観とも整合する。また、外面もしくは内外面に丁寧なヘラミガキを施すいわゆる「ミガキ須恵器」が複数出土している。非掲載資料も含めて、下層から稜埦４点（図版25-1～4）、蓋３点（図版24-13・14）、中層から高坏１点（図版25-9）、蓋１点、上層から蓋１点がある。胎土が精良であることからも、稜埦と蓋がセットであった可能性が高い。ミガキ須恵器は、多賀城周辺では８世紀末～９世紀中葉に位置付けられるものが多く、高位者用の特別な食器と推定される（宮城県教委2018）。城内で多数出土している地区としては、五万崎地区（50点以上）と城前官衙（12点）がある。政庁地区北方では第31次調査第Ⅷ層で１点、第32次調査北区２層（第96次第Ⅱ層対応）で２点出土しており、今回出土のものを合わせると合計13点となる。政庁南面の城前官衙と同等であり、この地区の重要性がうかがえる。

２）SX3466切土出土その他の遺物

瓦には丸瓦Ⅱ・ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類がある。平瓦には焼瓦とみられるものが複数あること、政庁第Ⅲ期に特徴的な赤褐色の色調の瓦がみられること、第Ⅳ期に特徴的な平瓦ⅡＣ類がみられないことから、第Ⅲ期に廃棄されたものと考えられる。

また、下層・中層を中心に、多量の炭片に混ざって鉄製品・鉄滓・羽口・土玉・土錘・石製品・漆紙文書が出土している。鉄製品・鉄滓（椀形滓）・羽口の存在から鍛冶が行われたこと（註２）、漆紙文書や漆付着土器（図版24-4）の存在から漆作業が行われたことが分かり、これらは城内での生産活動にかかわる遺物と考えられる。堆積状況をみると、切土の北側から廃棄したと考えられ、鍛冶・漆工房が調査区北側の近辺に存在していた可能性が高い。

このほかに、下層出土の被熱した凝灰岩切石はカマドの構築材として、石英塊は火打石としての使用が想定される。均質な粘土層である６層も、カマドや炉の構築材などに使用するために持ち込まれ、廃棄されたものと考えられる。

【土器】上段：破片数　下段：（口縁部点数）

層	土師器							須恵器									
	坏		高台坏or高台埦		蓋		甕	坏	高台坏	器	【ミガキ】高坏	【ミガキ】稜埦	【ミガキ】蓋	鉢	短頸壺	壺G	瓶or壺	甕
	内黒	両黒	内黒	両黒	内黒	両黒												
上層	6 (1)	3 (1)		1 (1)			5 (5)	31 (5)	55 (24)	2	5 (1)			1 (1)	2 (1)			2	7 (1)
中層	**58** **(3)**	**22** **(6)**			**3** **(1)**	**4** **(4)**	**202** **(14)**	**161** **(76)**	**4**	**9** **(5)**	**1**			**1** **(1)**	**1** **(1)**	**1** **(1)**	**1**	**10** **(1)**	**27** **(2)**
下層※	83 (34)	30 (9)	1	1		3 (2)	202 (9)	257 (136)	7	21 (17)		4 (2)	3 (2)	7 (3)				6	46 (7)

【その他】上段：破片数　下段：（重量ｇ）

層	瓦		金属製品		鉄滓			土製品			石製品		漆紙文書
	丸瓦	平瓦	鉄製品	鉄塊系遺物	椀形滓	溶着滓	その他	羽口	土玉	土錘	凝灰岩切石	石英塊	
上層	**4** **(980)**	**14** **(3,550)**		**4** **(133)**		**2** **(24)**	**11** **(305)**	**4** **(57)**					
中層	11 (790)	16 (3,770)	2 (641)	2 (22)	2 (635)	4 (18)	11 (324)	2 (38)		1 (6)			2
下層※	**18** **(3,300)**	**54** **(9,300)**	**6** **(189)**	**2** **(71)**	**3** **(314)**	**21** **(248)**	**19** **(369)**	**13** **(121)**	**2** **(7)**		**1** **(1,720)**	**3** **(42)**	**1**

※下層にはSB3465付属穴とSD3470埋土出土遺物を含む

第７表　SX3466の出土遺物集計

なお、出土した鉄製品はサビ取り、鉄滓は化学分析を行っているところである。また、土壌サンプルに含まれる鍛造剥片等の微細な遺物についても、選別・分析終了後に報告したい。

（2）遺構

政庁地区北方では、これまでの調査から丘陵部で大型の掘立柱建物、沢状地形の縁辺部から内部にかけて竪穴建物が分布するという見解が得られていた。今回の調査でも、沢頭付近に設定したA区でSI3460竪穴建物を検出し、沢状地形の北側斜面に設定したB区では、斜面上方からSB3465掘立柱建物、やや下方からSI3464竪穴建物を検出した。以下、調査区ごとに遺構・基本層の年代を検討したうえで、これらの変遷をまとめておく。

1） A区の遺構・基本層の年代

A区で新たに検出した遺構のうち、SI3460竪穴建物とSD3463溝は、第Ⅶ層を検出面とし、第Ⅵc層に覆われる。第Ⅶ層ではわずかに古代の遺物が出土していることから、8世紀以降と考えられる。また、SI3460廃絶後の埋戻し土からは、平瓦ⅠA類などの焼瓦（図版27-2・5）が出土していること、平瓦ⅡB類には政庁第Ⅲ期に特徴的な赤褐色を呈するもの（図版27-3）があることから、780年の火災後で第Ⅲ期以降と推定される。SI3460埋土より新しいSD3463も同様である。これらを覆う第Ⅵc層の出土遺物はわずかだが、第95次調査で第Ⅵc→b層→SB3450掘立柱建物の変遷を確認しており、SB3450は出土遺物から9世紀代と推定される。よって、SI3460→SD3463→第Ⅵc・b層→SB3450は、8世紀後葉から9世紀代の中で変遷したと考えられる。

SK3461土坑は第Ⅵc層を検出面とし、第Ⅲ層に覆われる。第Ⅵc層の年代から8世紀後葉以降で、確認面で須恵系土器が出土していることから、10世紀代に下る可能性がある。SD3462は、第Ⅶ層を検出面とするが、第Ⅱ層による削平を受けることから、詳しい年代は不明である。

2） B区の遺構・基本層の年代

SX3466切土出土遺物については、先述の通り8世紀後葉～9世紀前葉を主体とし、第Ⅲ期と考えられる。SX3466とSX3467整地層による造成と、SB3465掘立柱建物の構築は一体的に行われたと考えており（註3）、造成・構築の年代は、SX3466出土遺物から9世紀前葉以前となる。今回の調査ではSX3467からの出土遺物は無いが、SB3465の柱穴掘方から須恵器坏（図版23-1）が出土している。底部に手持ちヘラケズリを施す点は、SX3466出土資料より古い様相を示す可能性があるが、SX3466からもほぼ同じ法量のもの（図版24-9）が出土しており、明らかな年代差とはいえない。今のところ、8世紀後葉～9世紀前葉の期間で、造成・構築→廃絶・廃棄が行われたと想定している。

SI3464竪穴建物は、SB3465より新しく、SX3467を覆う第Ⅵa層を検出面とする。よって、第Ⅵa層とSI3464は8世紀後葉以降で、後述する第Ⅳ層の年代から10世紀後半以前と推定しているが、出土遺物からそれ以上年代を絞り込むことは難しい。SD3473・3474溝についても、SB3465・SX3466より新しく、第Ⅳ層に覆われる。これらの溝は堆積土からも須恵系土器が出土しているため、10世紀代に下る可能性がある。

第Ⅳ層・第Ⅲ層は須恵系土器を含む堆積層で、第Ⅳ層に小皿が含まれていることから、多賀城編

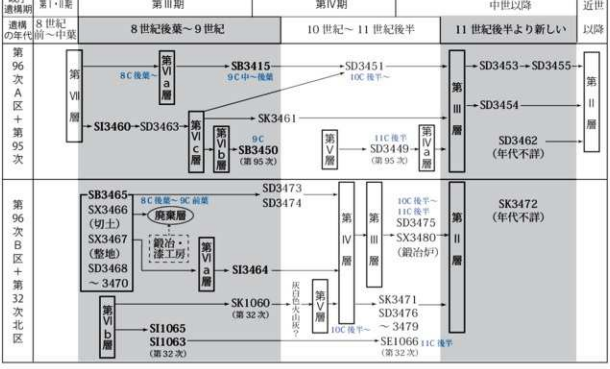
年のＦ群土器に比定され、10世紀後半以降と考えられる（『年報2006』『補遺編』）。SK3471土坑、SD3475～SD3479溝、SX3480鍛冶炉は、第Ⅳ層もしくは第Ⅲ層を検出面とし、10世紀後半以降と考えられる。このうち、SD3475の堆積土からは須恵系土器の坏またはⅢが出土しており、器形が分かるもの（図版26-3・4）はわずかだが、薄い底部から体部に丸みをもって立ち上がるとみられる。このような器形はＦ・Ｇ群土器に多く、Ｈ群土器にはごく少なくなる（『年報2006』）。Ｇ群土器では第32次調査のSE1066井戸出土土器が11世紀後半に位置付けられるため（『補遺編』）、SD3475は11世紀後半が下限と考えられる。また、SD3475がSX3480の周囲に排水用に掘られた溝と考えると、SX3480も同様の年代に位置付けられる。

3）遺構の変遷について

以上の年代の検討を元に、遺構・基本層の変遷を図版31にまとめた。Ａ区には第95次、Ｂ区には第32次の主要な遺構（図版７）も含めている。政庁地区北方では第Ⅰ・Ⅱ期（８世紀前葉～中葉）にさかのぼる確実な遺構は、これまでに確認されていない。

第Ⅲ期から第Ⅳ期（８世紀後葉～９世紀）にかけては、丘陵部に大型の掘立柱建物３棟と、沢状地形部に複数の竪穴建物が分布する。このうち、Ｂ区のSB3465掘立柱建物は、構築に伴う造成～廃絶後の遺物廃棄層も含めて、今のところ８世紀後葉～９世紀前葉の範囲で捉えている。一方、第95次のSB3415掘立柱建物はこれより新しく、９世紀中葉～後葉に位置づけられる。第95次のSB3450掘立柱建物は、上記２棟のどちらにも伴う可能性を残している。次年度の調査で、SB3465全体の規模や構造を明らかにするとともに、SB3415・3450との位置関係等も含めて改めて年代を検討したい。

竪穴建物では、沢地形中央付近に位置する第32次SI1063・1065などが第Ⅲ期に位置づけられるが、Ａ区のSI3460、Ｂ区のSI3464については、年代を絞り込むには至っていない。SI3460はカマ



図版31　遺構・層の変遷

ドが検出されず、平面形がやや不整な長方形となる点など、付近でこれまでに見付かっている竪穴建物に比べやや異質である。床面中央に強く被熱した炉がある点から、鍛冶関連遺物の出土は確認されなかったが、鍛冶工房の可能性がある。

10世紀代に入ると、一部の遺構・層で灰白色火山灰の堆積が認められるほか、須恵系土器を含む堆積層が形成される。遺構としては建物がみられなくなり、性格不明の土坑・溝が多くなる。B区でSX3480鍛冶炉とそれを囲むSD3475溝が10世紀後半～11世紀後半に位置付けられ、政庁終末期前後の城内での鍛冶作業を示す遺構と考えられる。

註

1）上層では回転ヘラ切り2点、回転糸切り1点で、確認面からも回転糸切りの須恵器が出土している（図版25-13）。
2）今回の調査で出土した鉄滓・羽口のうち、第Ⅲ層以下のものはSX3466由来の可能性がある。一方、第Ⅱ層・第1層のものはSX3466またはSX3480鍛冶炉に由来する可能性もある。
3）城内で掘立柱建物の構築に伴い切土・盛土造成が確認された事例として、城前宮衙のSB2509～2511建物跡などがある（『南面1』）。

	遺構	層	土師器			須恵器			須恵系土器	青磁	白磁	緑釉陶器	灰釉陶器				近世以降陶器	計
			供膳具	貯蔵具	煮沸具	供膳具	貯蔵具	不明	供膳具	碗	碗or皿	不明	椀	皿	瓶	不明		
A区	SX3460	埋土	7			2	2											11
	SI 3460	**確認面**	**4**				**2**		**2**									**8**
	SX3461	確認面	6				2		7				1					16
	SD3451	**堆積土**	**1**		**2**	**1**	**1**		**4**									**9**
	SD3453	堆積土					1		1									2
	SD3455	**堆積土**	**4**		**3**	**6**	**14**	**1**	**27**									**55**
	SD3462	堆積土					1											1
	SD3463	**堆積土**	**4**			**1**	**2**											**7**
	第Ⅶ層				1		1											2
	第Ⅵ層					**2**	**1**											**3**
	第Ⅲ層		28		11	9	19		101					1				169
	第Ⅱ層		**20**	**1**	**23**	**9**	**43**		**96**		**2**			**1**		**1**		**196**
	第1層		8		10	4	17		27									66
	その他		**5**		**4**	**2**	**5**		**20**									**36**
	小計		87	1	54	36	111	1	285	0	2	0	1		2	0	1	581
B区	SB3465	掘方埋土				1	1											3
	SB3465	**柱抜取穴**	**7**		**11**	**21**	**3**											**42**
	SB3465	確認面			5	2												7
	SI3464	**埋土**			**1**		**1**		**1**									**3**
	SX3466	下層	127		206	272	57											662
	SX3466	**中層**	**87**		**202**	**175**	**40**											**504**
	SX3466	上層	16		31	66	11											124
	SX3466	**確認面ほか**	**23**		**31**	**55**	**41**		**72**									**222**
	SD3470	底面直上				1												1
	SD3473	**堆積土**	**4**		**8**	**12**	**9**		**2**									**35**
	SD3474	堆積土	1			2	2		5									10
	SD3475	**堆積土**	**15**		**14**	**4**	**8**		**83**									**124**
	SD3476	堆積土							1									1
	第Ⅳ層		**8**		**16**	**10**	**21**		**60**									**115**
	第Ⅲ層		32		45	46	54		130									307
	第Ⅱ層		**160**	**3**	**119**	**45**	**110**		**835**	**1**						**1**	**1**	**1,284**
	第1層		37		21	26	45		122		1		1	1				254
	その他		**59**		**13**	**14**	**47**		**127**		**1**	**1**				**1**		**263**
	小計		565	3	709	772	465	0	1,430	1	2	1	1	1	0	2	1	3,961
総計			652	4	763	808	576	1	1,724	1	4	1	2	1	2	2	2	4,542

※供膳具：小皿・皿・高台皿・坏・高台坏・高坏・椀・蓋
貯蔵具：土師器鉢、須恵器・短頸壺・長頸瓶・甕
煮沸具：土師器甕

※縁ね長さ2cm以上の破片を集計した

第8表　第96次調査出土土器・陶磁器の破片集計

引用・参考文献

宮城県教育委員会　2018『山王遺跡Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第246集

	遺構	層	鉄製品	鉄滓系遺物	鉄滓			土製品			石製品			漆紙	計
					椀形滓	溶着滓	その他	羽口	土玉	土錘	砥石・台石類	凝灰岩切石	石英塊		
A区	第Ⅲ層										1				1
	第Ⅱ層		**1**	**1**	**1**										**3**
B区	SB3465	掘方埋土				1									1
	SB3465	**柱抜取穴**				**1**	**2**								**3**
	SB3465	確認面			3	7	5	6							21
	SI3464	**埋土**		**1**	**5**			**1**							**7**
	SX3466	下層	6	2	3	20	17	13	2			1	3	1	68
	SX3466	**中層**	**2**	**2**	**2**	**4**	**11**	**2**		**1**				**2**	**26**
	SX3466	上層		4		2	11	4							21
	SX3466	**確認面**	**1**												**1**
	SX3480	堆積土					+								+
	SD3473	**堆積土**				**1**									**1**
	第Ⅳ層			1			2								3
	第Ⅲ層		**1**	**1**	**1**	**5**	**8**								**16**
	第Ⅱ層		2	1	5	3	1	2			2				16
	第Ⅰ層				**1**										**1**
	小計		13	13	21	44	57	28	2	1	3	1	3	3	189

※「＋」は点数として集計できないが、存在が確認されたもの

第９表　第96次調査出土鉄製品・土製品・石製品ほかの点数集計

	遺構	層	鉄製品	鉄滓系遺物	鉄滓			土製品			石製品			漆紙	計
					椀形滓	溶着滓	その他	羽口	土玉	土錘	砥石・台石類	凝灰岩切石	石英塊		
A区	第Ⅲ層										15				15
	第Ⅱ層		**15**	**48**	**104**										**167**
B区	SB3465	掘方埋土				2									2
	SB3465	**柱抜取穴**				**49**	**8**								**57**
	SB3465	確認面			1,120	49	304	30							1,503
	SI3464	**埋土**		**94**	**320**			**104**							**518**
	SX3466	下層	189	71	314	246	369	121	7			1,720	42	＋	3,079
	SX3466	**中層**	**641**	**22**	**635**	**18**	**324**	**38**	**0**	**6**				**＋**	**1,684**
	SX3466	上層		133		24	395	57							609
	SX3466	**確認面**	**112**												**112**
	SX3480	堆積土					3								3
	SD3473	**堆積土**				**1**									**1**
	第Ⅳ層			43			41								84
	第Ⅲ層		**27**	**31**	**920**	**58**	**326**								**1,362**
	第Ⅱ層		24	16	1,410	30	200	150			1,450				3,280
	第Ⅰ層				**240**										**240**
	小計		1,008	458	5,063	477	1,970	500	7	6	1,465	1,720	42	＋	12,716

※「＋」は重量として集計できないが、存在が確認されたもの

第10表　第96次調査出土鉄製品・土製品・石製品ほかの重量集計（単位：ｇ）

①【点数】

区	遺構・層へ分類	軒丸瓦	軒平瓦					
		蓮花文	二重弧文	単弧文		偏行唐草文	不明
		313	510	640	660	620	
A区	第Ⅲ層						2
	第Ⅱ層						1
	第Ⅰ層						1
B区	SD3474・堆積土		1				
	第Ⅳ層					1	1
	第Ⅲ層				1		1
	第Ⅱ層	1		1			1
	その他						1
計		1	1	1	1	1	8

②【重量(g)】

区	遺構・層へ分類	軒丸瓦	軒平瓦				
		蓮花文	二重弧文	単弧文		偏行唐草文	不明
		313	510	640	660	620	
A区	第Ⅲ層						120
	第Ⅱ層						650
	第Ⅰ層						560
B区	SD3474・堆積土		230				
	第Ⅳ層					350	130
	第Ⅲ層				660		170
	第Ⅱ層	370		690			390
	その他						610
計		370	230	690	660	350	2,630

第11表　第96次調査出土軒丸・軒平瓦の点数・重量集計

区	遺構・層＼瓦分類	丸瓦 II	丸瓦 II B	丸瓦 II 焼	丸瓦 丸瓦	丸瓦 丸瓦 焼	平瓦 I	平瓦 I A	平瓦 I A 焼	平瓦 I Aa	平瓦 I B	平瓦 I C	平瓦 I D?	平瓦 II	平瓦 II B	平瓦 II B 焼	平瓦 IIB a1	平瓦 IIB a2	平瓦 IIB a3	平瓦 II Bb	平瓦 II C	平瓦 平瓦	平瓦 平瓦 焼	不明	不明 焼	計
A区	SI3460・埋土		1		1			9	1	1		1			3				1			3	1			22
	SI3460・確認面													1												1
	SK3461・確認面		1		1										2						1	1				6
	SD3451・堆積土							2														4	1			7
	SD3453・堆積土							1							1							1				3
	SD3455・堆積土	1	2		4		1	7		2					6		2		1	1	2	5				34
	第VII層	1																								1
	第VI層																					2				2
	第層	5	2	1	6	2	1	3	1			1			5			1		2	5	12	1			48
	第II層	29	8		30	1	1	24		2		1			33	4		2		9	11	28	7	6		186
	第I層	11			11		1	8		2		1			8		1				7	6				56
	その他	1	2		4	1		5							5				3		1	6	2	2		32
	小計	48	16	1	57	4	4	59	2	7		4		1	63	4	3	3	5	13	27	67	12	8		408
B区	SB3465・柱抜取穴							3														1				4
	SB3465・確認面	1																								1
	SI3464・埋土	1	2					2							4										1	10
	SX3466・下層	7	4		5			12	1	1					9	1			1			12	1			54
	SX3466・中層	4	3		4			4					1		4	1			1	1		4				27
	SX3466・上層	2	2					5				1			3	2						3				18
	SX3466・確認面	1	3		5			4							2	1						1	3			20
	SK3471・堆積土																	1								1
	SD3470・底面直上		2												1								1			4
	SD3473・堆積土	1						1							6	1					1	3				13
	SD3474・堆積土							3							1											4
	SD3475・堆積土	2			1			1							1					1	2	1				9
	第V層							1																		1
	第IV層	9	3		3			5		1					5	1						1	8	3		39
	第層	14	4		13	1		24				1			23	1				1	1	10	1			94
	第II層	52	24		44	1	2	26		5		4	2		50		4	2	1	14	25	57	8			321
	第I層	22	10		26			15		2	1	1		1	27	1		3		4	5	16	3			137
	その他	22	5		8			7		1			1		5			1			6	25		1		84
	小計	138	62		109	2	2	113	1	10	1	7	4	1	141	9	4	7	3	21	43	141	20	1	1	841
	総計	186	78	1	166	6	6	172	3	17	1	11	4	2	204	13	7	10	8	34	70	208	32	9	1	1,249

第12表　第96次調査出土丸・平瓦の点数集計

区	遺構・層＼瓦分類	丸瓦 II	丸瓦 II B	丸瓦 II 焼	丸瓦 丸瓦	丸瓦 丸瓦 焼	平瓦 I	平瓦 I A	平瓦 I A 焼	平瓦 I Aa	平瓦 I B	平瓦 I C	平瓦 I D?	平瓦 II	平瓦 II B	平瓦 II B 焼	平瓦 IIB a1	平瓦 IIB a2	平瓦 IIB a3	平瓦 II Bb	平瓦 II C	平瓦 平瓦	平瓦 平瓦 焼	不明	不明 焼	計
A区	SI3460・埋土		110		30			1,670	1,180	230		710			1,060				570			60	40			5,660
	SI3460・確認面													250												250
	SK3461・確認面		130		10										210					80		40				470
	SD3451・堆積土							230														250	170			650
	SD3453・堆積土							30							40						30					350
	SD3455・堆積土	180	300		220		140	740		1,460					1,020		610		170	140	960	330				7,200
	第VII層	170																								170
	第VI層																					210				210
	第層	540	260	40	280	160	410	130	200			130			960			130		1,070	830	370	40			5,490
	第II層	3,590	910		1,190	30	160	4,420		190		80			5,350	950		550		2,470	1,770	1,110	860	100		23,630
	第I層	1,870			280		180	1,230		410		290			2,030		140				1,170	100				7,720
	その他	70	270		160	60		610							880				900		250	220	120	180		3,790
	小計	6,420	1,070	40	2,170	190	890	9,120	1,380	2,290		1,210		250	12,470	950	750	680	1,640	3,760	5,050	2,690	1,230	280		55,410
B区	SB3465・柱抜取穴							1,630														40				1,670
	SB3465・確認面	80																								80
	SI3464・埋土	190	270					1,180							1,800										10	3,450
	SX3466・下層	590	920		140			3,590	150	390					2,330	120			240			520	110			9,270
	SX3466・中層	410	210		170			560					280		730	130			860	890		320				4,560
	SX3466・上層	260	720					1,490				690			980	280						110				4,530
	SX3466・確認面	70	730		290			450							170	110						30	160			1,920
	SK3471・堆積土																	180								180
	SD3470・底面直上		1,450												180								30			1,660
	SD3473・堆積土	280						130							1,140	170					280	100				2,080
	SD3474・堆積土							480							210											1,090
	SD3475・堆積土	120			40			350							270					110	730	60				1,680
	第V層							170																		170
	第IV層	480	710		90			830		200					550	220						220	600	400		4,360
	第層	1,790	280		640	30		3,550				310			5,030	70				300	470	590	50			13,110
	第II層	7,440	3,420		1,800	60	400	6,120		2,390		1,030	680		12,080			3,210	720	150	5,210	6,330	6,080	730		37,940
	第I層	3,320	1,580		1,430			2,560		580	60	160		170	4,870	70			1,210		2,150	1,190	980	300		20,650
	その他	2,170	420		440			1,030		80			370		990				830			2,080	1,310		100	10,020
	小計	17,400	10,720		5,640	90	400	24,490	150	3,640	60	2,190	1,210	170	31,230	1,170	3,210	2,940	1,250	8,650	11,280	10,960	1,860	100	10	138,420
	総計	23,820	12,000	40	7,810	280	1,290	33,610	1,530	5,930	60	3,400	1,310	420	43,800	2,120	3,960	3,620	2,890	12,410	16,330	13,650	3,090	360	10	193,830

第13表　第96次調査出土丸・平瓦の重量集計（単位：g）

Ⅲ．第97次調査

1．調査の目的と経過

（1）目的

第97次調査は、現在重点的に環境整備を実施している政庁南面地区に含まれ、第Ⅰ期外郭南辺の存在が推定される坂下地区において、公有地化が進展したことから実施したものである。

第Ⅰ期の外郭南門は、第Ⅱ期以降の南門よりも約120ｍ北側に位置したことが判明している（『外郭Ⅰ』）。この第Ⅰ期南門に伴う南辺については、東半部では外郭東辺に至る区間でおおむね規模や構造を把握している（『年報1981・1982・2006・2007』、『南面Ⅰ・Ⅱ』）。一方、南門より西側ではこれまでに第81・86・90次調査で区画施設やそれに伴う基礎地業などを検出しており、これらの成果を合わせると、外郭東辺からの総延長は約470ｍ以上となる（図版１）。

低地部分の第81・86次調査区では、筏地業と盛土による基礎地業（SX2959）を検出し、第86次ではその上に材木塀（SX3180）を検出した（図版32）。一方、丘陵部に上がる第90次調査では、積土による区画施設（SX3300）を検出し、地形によって区画施設の構造が異なることが明らかになった。また、区画施設廃絶後には盛土により通路（SX2962）として使われていたことが判明しており、第86次調査区では８世紀後半～10世紀中葉頃まで５段階（Ａ～Ｅ）の変遷を確認している。また、低地部分の第81・86次では土留め用の葺石やしがらみによる護岸施設も検出している。

今回の調査地点は第Ⅰ期外郭南門から20～30ｍ西側で、南門の立地する丘陵から西側の低地に向けて下がっていく地点に位置する。過去には第87次調査が行われているが、外郭南辺の検出には至らなかった。今回はその北側を中心に、丘陵から低地へ至る部分における遺構の状況等を把握することを主な目的とした。

（2）調査の経過と方法

〔調査区の設定と表土除去〕 対象地は多賀城跡第Ⅰ期外郭南門の西側に所在し、政庁正殿の基準点から南へ240～261ｍ、西へ25～38ｍの範囲に位置する（図版32）。第87次調査区とほぼ重複する形で南区、雨水管を挟んで約３ｍ北側に北区を設定した。

調査は５月18日に開始し、19日にかけて重機による表土除去を南区→北区の順に行った。南区では、壁面崩落を防ぐために第87次調査区を広く再検出する形とし、第87次で深く掘り下げた範囲の輪郭を確認したところでまで掘削した。北区では表土・盛土下に、耕作土とみられる層があり、その最下部の地山ブロックを多く含む第Ⅰｈ層上面まで掘削した。

〔遺構の調査〕 ５月30日から人力による遺構検出に着手した。北区・南区ともに安全確保のため階段状に掘り下げ、排水用のサブトレンチを設けて水中ポンプにより常時排水しながら作業を行った。

北区では、第Ⅰｈ層より下に遺物を多く含む第Ⅲ層が分布し、さらに現地表面から2.2～2.8ｍ掘り下げた第Ⅳ層上面でSD3412溝を検出した。SD3412には砂礫層が堆積し、調査区壁面が崩れやすい状態になったことから、これ以上の掘削は行なわなかった。それより下層は、ハンドオーガーによ

る簡易ボーリング調査で、灰白色火山灰や地山を確認した。

南区は、第87次調査区と雨水管との間の未調査範囲で、比較的浅いところで遺構面の存在が想定される北東部分を主な調査対象とした。第87次の基本層序との関係を確認しながら掘り下げを行った結果、現地表面から2.0～2.5ｍ下で地山、その直上には灰白色火山灰を含む第Ⅴ層を確認した。遺構は、灰白色火山灰より上層の第Ⅳ層上面でSK3413土坑を検出した。

６月20日から７月１日にかけて平面図・断面図の作成を行い、６月21日にはドローン（DJI製PHANTOM3 PROFESSIONAL：1,200万画素）による空撮を行った。

７月14・15日に多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに調査内容を報告し、その審議を経て成果に関する指導と承認を受けた。

７月25日には器材を撤収し、７月26日には重機により調査区を埋め戻して、野外調査を完了した。

〔調査記録の作成方法〕 平面図・断面図は縮尺1/20で図面用紙に手描きで作成した。平面図は、城前地区の「城前１」と「城前５」を基準に、トータルステーション（ソキア製CX-107F）を用いて、測量点を図面用紙に落とす形で作成した。断面図は遣り方測量により作成した。遺構の写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用いた。

〔遺構・遺物の整理〕 第96次調査と並行して同じ方法で行ったため、ここでは省略する。

〔遺構・遺物の登録〕 第97次調査で検出した遺構については、遺構登録台帳の3412・3413番に登録した（第３表）。遺物は整理用平箱で６箱分出土しており、遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物53点を抽出して登録番号を付した。登録番号は、土器・瓦・塼・石製品についてはR1～R53を使用し、白磁については『施釉陶磁器』の登録方法にならい、Ｒ番号に加えてNo.337～339を付した。

撮影した写真についてはデジタル写真台帳に登録して管理している。登録番号は、遺構写真がＺ9657～9676、空中写真がＺ9677～9686、遺物写真がＺ9801～9824、その他の写真（調査の様子など）がＺ9687～9689である。本書に掲載した遺構写真については、登録番号を掲載写真の右下に記載し、遺物写真については掲載写真との対応関係を第18表に示した。

２．調査成果

（１）層序

坂下地区は、南へ向かって延びる城前地区の丘陵に、南西方向から入り込む低湿地が接する丘陵端部にあたる。調査地点の現地表面は標高6.7～8.3ｍで、北東から南西に緩やかに下る。基本層序は北区と南区を対応させる形で７層に分けた（細分層は非対応）が、北区では第Ⅱ層は確認されなかった。また、南区と重複する第87次調査区では、地山を除いて第１～10層に分かれるが、このうち第１～５層は南区第Ⅰ～Ⅴ層に対応し、第６～10層は今回の調査では検出していない。

第Ⅰ層：表土・盛土・耕作土。北区では厚さ140～220cm程度で、ａ～ｈに細分した。Ⅰｈ層は地山ブロックを多く含み、硬くしまっているため、耕作土の床土とみられる。南区では厚さ約100cmで、第87次第１層に対応させてａ～ｄに細分した。

第Ⅱ層：南区で確認した。灰黄褐色（10YR4/2）や黄灰色（2.5Y4/1）のシルト層を基調とする。

厚さ20～60cm程度で、a・bに細分した。第Ⅱb層に遺物をやや多く含む。第87次の第2c・d層に対応するとみられる。

第Ⅲ層：黒褐色（10YR3/1・10YR3/2・10YR2/2）を基調とするシルト層もしくは粘土層。北区では厚さ54～81cmで、a～cに細分し、遺物を多く含む。全体的に粘土質で、下層ほど灰色を呈する。南区では厚さ8～33cmで、a・bに細分した。シルト質で、遺物を少量含む。第87次第3層に対応するが、細分層の対応は明確でない。

第Ⅳ層：灰黄褐色（10YR6/2）や黄灰色（2.5Y4/1）を基調とするシルト・砂・粘土層。北区では調査区最下段の排水用サブトレンチおよびボーリング調査で確認した。厚さ20～67cmで、a～cに細分し、遺物をやや多く含む。a・c層では植物遺体を多く含む粘土層に砂が層状に含まれ、b層は砂を主体として小礫もやや多く含む。いずれも湿地や流水による自然堆積とみられる。南区では、厚さ5～23cmで、a・bに細分した。シルト質で、遺物をわずかに含む。第87次第4層に対応するが、細分層の対応は明確でない。北区第Ⅳa層上面でSD3412溝、南区第Ⅳa層上面でSK3413土坑を検出した。

第Ⅴ層：灰白色火山灰（To-a）を含む層。北区では、2か所のボーリング調査で厚さ2～3cm程度のごく薄い火山灰を確認したが、堆積状況は不明である。南区では、灰オリーブ（5Y5/2）シルトに灰白色火山灰をブロック状に含む層で、北東隅を除く範囲に分布し、南側と西側で厚くなる。厚さ最大44cmで、a・bに細分した。a層は径5～10mmのブロックを少量、b層は径5～60mmのブロックを少量含む。これらは第87次第5a・b層に対応する可能性があるが、第5b層はブロックを多く含む点で第Ⅴb層とは異なる。

第Ⅵ層：灰白色火山灰より下層の自然堆積層で、北区のボーリング調査で確認した。厚さ12～32cmで、層の様相は北区第Ⅳa・c層に似て、黄灰色（2.5Y4/1）粘土に植物遺体や砂を含む。

第Ⅶ層：地山。北区では緑灰色（7.5GY6/1）シルトで、2か所のボーリング調査で確認し、南から北へ下る傾斜と推定される。南区では、灰オリーブ色（5Y5/3）の風化した凝灰岩で、北東から南西へ下る傾斜である。

（2）発見遺構と出土遺物

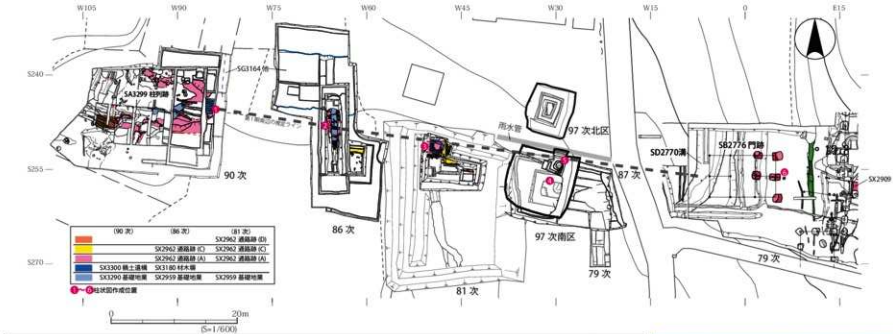
北区で溝1条（SD3412）、南区で土坑1基（SK3413）を検出した。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、瓦、塼、石製品がある。

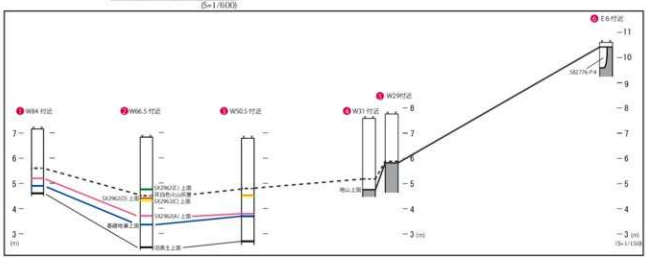
①土坑

【SK3413土坑】（平面図：図版33、断面図：図版34）

〔検出〕南区のS 254・W 29付近に位置する。遺構確認面は第Ⅳa層で、第Ⅲ層に覆われる。遺構検出後、半截して断面の調査を行い、完掘後に下層調査のため周辺の第Ⅳ・Ⅴ層を掘り下げた。

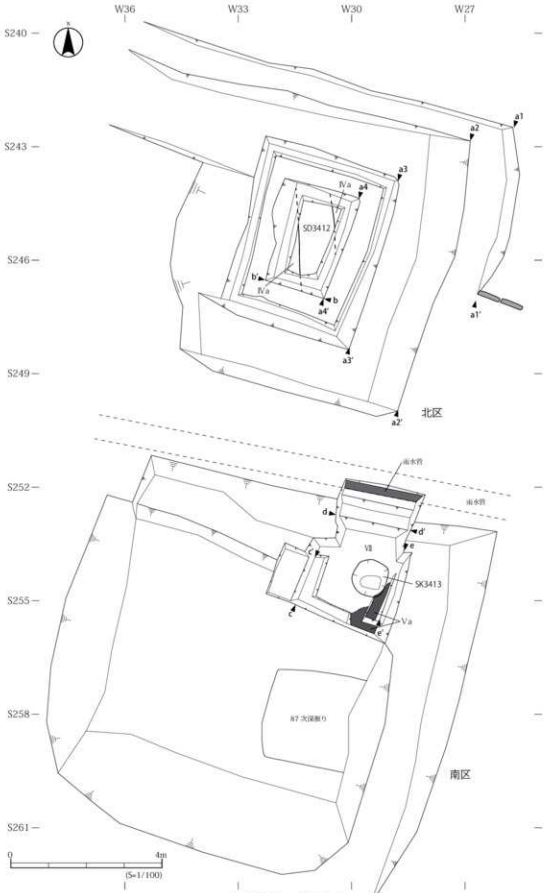
〔規模〕平面形は南東部がやや張り出す円形で、東西140cm、南北143cmを測る。断面形は上部が開く「U」字状で、深さ69cmである。



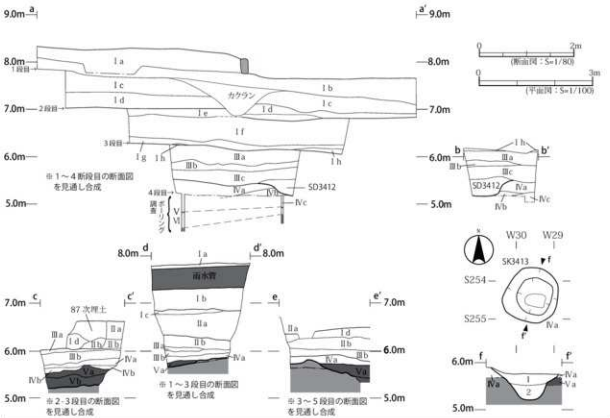


政庁と第 97 次 調査区（南から）〔Z9682〕

図版32　第Ⅰ期外郭南門西側の調査、第97次調査区写真


W36
W33
W30
W27
S240
S243
S246
S249
S252
S255
S258
S261
a1
a2
a3
a4
a1'
a2'
a3'
a4'
IVa
SD3412
b
b'
北区
南区
d
d'
e
e'
c
c'
VII
Va
SK3413
87 次深掘り
0
4m
(S=1/100)

図版33　平面図



遺構	層	土色	土性	含有物など	層界
SD3412	1	灰色(10Y4/1)	砂礫	拳大の礫を非常に多く含む	自然
SK3413	1	黒色(10YR2/1)	粘土	炭化物粒を微量含む	自然
	2	黒褐色(10YR3/1)	粘土	砂を多量、炭化物粒を微量、礫、グライ化した地山ブロックを微量含む	

1．調査区と第Ⅰ期外郭南門（上が北）〔Z9683〕

2．北区　SD3412 検出（北から）〔Z9663〕

3．南区　東壁断面（西から）〔Z9666〕

4．南区　SK3413 断面（西から）〔Z9673〕

図版 34　調査区、SD3412 溝、SK3413 土坑　平面・断面図・写真

〔堆積土〕 2層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 2層から須恵器、須恵系土器の小皿（図版35-9）、1層から土師器の坏・甕、須恵系土器の小皿（35-10）・坏または皿、丸瓦、平瓦が出土した。確認面の遺物として、土師器の甕、須恵器の坏、砥石（図版36-13）がある。

② 溝

【SD3412溝】（平面図：図版33、断面図：図版34）

〔検出〕 北区のS244～247・W30～32で検出した南北方向の溝である。遺構確認面は第Ⅳａ層で、第Ⅲ層に覆われる。遺構検出後、排水用サブトレンチで断面を確認した。

〔規模〕 検出長は約2.8ｍ、上幅最大94cm、底面を検出した調査区南壁断面で深さ41cm、断面形は上部が開く「U」字形である。

〔方向〕 ほぼ南北方向の基準線に沿う。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。砂礫主体で、砂を層状に含むことから、流水による堆積とみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器の坏・甕、須恵器の坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏（図版35-1）・坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ類が出土した。平瓦ⅠＡ類にはａタイプがある。

③ 基本層出土遺物

【北区】 第Ⅳ層からは土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏（図版35-2）・小皿・坏または皿、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ・ⅡＣ類が出土した。軒丸瓦は細弁蓮花文310Ｂである。平瓦ⅠＡ類にはａタイプ、ⅡＢ類にはａタイプ１とｂタイプがある。

第Ⅲ層からは土師器の坏・高台坏・甕、須恵器の坏・長頸瓶・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏（35-3）・小皿・坏または皿・高台皿（35-4・5）・高台坏または高台皿、白磁の碗（35-6、36-7・8）、丸瓦Ⅱ類、軒平瓦、平瓦ⅠＡ・ⅡＢ・ⅡＣ類、塼（35-8）が出土した。須恵器の瓶または壺には、内面に漆の付着するもの（36-10）がある。軒平瓦は分類不明の顎部小片である。平瓦ⅡＢ類にはａタイプ１とｂタイプがあり、平瓦ⅡＢ類には焼瓦が認められる。平瓦ⅡＣ類には凹面にヘラ書きがみられる（35-7）。塼は抉りのある無文塼（『本文編』のⅡＢ類）である。

第Ⅰ層からは、土師器の坏・甕、須恵器の坏・瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、丸瓦ⅡＢ類、平瓦ⅠＡ・ⅠＢ・ⅡＢ・ⅡＣ類が出土した。

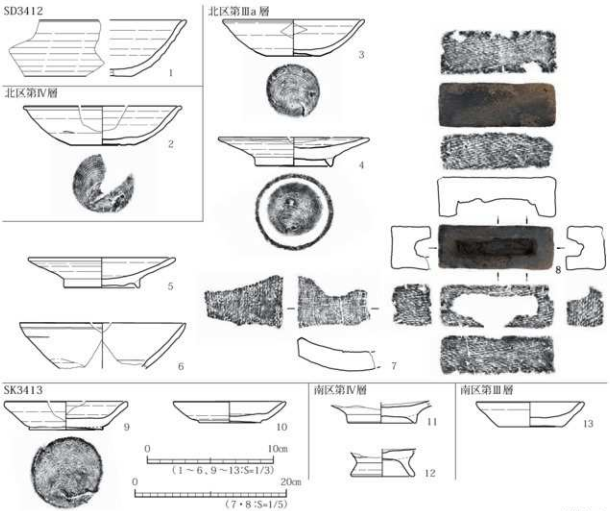
【南区】 第Ⅴ層からは土師器の坏・甕、須恵器の長頸瓶・瓶または壺、須恵系土器の坏・小皿・坏または皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡＢ・ⅡＣ類が出土した。

第Ⅳ層から土師器の坏・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿（35-11・12）、丸瓦、平瓦ⅡＢ・ⅡＣ類、砥石（36-16）が出土した。丸瓦には焼瓦が認められる。

第Ⅲ層からは須恵器の坏、須恵系土器の小皿（35-13）、丸瓦ⅡＢ類、平瓦ⅡＢ類が出土した。

第Ⅱ層からは土師器の坏・甕、須恵器の瓶または壺・甕、須恵系土器の坏または皿・高台坏または高台皿、平瓦ⅠA・ⅡB・ⅡC類が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ1・2がある。

第Ⅰ層からは土師器、須恵器の坏・甕、平瓦ⅡB類が出土した。平瓦ⅡB類にはaタイプ1・3がある。



(単位：cm)

No.	遺構・層	種類	残存	法量	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SD3412埋	須恵系土器　坏	口1/8～底部1/8	器高4.5	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	36-1	R43	B16219
2	北区第Ⅳ層	須恵系土器　坏	口1/6～底部1/1	口径(12.6)　底径5.0　器高3.1	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	36-2	R50	B16219
3	北区第Ⅲa層	須恵系土器　坏	口1/6～底部1/1	口径(11.2)　底径4.2　器高2.9	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整	36-3	R27	B16219
4	北区第Ⅲa層	須恵系土器　高台皿	口1/3～底部1/1	口径(12.0)　底径6.2　器高2.3	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整→高台貼付→ロクロナデ	36-4	R26	B16219
5	北区第Ⅲa層	須恵系土器　高台皿	完形	口径11.2　底径6.0　器高2.4	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：回転糸切り無調整→高台貼付→ロクロナデ	36-5	R31	B16219
6	北区第Ⅲa層	白磁　碗	口～体部1/3	口径(13.2)	外内：ロクロナデ　外：体部下半露胎　太宰府市分類D類	36-6	R11	B16219
7	北区第Ⅲa層	平瓦	破片	厚さ2.5	ⅡC類　凹面にヘラ書き	36-9	R20	B16219
8	北区第Ⅲa層	埴	ほぼ完形	長さ15.2　幅6.9　高さ5.2	ⅡB類　挟り内面は粗雑なナデ調整	－	R32	B16219
9	SK3413 2層	須恵系土器　小皿	ほぼ完形	口径9.8　底径5.9　器高2.3	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	36-11	R2	B16219
10	SK3413 1層	須恵系土器　小皿	完形	口径8.9　底径4.8　器高1.7	外内：ロクロナデ　底：回転糸切り無調整	36-12	R1	B16219
11	南区第Ⅳ層	須恵系土器　高台坏or高台皿	底部1/1	底径5.5	外：ロクロナデ　内：コテナデ　底：高台貼付　底：器面の風化が著しい	36-14	R4	B16219
12	南区第Ⅳ層	須恵系土器　高台坏or高台皿	底部1/1	底径5.1	外：ロクロナデ　底：高台貼付　内底：器面の風化が著しい	36-15	R5	B16219
13	南区第Ⅲ層	須恵系土器　小皿	完形	口径8.6　底径5.0　器高2.0	外：ロクロナデ　内底：器面の風化が著しい	36-17	R3	B16219

図版35　第97次調査　出土遺物

（3）まとめ

第97次調査では、主目的とした第Ⅰ期の区画施設に関連する遺構を含め、遺構自体ほとんど検出されなかった。北区では第Ⅳａ層上面でSD3412溝を検出した。調査区壁面が崩落する危険があったため、これ以上の掘削は行なわなかったが、これより下層はボーリング調査により、灰白色火山灰や地山を確認した。南区では地山直上に灰白色火山灰のブロックを含む第Ⅴ層が堆積しており、それ以前の堆積層等は確認できなかった。北東部分では第Ⅳａ層が地山直上に堆積している。第Ⅳａ層上面でSK3413土坑を検出した。

遺物　調査したほぼすべての層で須恵系土器が主体となること、灰白色火山灰降下後の堆積層であることから、堆積した年代は10世紀前葉以降と考えられる。ここでは、北区・南区各層の埋没年代を推定できる遺物について記述する。

北区　第Ⅳ層からは須恵系土器坏が出土している（図版35-2）。２の法量は口径（12.6）cm、底径5.0cm、器高3.1cmで、ロクロからの切り離しは回転糸切り無調整である。このような特徴と類似するものに、第61次調査の鴻の池第７層出土土器がある（『年報1991』）。鴻の池第７層出土土器は多賀城跡出土土器編年（以下、多賀城編年とする）のF-3群土器（『年報2006』）に比定され、年代は10世紀中葉に位置づけられている。第Ⅲ層からは、白磁碗（35-6、36-7・8）が出土しており、６は太宰府市分類Ⅳ類、７・８はⅡ類に該当し、年代は11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる（太宰府市 2000）。

南区　遺物の出土状況にまとまりはみられない。第Ⅳ層から須恵系土器高台坏または高台皿が出土している（35-11・12）。11・12は坏か皿かの判別は出来ないが、多賀城編年Ｈ群土器段階になると高台の付く器種はみられなくなるため（『年報2014』）、Ｆ群またはＧ群土器と考えられる。Ｈ群土器の年代は、11世紀後葉～12世紀前葉に比定されており、11・12は第Ⅳ層堆積年代の下限を示す資料と考えられる。SK3413からは須恵系土器小皿が出土している（35-9・10）。法量は口径8.9～9.8cm、器高1.7～2.3cm程度と、小型で扁平な器形を呈する。底部の厚さは0.4～0.7cmである。このような特徴と類似するものに第32次調査のSE1066井戸出土土器がある（『年報1978』）。SE1066出土土器は、多賀城編年Ｇ群に比定され（『年報2006』）、年代は11世紀後半に位置づけられている（『補遺編』）。したがって、9・10の年代もこれと同様に11世紀後半と考えられる。第87次調査の第３層からは、12世紀中頃以降の手捏かわらけが出土しており、３層による埋没の最終段階を示す遺物と指摘されており（『年報2014』）、第Ⅲ層の年代は、12世紀中頃以降に下る可能性がある。以上のことから、第Ⅴ層の年代は10世紀前葉～中葉、第Ⅳ層は10世紀中葉～12世紀前葉、第Ⅲ層は12世紀中頃以降に位置づけられる。南区では、地山直上に第Ⅳ・Ⅴ層が堆積しており、それ以前の堆積層が確認できなかったことから、10世紀前葉～12世紀前葉頃に削平を受けたと考えられる。なお、第87次調査においても調査区東端部では、第４層が地山直上に堆積していることから（『年報2014』）、削平を受けているものと考えられる。

旧地形　地山は削平を受けているため、第Ⅰ期当時の地形を留めていないが、今回得られた調査成果から推定しうる第Ⅰ期外郭南門西側の旧地形について記述する。

北区の地山の標高は4.5～4.8ｍで、南から北へ緩やかに下ると推定される。南区の地山の標高は、

5.2～5.9ｍで東から西へ下る傾斜と、北から南へ下る傾斜が認められる。第87次調査での地山の標高は、W31付近で4.8ｍ前後あり（柱状図④）、柱状図⑤の位置から④に向かって、急傾斜で下ることから、第97次調査区内では南区の北端付近の標高が最も高かったと推定される。また、南門の位置する丘陵（柱状図⑥）からも⑤の位置に向かって急傾斜で下ることが明らかとなった。

以上のことから旧地形は、南門の位置する丘陵から舌状に張り出し、門から急傾斜で低地へ落ち込む地形であったと考えられる。これまでの調査により、第Ⅰ期南辺の外郭区画施設の構造は、丘陵部が土塀または築地塀、低地部が材木塀であることが判明している（『年報2013・2016』）。第97次調査地点は、低地部から南門が位置する丘陵にむかって地山の標高が高くなり、舌状に張り出した丘陵部に位置すると考えられることから、削平を受けてはいるものの、この地点の外郭区画施設の構造は、土塀または築地塀であった可能性が高い。

第Ⅰ期外郭南門は、11世紀末～12世紀初頭前後に位置づけられるSD2770溝などにより、西半分の柱穴が削平を受けている（『外郭Ⅰ』、『南面Ⅲ』）。また、今回の調査の南区における地山削平の要因、北区における砂礫層に覆われたSD3412溝など、第Ⅰ期外郭南門の西側については、10世紀前葉～12世紀前葉頃の地形改変も含めて検討する必要がある。

1：SD3412、2：北区第Ⅳ層、3～10：北区第Ⅲa層、11～13：SK3413、
14～16：南区第Ⅳ層、17：南区第Ⅲ層（1～8・10～17：S=1/3、9：S=1/5）

引用・参考文献
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』太宰府市の文化財第49集

図版36　第97次調査　出土遺物　写真

区	遺構・層＼遺物	土師器 供膳具	土師器 煮沸具	須恵器 供膳具	須恵系土器 貯蔵具	須恵系土器 供膳具	白磁 碗	滑石	計
北区	SD3412・堆積土	8	11	1	3	30			53
	第IV層	22	15	2	6	140			185
	第III層	44	79	3	17	395	3		541
	第I層	2	8	1	6	43			60
	その他	1	3			4			8
	小計	77	116	7	32	612	3		847
南区	SK3413・確認面		2	1				1	4
	SK3413・1層	1	2			26			29
	SK3413・2層					1			1
	第V層	1	3		3	4			11
	第IV層	8	22			55		1	86
	第III層				1	1			2
	第II層	3	3		3	14			23
	第I層			1	1				2
	その他		2			1			3
	小計	13	34	2	8	102		2	161
計		90	150	9	40	714	3	2	1,008

※概ね長さ2cm以上のものを集計の対象とした
※供膳具：小皿、皿、高台皿、坏、高台坏、高坏、椀、台付鉢、蓋
貯蔵具：須恵器・短頸壺・長頸壺・甕
煮沸具：土師器甕

第14表　第97次調査出土土器・磁器・石製品の破片集計

【点数】

区	層／分類	軒丸瓦 細弁蓮花文 310B	軒平瓦 不明	塼 IIB-a
北区	第IV層	1		
	第III層		1	1
計		1	1	1

【重量(g)】

区	層／分類	軒丸瓦 細弁蓮花文 310B	軒平瓦 不明	塼 IIB-a
北区	第IV層	180		
	第III層		20	730
計		180	20	730

第15表　第97次調査出土軒丸・軒平瓦、塼の集計

区	遺構・層＼瓦分類	丸瓦 II	丸瓦 IIB	丸瓦 丸瓦	丸瓦 焼	平瓦 I	平瓦 I A	平瓦 I Aa	平瓦 I B	平瓦 IIB	平瓦 IIB 焼	平瓦 IIB a1	平瓦 IIB a2	平瓦 IIB a3	平瓦 II Bb	平瓦 II C	平瓦 平瓦	不明	計
北区	SD3412・堆積土	5					1	1		5							1		13
	第IV層	3		4			2	1		2		1		2		1	3	1	20
	第III層	4		12	1		2			10	2	1			2	10	8	6	58
	第I層		2	3			1		1	5						2	2	2	18
	小計	12	2	19	1		6	2	1	22	2	2		2	2	13	14	9	109
南区	SK3413・1層			1													1		2
	第V層	1		3						3						1	1		9
	第IV層			2	2					1						2		2	9
	第III層		1	2						1							1		5
	第II層						1			1		1	1			1	6		11
	第I層											1		1					2
	その他	1	1	2		1				1									6
	小計	2	2	10	2	1	1			7		2	1	1		4	9	2	44
総計		14	4	29	3	1	7	2	1	29	2	4	1	3	2	17	23	11	153

第16表　第97次調査出土瓦の点数集計

区	遺構・層＼瓦分類	丸瓦 II	丸瓦 IIB	丸瓦 丸瓦	丸瓦 焼	平瓦 I	平瓦 I A	平瓦 I Aa	平瓦 I B	平瓦 IIB	平瓦 IIB 焼	平瓦 IIB a1	平瓦 IIB a2	平瓦 IIB a3	平瓦 II Bb	平瓦 II C	平瓦 平瓦	不明	計
北区	SD3412・堆積土	540					560	50		1,020							40		2,210
	第IV層	650		310			170	390		550		560		720		90	100	80	3,620
	第III層	890		790	40		650			2,570	130	1,280			1,120	3,930	320	70	11,790
	第I層		230	250			460		110	620						440	130	80	2,320
	小計	2,080	230	1,350	40		1,840	440	110	4,760	130	1,840		720	1,120	4,460	590	230	19,940
南区	SK3413・1層			60													10		70
	第V層	520		160						710						60	80		1,530
	第IV層			50	140					140						470		40	840
	第III層		70	80						550							10		710
	第II層						160			140		430	800			270	540		2,340
	第I層											170		200					370
	その他	190	190	140		50				180							100		850
	小計	710	260	490	140	50	160			1,720		600	800	200		800	740	40	6,710
総計		2,790	490	1,840	180	50	2,000	440	110	6,480	130	2,440	800	920	1,120	5,260	1,330	270	26,650

第17表　第97次調査出土瓦の重量集計（単位：g）

図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号	図版		登録番号
35	8上	Z9801	36	3	Z9805	36	6右	Z9809	36	8右	Z9813	36	10右	Z9817	36	14	Z9821
	8下	Z9802		4	Z9806		7左	Z9810		9左	Z9814		11	Z9818		15	Z9822
36	1	Z9803		5	Z9807		7右	Z9811		9右	Z9815		12	Z9819		16	Z9823
	2	Z9804		6左	Z9808		8左	Z9812		10左	Z9816		13	Z9820		17	Z9824

第18表　第97次調査遺物写真の登録番号一覧

Ⅳ．金属製品・瓦・瓦塔の追加報告

多賀城跡調査研究所では、『年報』等の刊行後に修正・補足、新たに注目される事実が判明した資料については、『年報』で追加報告している。今回は、西門・五万崎地区で出土した金属製品、政庁西辺第３次整地層で出土した瓦、多賀城廃寺跡で出土した瓦塔について報告する。

１．第46次調査：西門・五万崎地区出土金属製品

昭和59（1984）年度の第46次調査で出土した金銅製刀装具について報告する（註１）。出土層位は第５層（年報1985）で、西門・五万崎地区築地西側の自然堆積層である。

図版37は鞘口金具・鞘筒金具・双脚足金物からなる鞘金具である。鞘筒金具は片側を面取りした鞘口金具で固定されており、尾崎元春氏や津野仁氏の呼称する「呑口筒金」に該当する（尾崎1977、津野2010）。足金物は一枚板の佩表～佩裏下端に抉りを入れて製作された、環付双脚足金物である（註２）。足金物の帯執環は欠失しているが剥離の痕跡が認められ、足金物よりやや幅の広い帯執環が取り付くとみられる。鞘筒金具の内幅は4.8cmであり、同幅の鞘に装着されたものと捉えられる。

資料の年代観に関して、呑口筒金は８・９世紀を主体とし、11世紀初めが下限とされる（津野2010）。また、帯執環が可動せず甲羅金や櫓金を伴わない環付双脚足金物については、津野氏は９世紀前半～10世紀後半（津野2005）、瀧瀬芳之氏は９世紀初頭～10世紀後半頃（瀧瀬1991）に位置づけている。これらに加えて、当該資料が出土した第５層は、10世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰を含む第４層に覆われている。以上の点に鑑み、当該資料の年代は概ね９世紀～10世紀前葉とみておきたい。多賀城政庁跡では鉄製鞘金具が出土しているが（『図録編』）、当該資料は金銅製刀装具としては現在のところ多賀城で唯一の出土例であり、陸奥国の軍事・行政の要である多賀城の性格をうかがい得る資料として注目される。

註

（１）刀装具の構造・特徴・年代観等については、佐藤渉氏、津野仁氏、山口貴久氏、横須賀倫達氏、吉松優希氏よりご教示いただいた。

（２）佩表が双脚で、佩裏の抉りが浅いという形状を呈しているが、今回は佩表を基準とし、双脚足金物として報告する。

層	種類	残存	法量・特徴
5層	刀装具	9/10	長さ(3.1cm)、幅(5.7cm)、厚さ2.0cm 【鞘口金具】長径5.6cm、短径1.9cm 【鞘筒金具】長さ2.4cm、長径5.1cm、短径1.5cm 【足金物】長さ1.8cm 鞘口金具・鞘筒金具・双脚足金物からなる。双脚足金物の帯執環を欠損。足金物は佩表側に抉りを入れ双脚に仕立てる。

図版37　第46次調査出土金銅製刀装具

2．第３・９・16次調査：政庁西辺第３次整地層出土の瓦

政庁西辺築地の発掘調査は、南半部のSF176が第３次と第９次（昭和40・45年度）に、北半部のSF179が第16次（昭和47年度）に実施されている。築地西側の犬走り上において、ほぼ全域に第３次整地層が分布し、焼土中に瓦が重なり合うような状態で面をなして出土した。このいわゆる「焼瓦層」は、780年の伊治公呰麻呂の乱による多賀城の焼失を示す資料として著名である。

第３次整地層から出土した瓦については、『本文編』228～229ページで内訳を報告している。軒瓦は軒丸瓦28点と軒平瓦31点の計59点あり、このうち多数を占める重弁蓮花文軒丸瓦222と単弧文軒丸瓦640が西辺築地に葺かれていたと考えられる。平瓦と丸瓦については、北半部（SF179）について整理を行っており、平瓦はⅡB類が99％を占めること、丸瓦にはⅡA類とⅡB類ａタイプがみられることなどが分かっている。ここでは、これらの「焼瓦」には具体的にどのような資料があるのか、特徴の分かりやすいものについて写真で報告する。

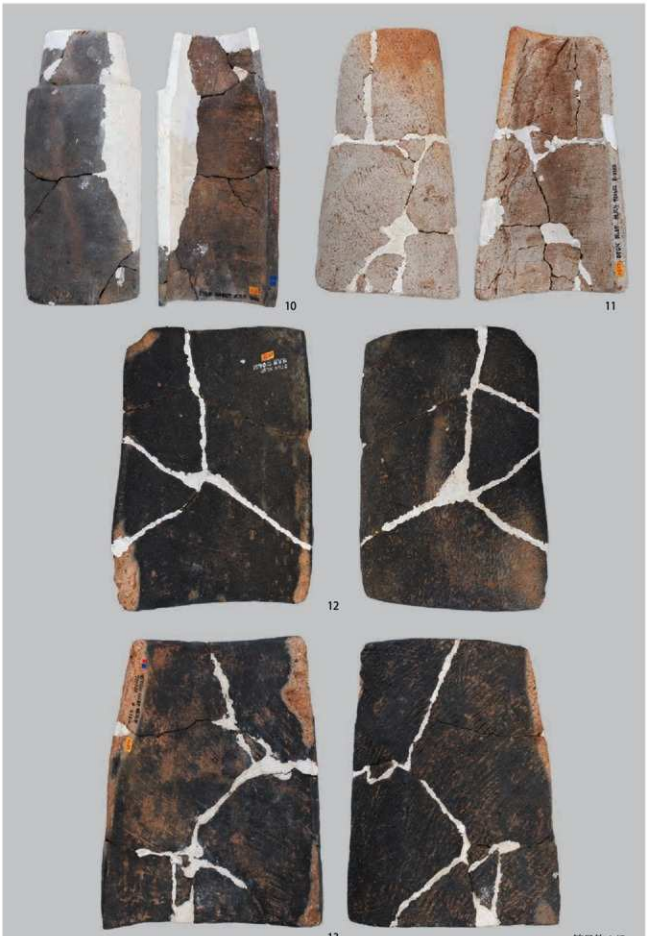
掲載したのは、軒丸瓦３点、軒平瓦６点、丸瓦２点、平瓦５点である。軒丸瓦は重弁蓮花文222が２点、重弁蓮花文227が１点、軒平瓦はすべて単弧文640、丸瓦はⅡA類とⅡB類ａタイプ各１点、平瓦はすべてⅡB類である。表面の色調には、赤色・灰色・黒色・褐色・橙色がみられる。１・９・10は主に灰色を呈し、元の瓦の色に比較的近く、表面の剥離も観察されない。１は瓦当面が赤色、９・10は側端部付近が赤色を呈しており、部分的に弱く被熱したとみられる。11・14は灰色の部分と褐色・橙色の部分に分かれ、後者は剥離が顕著で、部分的に強く被熱したとみられる。このほかに、全体が褐色または橙色を呈するもの（３・６～８）、黒色を呈するもの（２・４・５・12・13）、褐色と黒色に分かれるもの（15・16）がある。これらは表面の剥離が顕著なものが多いことから、被熱の度合いが大きかったことがうかがえ、色調の違いは炎の当たり方の違いにより生じたものと考えられる。

図版	写真	調査	出土位置	種類	残存	法量(残存)cm	特徴	色調	表面剥離	写真登録番号
38	1	3次	C3焼土中	軒丸瓦	丸瓦部ほぼ欠	瓦当幅20.4　瓦当厚3.8 全長(13.7)	重弁蓮花文(222)、丸瓦部凹面布目	瓦当面赤色 背面灰色		Z9830～9831
	2	9次	MH65焼土	軒丸瓦	丸瓦部ほぼ欠	瓦当幅20.4　瓦当厚3.3 全長(11.3)	重弁蓮花文(222)、丸瓦部凹面布目	黒色		Z9832～9833
	3	3次	D焼土中	軒丸瓦	丸瓦部ほぼ欠	瓦当幅19.0　瓦当厚3.5 全長(8.4)	重弁蓮花文(227)	褐色・橙色		Z9834～9835
	4	3次	D西南隅焼土中	軒平瓦	平瓦部ほぼ欠	瓦当幅28.2　瓦当厚4.0 全長(11.5)　顎面長7.5	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き	黒色	顕著	Z9836～9838
	5	3次	C3焼土中	軒平瓦	平瓦部1/2欠	瓦当幅27.1　瓦当厚4.1 全長(21.0)　顎面長8.5～9.2	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き、平瓦部ⅡB類ａタイプ	黒色	顕著	Z9839～9841
	6	3次	C3西壇トレンチ焼土層中～下	軒平瓦	平瓦部1/2欠	瓦当幅27.1　瓦当厚4.5 全長(23.8)　顎面長7.1～7.8	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き、平瓦部ⅡB類ａタイプ	橙色	顕著	Z9842～9844
39	7	3次	C3焼土中・下	軒平瓦	平瓦部ほぼ欠	瓦当幅30.3　瓦当厚4.4 全長(17.0)　顎面長7.0～7.5	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き、平瓦部ⅡB類ａタイプ	橙色	顕著	Z9845～9847
	8	3次	C1焼土中・下	軒平瓦	平瓦部一部欠	瓦当幅28.0　瓦当厚4.6 全長(35.3)　顎面長6.7～7.9	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き、平瓦部ⅡB類ａタイプ	橙色	顕著	Z9848～9851
	9	3次	C3焼土中	軒平瓦	平瓦部1/2欠	瓦当幅(26.1)　瓦当厚3.5 全長(22.5)　顎面長8.1	単弧文(640)、顎部横方向の縄叩き、平瓦部ⅡB類ａタイプ	灰色・赤色		Z9852～9854
40	10	16次	NN67焼瓦層	丸瓦	1/4欠	幅15.5　全長36.5 厚2.2　玉縁長7.8	丸瓦ⅡB類ａタイプ	灰色・赤色		Z9855～9856
	11	16次	NL67焼瓦層	丸瓦	一部欠	幅19.5　全長35.5　厚2.0	丸瓦ⅡA類	灰色・褐色	顕著	Z9857～9858
	12	16次	NL67焼瓦層	平瓦	一部欠	幅(25.2)　全長37.0　厚2.2	平瓦ⅡB類	黒色	顕著	Z9859～9860
	13	16次	NK67焼瓦層	平瓦	ほぼ完形	幅28.8　全長38.1　厚2.0	平瓦ⅡB類	黒色	顕著	Z9861～9862
41	14	16次	NN67焼瓦層	平瓦	一部欠	幅27.4　全長34.5　厚2.0	平瓦ⅡB類	灰色・褐色	顕著	Z9863～9864
	15	16次	NM67焼瓦層	平瓦	一部欠	幅(27.5)　全長37.3　厚2.9	平瓦ⅡB類	褐色・黒色	顕著	Z9865～9866
	16	16次	NK67焼瓦層	平瓦	一部欠	幅(27.0)　全長37.1　厚2.7	平瓦ⅡB類	黒色・褐色	顕著	Z9867～9868

第19表　政庁西辺第３次整地層出土の瓦観察表

図版38　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（1）

図版39　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（2）



図版40　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（3）

図版41　政庁西辺焼瓦層出土の瓦（4）

3．第25・26次調査：多賀城廃寺跡出土の瓦塔

多賀城廃寺跡における第25・26次調査で出土した瓦塔については、一部『年報1975』で概要を報告しているが、今回未報告資料を含めて報告する。なお、調査の内容については『年報1975』を参照されたい。

（1）調査の概要

第25・26次調査は、多賀城廃寺の南大門、築地塀など区画施設等の確認、及び中門南西に広がる瓦堆積の実態を把握することを目的とした。調査の結果、南大門や南側及び東側で築地塀などは確認されず、竪穴建物、瓦を用いた特殊遺構などが検出された。また、南西調査区の瓦堆積層から大量の瓦とともに瓦塔片が出土した（図版42）。この瓦堆積層は近世陶磁器も出土していることから、近世以降の整地もしくは廃棄と考えられた。

（2）瓦塔の特徴

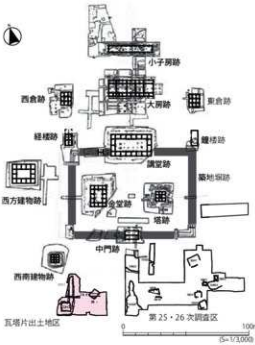
接合作業の結果、瓦塔片資料は106点となり、この中には瓦堂とみられる資料も含まれている。点数の内訳は屋蓋部57点、軸部48点、相輪部1点であった。このうち主な資料17点を図化（図版44・45）、他は写真（図版46～49）とし、各資料の属性を第20～23表にまとめた。なお、瓦塔・瓦堂の部位名称については、図版43に示したとおりである（註1）。

瓦塔は窯で焼かれたもので、焼成は良好である。色調は黄灰色・褐灰色・黒色などがみられ、同一個体の破片でも色調が違うなど、廃棄後に一部被熱した可能性もある。

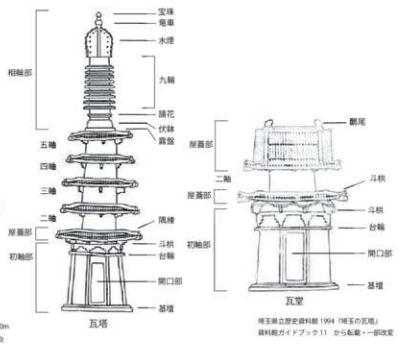
①屋蓋部（図版44・46～48-1～57）

屋蓋部資料で全周するものはない。この中には瓦堂の入母屋造の屋根と判断できるものが3点あり、最後に記述する。

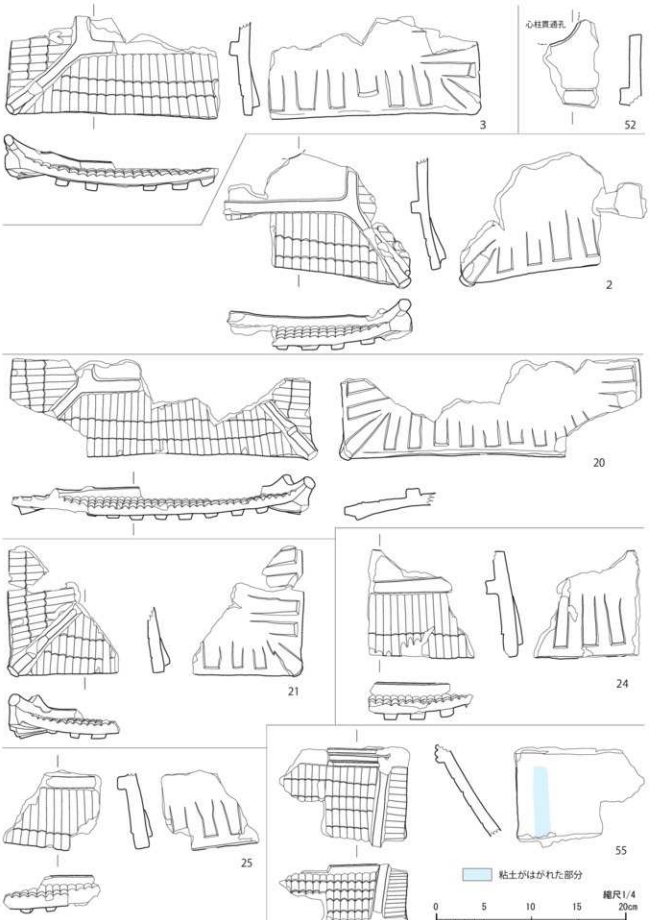
屋蓋部は板状の粘土を組み合わせて成形し、天井に幅1.0～1.5cm、高さ0.8～1.1cmの突帯を方



図版42　多賀城廃寺跡全体図



図版43　瓦塔・瓦堂の部位名称



図版44　屋蓋部実測図

形に巡らし、中央に心柱貫通孔を穿つ。一辺の規模がわかるもので31.6cm（20）である。隅棟は方形または隅丸方形の粘土突帯を貼り付け、軒先寄りに鬼瓦を表現したとみられる段を設ける。

屋根瓦は半截竹管状工具で丸瓦のみを表現し、工具の押し引きにより瓦の継ぎ目を施す。工具の違いから、**A類**：丸瓦の幅が0.9cmで、断面がやや歪んだ不整な半円形のもの（1～19）、**B類**：丸瓦の幅が0.7～0.8cmで、断面が半円形のもの（20～50）に分けられる。B類には、**a**：瓦の継ぎ目が2ヶ所で3段となるもの（20～22）、**b**：瓦の継ぎ目が1ヶ所で2段となるもの（23～29）がある。屋根瓦の長さは5.2～7.0cmである。

軒裏の垂木は一軒構成で、板状の粘土を貼り付けヘラ状工具で削り出す。垂木の幅は0.8～1.8cm、垂木の間隔は1.0～2.1cmである。

瓦堂の屋蓋部（55～57）は、屋根瓦が丸瓦のみを表現し、瓦幅0.7cm、断面円形のもので、B類に相当する。55は大棟と降棟、56は降棟がみられる。大棟には半截竹管状の工具による2条の沈線が施され、丸瓦を表現したとみられる。なお、瓦塔のB類資料には瓦堂の屋蓋部が含まれている可能性もある。

② 軸部（図版45・48・49-58～105）

軸部資料48点のうち、初軸部が40点、二層以上の軸部が8点ある。

初軸部（58～97）

初軸部は板状の粘土を組み合わせて成形したとみられる。初軸部の全体がわかる資料はなく、各部位の特徴をみていく。

基壇は二重基壇で、隅は隅丸方形となる。一辺の規模がわかるもので26.3cm（75）である。

基壇－台輪間は、隅柱が円形、壁面の柱は方形の粘土突帯を貼り付けている。壁面には、隅柱と二本の柱で三間を表現し、中央間に開口部、左右の柱間が壁になるもの（69・75）と、隅柱と一本の柱で二間を表現し、各柱間に開口部があるもの（58）がみられる。このことから、隅柱に面する柱間が壁となる壁面は三間、開口部となる壁面は二間になると考えられ、隅柱を挟んだ各壁面の状況がわかる資料から、**Ⅰ類**：三間×三間の構造となるもの（75・77・78）、**Ⅱ類**：三間×二間の構造となるもの（61・74・82・83）があると考えられる。なお、二間×二間の構造となる初軸部が存在する可能性もあるが、本資料では確認できないことから、壁面が二間と考えられる58は三間×二間の構造と考えておきたい。

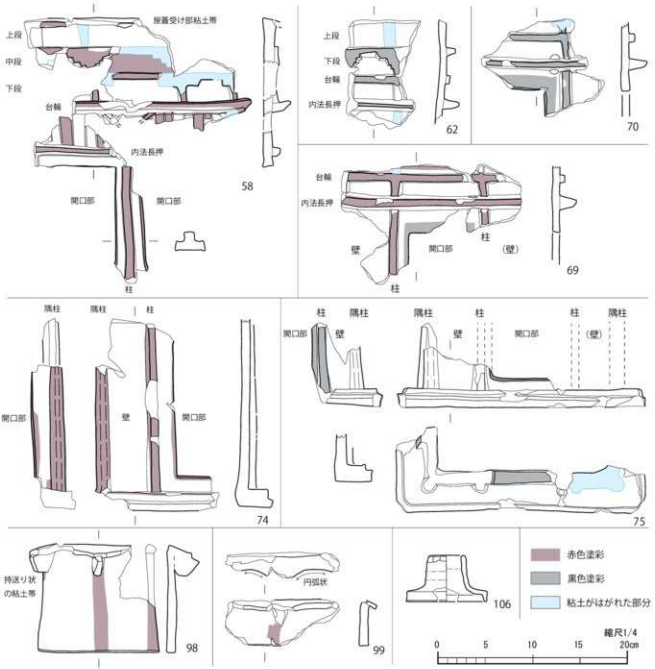
壁には、**i**：0.8～1.3cm間隔で縦方向の沈線が施されるもの（58～61）と、**ii**：沈線がみられないものがあり、iはⅡ類で認められる。

柱頂部の台輪と内法長押には、台輪が断面方形の粘土突帯、開口部上側の内法長押が先端のとがった粘土突帯を貼り付けているもの（62・69・70）と、台輪が先端のとがった粘土突帯、内法長押が方形の粘土突帯を貼り付けているもの（58）がみられる。58では中央柱の上部に斜行する二本の突帯が台輪に取り付くとみられる。また、開口部の右上と右下には径0.7～1.0cmの軸ずり穴が穿たれ、右上の穴は内法長押を貫いている。

台輪から屋蓋の受け部までは、**a**：横架材（通肘木）で三段に分けて、中・下段の二段に逆凸状の

粘土帯で壁付き三斗を表現したもの（58）、**b**：横架材（通肘木）で二段に分けて、下段に逆凸状の粘土帯で壁付き三斗を表現したもの（62）がみられる。いずれも上段には、隅と中間の２ヶ所に屋蓋部を支える持送り状の粘土帯が貼付けられていたとみられる。屋蓋の受け部が一部残存する58では、粘土帯がやや下方に張り出し、持送り状の粘土帯の間は円弧状になるとみられる。

塗彩は、柱・台輪・横架材（通肘木）・壁付き三斗などの突出部や開口部の周縁で確認される。また、壁面に縦方向の沈線が施されるｉ（58～61）では沈線間に部分的に塗彩され、58では壁付き三斗が表現された段にも塗彩されている。塗彩には赤色のものと黒色のものがみられるが、不明瞭なものもある（註２）。69では柱等に赤色、開口部周縁に黒色の塗彩が認められる。



図版45　軸部・相輪部実測図

二層以上の軸部（98～105）

粘土板を組み合わせて成形し、屋蓋の受け部は下方に張り出し、隅と中央に持送り状の粘土帯が貼付けられ、粘土帯の間は円弧状になる。98は隅と中央に柱を表現する赤色塗彩を施し、二間×二間の構造を表現している。99では壁面に開口部の一辺とみられる端部が確認される。

③ 相輪部（図版45・49-106）

九輪１点のみである（106）。ロクロ成形で、上端部周縁を手持ちヘラケズリしている。

屋蓋部では、屋根瓦表現の工具の違いからＡ類とＢ類の２種類がみられた。Ｂ類では瓦の継ぎ目が２ヶ所のａと１ヶ所のｂがみられたが、これは階層の違いの可能性も残るため、ここでは２種類の瓦塔の存在を想定しておく。また瓦堂の屋蓋部も認められたことから、瓦堂が存在したことは確実である。

初軸部では、構造表現から三間×三間のⅠ類と三間×二間のⅡ類が認められた。埼玉県美里町東山遺跡（埼玉県教育委員会1993）、千葉県千葉市谷津遺跡（千葉県文化財センター1986）では瓦塔と瓦堂が出土しており、いずれも瓦塔は三間×三間、瓦堂は三間×二間の構造である。瓦塔は正面・側面の区別がないが、瓦堂はその区別を意識的に行われたことが指摘されており（高崎1990）、本資料のⅠ類は瓦塔、Ⅱ類は瓦堂の構造と考えられる。Ⅱ類には、壁面の縦位沈線の有無からｉとⅱがあり、２種類の瓦堂があったことが想定される。なお、台輪から屋蓋受け部の間が三段に分かれるａと二段に分かれるｂがみられ、ａはⅡ類ｉに伴うと考えられる。

こうしたことから、本資料には瓦塔と瓦堂が少なくともそれぞれ２種類存在したことが想定される。ただし、全体を復元することはできなかったため、瓦塔・瓦堂とも全体の構造は不明である（註３）。

（３）瓦塔の位置付け

池田敏宏氏は関東地方の瓦塔資料を中心に屋蓋部の表現方法を分類し編年を行っている（池田1999ほか・註４）。屋蓋部の屋根瓦表現を池田氏の分類と比較すると、本資料は幅狭工具押し引きＡ手法もしくは幅広工具押し引きＢ手法の範疇にあたると考えられる。また本資料の軒裏の垂木表現は一軒構成で、垂木幅・間隔からヘラ削り出しＣ２手法に近いものが主体となるが、ヘラ削り出しＣ１手法に近いものも少数みられる。こうしたことから、本資料は池田氏の編年の宮ノ前類型（山梨県韮崎市宮ノ前第２遺跡）、東山類型（埼玉県美里町東山遺跡）・上西原類型（群馬県前橋市上西原遺跡）に類似すると考えられる。宮ノ前類型は９世紀前葉頃、東山類型は８世紀末～９世紀前葉、上西原類型は９世紀中葉を中心とした時期に位置付けられている。

また、高崎光司氏は斗栱の変化を中心として編年を行っている（高崎1989）。初軸部の斗栱表現のうち逆凸状の粘土帯による壁付き三斗の製作技法は、高崎氏がいう「斗栱粘土帯（切り出し）作り」に対応するとみられる。高崎氏はこの斗栱粘土帯作りの盛行を指標として関東地方三期（埼玉県東山遺跡・群馬県上西原遺跡・千葉県千葉市谷津遺跡など）を設定しており、本資料も関東地方の三期に併行すると考えられる。関東地方三期は９世紀前半に位置付けられている。

以上から、本資料の時期は８世紀末～９世紀中葉におさまるものと考えられる。

瓦塔設立の趣旨や目的については、石村喜英氏がこれまでの見解を、衆縁勧募説、造塔信仰説、塔婆代用説、想定墳墓説、墳墓標識説に整理されている（石村1984・註５）。多賀城廃寺は多賀城の創建と同時期の８世紀前半に金堂・塔などの主要伽藍が造営されたことから、多賀城廃寺では伽藍内部の建物に信仰の対象として瓦塔が安置されたと考えるのが妥当であろう（註６）。

註

（1）瓦塔の部位名称については、高崎光司氏の「瓦塔小考」を参考とし、埼玉県立歴史資料館の『埼玉の瓦塔』掲載の名称図を一部改変して掲載した。

（2）被熱により赤色塗彩が黒色化した可能性がある資料もみられる。

（3）瓦塔は五重塔の例が多いが、千葉県木更津市小谷遺跡（木更津市教育委員会1998）では三重塔に、千葉県印西市馬込遺跡（財団法人千葉県文化財センター2004）では七重塔に復元されている。また、瓦堂は埼玉県美里町東山遺跡では二層に、千葉県千葉市谷津遺跡では一層に復元されている。

（4）池田敏宏氏による分類では、屋根瓦：幅広工具押し引きＢ手法（幅約1.1cmの半載竹管状工具で、瓦継ぎ目は押し引き・多節）、幅狭工具押し引きＡ手法（幅約0.7cmの半載竹管状工具で、瓦継ぎ目は押し引き・軒先一節目のみ）、垂木：ヘラ削り出しＣ１手法（一軒構成、垂木幅約2.0cm、間隔約2.5cm）、ヘラ削り出しＣ２手法（一軒構成、垂木幅約1.5cm、間隔約1.2cm）としている。

（5）石村氏は、衆縁勧募説は寺院建立の予定地に立てて浄財勧募に資するもの、造塔信仰説は信仰の対象として堂内に安置されたもの、塔婆代用説は木造塔の代用として造立されたもの、想定墳墓説は墳墓の表飾または墓碑として造立されたもの、墳墓標識説は墓塔または供養塔として造立されたものとまとめている。

（6）瓦塔が出土した瓦堆積層は後世の整地もしくは廃棄層と考えられ、ここから出土した鬼瓦片が昭和37年度調査で塔跡から出土した鬼瓦と接合していることから（宮城県教育委員会・多賀城町1970、『年報1975』）、伽藍内部から運ばれたものと考えられるが、安置された建物を推定することはできない。

引用・参考文献

池田敏宏1999「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心に―」『研究紀要』第７号　財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

池田敏宏2005「瓦塔初重区間の利用法―８～９世紀における造塔意識の変化に関する考察―」『研究紀要』第13号　財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

石村喜英1971『瓦塔と泥塔』『新版考古学講座』第８巻特論〈上〉　雄山閣

石村喜英1984『瓦塔』『新版仏教考古学講座』第３巻　雄山閣

尾崎元春1977『個別解説』『正倉院の大刀外装』小学館

木更津市教育委員会1998『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅲ　小谷遺跡』

群馬県教育委員会1999『上西原遺跡』

埼玉県教育委員会1993『埼玉県児玉郡美里町東山遺跡出土　瓦塔・瓦堂解体修理報告』

埼玉県立歴史資料館1994『埼玉の瓦塔』資料館ガイドブック11

財団法人千葉県文化財センター1986『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』

財団法人千葉県文化財センター2004『印西市馬込遺跡』千葉県文化財センター調査報告書第495集

坂田敏行2009「製作技法・表現方法からみる東日本出土瓦塔」『研究紀要』第24号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

瀧瀬芳之1991「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集　設立10周年記念論文集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

高崎光司1989「瓦塔小考」『考古學雑誌』第74巻第３号

高崎光司1990「瓦塔瞥見」『研究紀要』第７号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

津野仁2005「毛抜形太刀の系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第21輯　國學院大學考古学資料館研究室

津野仁2010「日本刀の成立過程―木柄刀と古代刀の変遷―」『考古学雑誌』第94巻第３号

津野仁2018「日本古代の武装と社会的機能の変化―古墳時代との比較を通じて―」『土曜考古』第40号　土曜考古学研究会

松本修自1983「小さな建築」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集

宮城県教育委員会・多賀城町1970『多賀城跡調査報告Ⅰ―多賀城廃寺跡―』

番号	種類	幅	奥行	厚	分類	屋根瓦				軒瓦					天井	間取	写真間取	登録知	写真登録知
						瓦棟	側面	段数	瓦匠 軒上9	垂木幅	垂木間幅	垂木高	垂木長						
1	屋蓋部 （隅棟）	(15.7)	(13.6)	2.0	A	0.9	不整 平行形	3	6.2 2.0＋1.6＋2.6	1.1～1.6	1.6～1.7	0.4	4.6	完帯幅1.5 高0.8		46-1	5	Z9869 ～9870
2	屋蓋部 （隅棟）	(19.5)	(14.3)	1.9	A	0.9	不整 平行形	3	5.9 1.4＋2.0＋2.5	1.3～1.7	1.3～1.6	0.4～0.5	3.9	完帯幅1.2 高1.0 心柱置礎花	44-2	46-2	12	Z9871 ～9873
3	屋蓋部 （隅棟）	(22.3)	(10.7)	2.0	A	0.9	不整 平行形	3	6.4 1.5＋2.0＋2.9	1.2～1.7	1.4～1.6	0.6～0.8	4.0	完帯幅1.1～ 1.6 高0.9	44-3	46-3	1	Z9874 ～9876
4	屋蓋部 （隅棟）	(9.3)	(8.0)	1.7	A	0.9	不整 平行形	3	5.2 1.4＋1.7＋2.1	1.5～1.6	1.5	0.6	4.0	－		46-4	6	Z9877 ～9878
5	屋蓋部 （隅棟）	(16.4)	(8.4)	1.8	A	0.9	不整 平行形	3	6.0 1.9＋1.7＋2.4	1.8	1.7～2.1	0.4～0.6	4.0	完帯幅1.5 高1.0		46-5	9	Z9879 ～9880
6	屋蓋部 （隅棟）	(12.0)	(11.5)	1.8	A	0.9	不整 平行形	3	6.6 1.8＋1.6＋3.2	1.2	1.2	0.7	5.3	完帯幅1.0 高0.9		46-6	3	Z9881 ～9882
7	屋蓋部 （隅棟）	(8.6)	(5.5)	3.5	A	0.9	不整 平行形	(1)	(2.7)	隅1.4	－	隅0.3	（隅4.0）	－		46-7	46	Z9883 ～9884
8	屋蓋部 （隅棟）	(8.2)	(6.1)	3.8	A	0.9	不整 平行形	(2)	(3.8) 2.0＋(1.8)	1.5	－	0.6	(4.2)	－		46-8	4	Z9885 ～9886
9	屋蓋部 （隅棟）	(5.5)	(5.4)	2.7	A	0.9	不整 平行形	(1)	(1.6)	(1.4)	－	0.4	(2.3)	－		46-9	30	Z9887 ～9888
10	屋蓋部 （隅棟）	(7.6)	(4.6)	3.1	A	0.9	不整 平行形	(1)	(1.9)	1.2	－	0.5	(3.8)	－		46-10	32	Z9889 ～9890
11	屋蓋部 （隅棟）	(7.5)	(4.0)	2.3	A	0.9	不整 平行形	(2)	(3.1) 1.7＋(1.4)	1.1	1.3	0.3	(3.0)	－		46-11	37	Z9891 ～9892
12	屋蓋部	(11.3)	(7.0)	1.6	A	0.9	不整 平行形	3	6.1 2.1＋1.8＋2.2	1.3	1.4	0.5～0.6	4.0	－		46-12	2	Z9893 ～9894
13	屋蓋部	(12.8)	(6.4)	1.7	A	0.9	不整 平行形	3	(6.6) 1.7＋2.3＋(2.0)	1.1～1.3	1.2	0.4～0.5	4.0	－		46-13	14	Z9895 ～9896
14	屋蓋部	(7.9)	(5.4)	1.5	A	0.9	不整 平行形	3	(4.9) 1.8＋2.0＋(1.1)	1.1～1.3	1.0	0.3	3.5	－		46-14	10	Z9897 ～9898
15	屋蓋部	(6.1)	(5.7)	1.2	A	0.9	不整 平行形	3	(5.7) 2.0＋1.7＋(2.0)	1.6	－	0.4	(4.3)	－		46-15	11	Z9899 ～9900
16	屋蓋部	(6.3)	(3.7)	1.6	A	0.9	不整 平行形	3	(5.4) 1.7＋2.0＋(1.7)	1.6	－	0.7	2.6	－		46-16	7	Z9901 ～9902
17	屋蓋部	(10.3)	(6.3)	1.8	A	0.9	不整 平行形	3	(6.3) 2.0＋2.2＋(2.1)	0.9～1.4	1.1～1.4	0.4～0.5	3.2～4.0	－		46-17	13	Z9903 ～9904
18	屋蓋部	(3.9)	(3.6)	1.7	A	0.9	不整 平行形	(1)	(2.5)	1.2	－	0.3	(2.0)	－		46-18	48	Z9905 ～9906
19	屋蓋部	(3.8)	(2.6)	1.5	A	0.9	不整 平行形	(2)	(2.9) 1.8＋(1.1)	1.0	－	(0.3)	(2.2)	－		46-19	16	Z9907 ～9908
20	屋蓋部 （隅棟）	32.1	(10.4)	1.8	Ba	0.7	平行形	3	6.7 1.6＋2.0＋3.1	1.2～1.4	1.1～1.4	0.2～0.7	3.0～3.5	完帯幅1.3 高0.8	44-20	47-20	17	Z9909 ～9911
21	屋蓋部 （隅棟）	(11.5)	(13.7)	3.3	Ba	0.7	平行形	3	(7.0) 2.0＋2.0＋(3.0)	1.0～1.4	1.2～1.3	0.4～0.7	2.5～4.5	－	44-21	47-21	20	Z9912 ～9913
22	屋蓋部 （隅棟）	(11.0)	(7.6)	3.5	Ba	0.7	平行形	3	(6.6) 1.8＋1.9＋(2.9)	1.2	1.3	0.7	5.2	－		47-22	19a	Z9914 ～9915
23	屋蓋部 （隅棟）	(8.8)	(7.8)	3.3	Bb	0.7	平行形	2	(6.5) 2.7＋(3.8)	1.4	1.3	0.4～0.6	4.5	－		47-23	44	Z9916 ～9917
24	屋蓋部 （隅棟）	(11.2)	(11.1)	2.5	Bb	0.7	平行形	2	7.0 2.6＋4.4	1.3～1.4	1.5～1.6	0.6～0.7	5.3	完帯幅1.4 高1.1	44-24	47-24	39	Z9918 ～9919
25	屋蓋部	(10.0)	(8.4)	2.1	Bb	0.7	平行形	2	6.4 1.7＋4.7	1.1～1.4	1.4～1.7	0.4～0.5	3.8	完帯幅1.2 高0.8	44-25	47-25	36	Z9920 ～9921
26	屋蓋部	(10.3)	(8.0)	2.0	Bb	0.7	平行形	2	6.9 2.0＋4.9	1.2～1.5	1.8	0.4	4.5	－		47-26	33	Z9922 ～9923
27	屋蓋部	(8.1)	(6.7)	1.7	Bb	0.7	平行形	2	6.8 1.8＋5.0	1.1	1.3	(0.4)	4.2	－		47-27	43	Z9924 ～9925
28	屋蓋部	(6.3)	(3.2)	1.6	Bb	0.7	平行形	2	(5.0) 2.1＋(2.9)	1.5	－	0.5	3.0	－		47-28	41	Z9926 ～9927
29	屋蓋部	(6.0)	(4.6)	1.7	Bb	0.7	平行形	2	(5.6) 2.6＋(3.0)	(1.1)	(1.1)	0.4	(3.8)	－		47-29	45	Z9928 ～9929
30	屋蓋部 （隅棟）	(9.5)	(6.5)	4.4	B	0.7	平行形	(2)	(4.0) 2.9＋(1.1)	1.2	1.8	0.7	(3.2)	－		47-30	38	Z9930 ～9931
31	屋蓋部 （隅棟）	(6.6)	(6.4)	2.3	B	0.7	平行形	(1)	(4.3)	0.8	1.4	(0.3)	(3.4)	－		47-31	35	Z9932 ～9933
32	屋蓋部 （隅棟）	(8.0)	(6.3)	2.5	B	0.7	平行形	(1)	(3.6)	1.2	1.7	(0.3)	(2.2)	－		47-32	8	Z9934 ～9935
33	屋蓋部 （隅棟）	(8.0)	(5.3)	1.7	B	0.7	平行形	(2)	(4.5) 1.8＋(2.7)	1.2	1.1	0.5	(3.8)	－		47-33	42	Z9936 ～9937
34	屋蓋部 （隅棟）	(4.9)	(4.6)	2.0	B	0.7	平行形	(2)	(2.1) 2.1＋	1.3	1.7	0.8	(3.3)	－		47-34	25	Z9938 ～9939
35	屋蓋部	(3.9)	(3.0)	1.5	B	0.7	平行形	(2)	(3.7) 2.0＋(1.0)	1.1	－	0.3	1.7	－		47-35	50	Z9940 ～9941
36	屋蓋部	(9.2)	(5.1)	1.3	B	0.7	平行形	(2)	(3.7) (0.7)＋3.0	－	－	－	－	－		47-36	81	Z9942 ～9943
37	屋蓋部 （隅棟）	(5.3)	(4.5)	2.0	B	0.7 a	平行形	(1)	(3.0)	(1.8)	－	（隅0.9）	（隅5.0）	－		47-37	47	Z9944 ～9945
38	屋蓋部	(6.3)	(4.5)	1.6	B	0.7	平行形	(1)	(2.5)	1.3	－	(0.3)	(2.9)	－		47-38	21	Z9946 ～9947
39	屋蓋部	(4.8)	(4.4)	1.6	B	0.7	平行形	(1)	(2.5)	－	－	－	－	－		47-39	24	Z9948 ～9949
40	屋蓋部	(4.3)	(3.9)	1.4	B	0.7	平行形	(1)	(3.2)	1.8	－	(0.2)	(2.4)	－		47-40	22	Z9950 ～9951

第20表　瓦塔（屋蓋部）属性表（1）

番号	種類	幅	奥行	厚	分類	屋根瓦				軒裏				天井	図版	写真図版	登録No	写真登録No
						瓦種	断面	段数	瓦長 軒より	垂木幅	垂木間幅	垂木高	垂木長					
41	屋蓋部	(4.5)	(3.0)	1.2	B	0.7	半円形	(1)	(2.9)	1.5	－	(0.3)	(3.0)	－		47-41	29	Z9952 ～9953
42	屋蓋部	(7.3)	(5.3)	1.3	B	0.7	半円形	(1)	(3.8)	－	－	(0.2)	－	－		47-42	23	Z9954 ～9955
43	屋蓋部	(4.5)	(3.8)	1.5	B	0.7	半円形	(1)	(2.8)	1.1	(1.3)	(0.2)	(1.6)	－		47-43	27	Z9956 ～9957
44	屋蓋部	(4.3)	(3.4)	1.5	B	0.7	半円形	(1)	(2.5)	－	－	－	－	－		47-44	28	Z9958 ～9959
45	屋蓋部	(4.3)	(4.3)	1.3	B	0.7	半円形	(1)	(2.3)	－	－	－	－	－		47-45	26	Z9960 ～9961
46	屋蓋部	(5.3)	(5.0)	2.0	B	0.8	半円形	(2)	(4.6) 2.2＋(2.6)	1.3	－	0.7	4.0	－		47-46	34	Z9962 ～9963
47	屋蓋部	(4.5)	(3.6)	1.8	B	0.8	半円形	(2)	(3.3) 2.1＋(1.2)	1.2	(1.5)	0.7	(2.7)	－		47-47	40	Z9964 ～9965
48	屋蓋部	(5.5)	(4.7)	1.6	B	0.8	半円形	(2)	(3.3) 1.8＋(1.5)	1.6	1.4	0.4	(3.0)	－		47-48	31	Z9966 ～9967
49	屋蓋部 (隅棟)	(6.1)	(5.6)	1.6	B	0.8	半円形	(1)	(3.5)	1.0	1.6	(0.3)	(3.4)	－		47-49	49	Z9968 ～9969
50	屋蓋部	(5.2)	(4.4)	1.8	B	0.7	半円形	(1)	(1.1)	－	－	－	－	突帯幅1.0～2.0 高0.9		47-50	196	Z9970 ～9971
51	屋蓋部	(9.3)	(7.3)	1.8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	突帯幅1.2 高0.8 心柱置逆毛		48-51	15	Z9972 ～9973
52	屋蓋部	(9.2)	(5.9)	2.2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	突帯幅1.5 高1.0 心柱置逆毛	44-52	48-52	39	Z9974 ～9975
53	屋蓋部	(6.3)	(5.7)	1.1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	心柱置逆毛		48-53	52	Z9976 ～9977
54	屋蓋部	(4.2)	(4.0)	1.0	－	－	－	－	－	－	－	－	－	心柱置逆毛		48-54	53	Z9978 ～9979
55	瓦葺屋蓋部	(13.5)	(10.5)	1.8	－	0.7	半円形	(5)	(9.3) (棟木より) 2.1＋1.6＋1.7＋ 2.3＋(1.6)	－	－	－	－	大棟 幅1.9	44-55	48-55	57	Z9980 ～9981
56	瓦葺屋蓋部	(4.6)	(3.8)	2.0	－	0.7	半円形	1	(ひらば瓦 (袋棟より) 2.0	－	－	－	－	袋棟 幅0.9		48-56	58	Z9982 ～9983
57	瓦葺屋蓋部	(5.8)	(5.5)	1.5	－	0.7	半円形	(3)	(5.0) (棟木より) (2.4)＋1.7＋(0.9)	－	－	－	－	－		48-57	59	Z9984 ～9985

第21表　瓦塔（屋蓋部）属性表（2）

番号	種類	幅	高	厚	分類	特徴	図版	写真図版	登録No	写真登録No
58	軸部 (相輪部)	(23.5)	(27.8)	3.2	Ⅱ1a	屋蓋受け部はやや下方に張り出す。その間は円錐状 台輪(高2.3cm・幅1.3～1.1cm)・屋蓋受け部間は縦架材(通肘木)で3段に分割。上段に持ち送り状の粘土帯。中下段に逆凸形の突付き三斗 台輪下側2か所に柱(幅0.9cm・高0.8cm)。柱の左右に隙に部が残る二段構造。台輪中央点下にY字状の粘土帯。隙に部上側に内法長押(幅0.9cm・高0.9cm)。台輪と内法長押の間の壁面に縦位沈線(間隔0.8～1.3cm) 突付き三斗・台輪・内法長押・Y字状粘土帯・柱・隙に部縦沿・縦位沈線間に赤色塗彩	45-58	48-58	60	Z9986 ～9987
59	軸部 (相輪部)	(7.0)	(7.1)	2.8	Ⅰ	台輪(高1.8cm・幅1.3cm)上側に粘土帯の剥離痕。台輪下側に縦位沈線(間隔1.2～1.5cm)		48-59	62	Z9988 ～9989
60	軸部 (相輪部)	(6.2)	(4.1)	0.9	Ⅰ	隙に部上端から1.5cm上に縦位沈線。その上位に縦位沈線(間隔0.9～1.1cm)。縦位沈線間の一部赤色塗彩		48-60	63	Z9990 ～9991
61	軸部 (相輪部)	(7.4)	(9.4)	2.4	Ⅱ1	隙柱(径1.4cm)は円形。隙柱を挟み片一方の壁面に隙に部・もう一方の壁面に縦位沈線とその下位に縦位沈線。縦位沈線間の一部赤色塗彩		48-61	61	Z9992 ～9994
62	軸部 (相輪部)	(7.6)	(11.4)	2.6	b	屋蓋受け部と台輪(幅0.7cm・高0.4cm)間は縦架材(通肘木)で2段に分割。上段に粘土帯の剥離痕。下段に逆凸形の突付き三斗。台輪(幅0.1～0.8cm)柱(幅0.9cm・高0.5cm)・内法長押(幅1.1cm・高1.7cm)。突付き三斗・台輪・内法長押に黒色塗彩	45-62	48-62	72	Z9995 ～9996
63	軸部 (相輪部)	(7.2)	(8.2)	1.7	b	屋蓋受け部と台輪(幅0.7cm・高0.5cm)間は縦架材(通肘木)で2段に分割。上段に粘土帯の剥離痕。下段に逆凸形の突付き三斗		48-63	71	Z9997 ～9998
64	軸部 (相輪部)	(6.4)	(6.4)	1.6		縦架材(通肘木)の上位に粘土帯の剥離痕。下位に逆凸形の突付き三斗		48-64	69	Z9999 ～10000
65	軸部 (相輪部)	(7.1)	(6.1)	1.6		縦架材(通肘木)の上位に粘土帯の剥離痕。下位に逆凸形の突付き三斗		48-65	70	Z10001 ～10002
66	軸部 (相輪部)	(3.6)	(5.8)	1.8		逆凸形の突付き三斗		48-66	68	Z10003 ～10004
67	軸部 (相輪部)	(8.1)	(5.7)	1.7		台輪(幅0.8～0.9cm・高0.5cm)の上位に逆凸形の突付き三斗。下位に柱の剥離痕。台輪に黒色塗彩		48-67	67	Z10005 ～10006
68	軸部 (相輪部)	(5.5)	(4.5)	1.4		台輪(幅0.9cm・高0.6cm)の上位に逆凸形の突付き三斗の剥離痕。下位に柱の剥離痕。台輪に赤色塗彩		48-68	74	Z10007 ～10008
69	軸部 (相輪部)	(19.0)	(12.6)	2.8	Ⅱ	台輪(幅0.8cm・高0.5cm)の下位に2本の柱(幅0.7～0.8cm・高0.5cm)。中央間に隙に部が残る三段構造。隙に部と隙に内法長押(幅1.4cm・高1.7cm)。隙に部右上の内法長押を貫通する幅不明穴(径0.9cm)。台輪・内法長押・柱・隙に部縦沿に赤色塗彩	45-69	48-69	77	Z10009 ～10010

第22表　瓦塔（軸部・相輪部）属性表（1）

番号	種類	幅	高	厚	分類	特徴	図版	写真図版	登録番号	写真登録番号
70	軸部（初軸部）	(13.0)	(10.4)	2.9	II	台幅(幅0.8cm・高0.6cm)の下位に1本の柱(幅0.8cm・高0.5cm)と間口部、間口部上側に内法長押(幅1.0cm・高1.9cm)、間口部右上の内法長押を貫通する幅ずり穴(径0.9cm)、台幅・内法長押・柱・間口部縁辺に黒色塗彩	45-70	48-70	76	Z10011～10013
71	軸部（初軸部）	(8.5)	(5.0)	2.5	II	間口部上側に内法長押(幅1.0cm・高1.6cm)、間口部右上の内法長押を貫通する幅ずり穴(径約0.8cm)、内法長押・間口部縁辺に赤色塗彩		48-71	99	Z10014～10015
72	軸部（初軸部）	(5.6)	(9.0)	2.6	II	間口部右側に柱(幅0.8cm・高0.6cm)、間口部上側に内法長押(幅0.9cm・高1.5cm)、間口部右上の内法長押を貫通する幅ずり穴(径0.6cm)、内法長押・柱・間口部縁辺に赤色塗彩		48-72	75	Z10016～10017
73	軸部（初軸部）	(5.6)	(5.0)	2.3	II	柱(幅0.8cm・高0.5cm)、内法長押(幅1.2cm・高1.4cm)		48-73	73	Z10018～10019
74	軸部（初軸部）	(13.2)	(20.4)	奥行(3.6)	II ii	隅柱(厚1.2cm)は円形、隅柱を挟んだ壁面に間口部、右壁面に1本の柱(幅1.0cm・高0.9cm)と間口部、上端に内法長押の調整板、二重基壇(幅3.3cm・高1.8cm)、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩	45-74	49-74	64	Z10020～10021
75	軸部（初軸部）	26.3	(9.1)	奥行(7.5)	I iii	隅柱(厚1.0cm)は円形、隅柱際に2本の柱(幅1.0cm・高0.6cm)、中央間に間口部がある三間構造、左壁面に1本の柱(幅0.7～0.8cm・高0.5cm)と間口部、二重基壇(幅3.2～3.5cm・高1.8cm)、間口部上下の基壇に幅ずり穴(径0.8cm)、隅柱・柱・間口部縁辺・基壇端部に黒色塗彩	45-75	49-75	81	Z10022～10023
76	軸部（初軸部）	(14.7)	(14.7)	奥行(5.9)	II	隅柱(厚1.0cm)は円形、隅柱を挟んだ壁面は1本の柱(幅0.8cm・高0.5cm)と間口部、右壁面は矢筈、二重基壇(幅3.3cm・右4.8cm・高1.4～1.6cm)、間口部右下の基壇に幅ずり穴(径0.5cm)、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩か		49-76	82	Z10024
77	軸部（初軸部）	(9.0)	(16.2)	奥行(7.5)	I iii	隅柱(厚1.1cm)は円形、隅柱を挟んだ壁面に1本の柱(幅1.0cm・高0.7cm)と間口部、右壁面は3.5cm壁が延びる、二重基壇(幅3.0～3.1cm・高2.2cm)、間口部右下の基壇に幅ずり穴(径1.0cm)、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-77	84・95	Z10025
78	軸部（初軸部）	(14.0)	(8.1)	奥行(9.6)	I iii	隅柱は調整痕から円形と考えられる、隅柱を挟んだ左壁面に柱の調整痕と間口部、右壁面に1本の柱(幅0.9cm・高0.6cm)と間口部、二重基壇(幅3.1～3.5cm・高2.0cm)、左壁面の間口部右下の基壇に幅ずり穴(径1.0cm)、柱・間口部縁辺・基壇端部に黒色塗彩		49-78	85	Z10026
79	軸部（初軸部）	(7.5)	(1.6)	奥行(4.2)		二重基壇(幅3.3～3.7cm・高1.5cm)、幅部穴(径0.7cm)、基壇端部に黒色塗彩		49-79	83	Z10027
80	軸部（初軸部）	(5.8)	(1.8)	奥行(4.5)		二重基壇(幅3.4～4.0cm・高1.8cm)、基壇端部に黒色塗彩か		49-80	86	Z10028
81	軸部（初軸部）	(4.9)	(2.3)	奥行(3.7)		二重基壇(幅3.4cm・高2.2cm)		49-81	87	Z10029
82	軸部（初軸部）	(6.8)	(11.3)	2.5	II ii	隅柱(厚1.4cm)は円形、隅柱を挟んで一方の壁面に間口部・もう一方の壁面に1本の柱(幅1.0cm・高0.9cm)と間口部、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-82	65	Z10030～10031
83	軸部（初軸部）	(4.1)	(6.0)	2.6	II ii	隅柱(厚1.2cm)は円形、隅柱を挟んで一方の壁面に間口部・もう一方の壁面は壁が延びる、隅柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-83	66	Z10032～10033
84	軸部（初軸部）	(6.7)	(8.0)	1.6	II	隅柱(厚1.1cm)は円形、壁面に1本の柱(幅0.9cm・高0.7cm)と間口部、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-84	78	Z10034～10035
85	軸部（初軸部）	(6.9)	(11.1)	1.8	II	隅柱(厚1.3cm)は円形、壁面に1本の柱(幅1.0cm・高0.7～0.8cm)と間口部、隅柱・柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-85	94	Z10036～10037
86	軸部（初軸部）	(6.8)	(10.0)	1.3	II	隅柱(厚1.0cm)は円形、壁面に1本の柱(幅0.8cm・高0.5cm)と間口部、隅柱・柱・間口部縁辺に黒色塗彩		49-86	96	Z10038
87	軸部（初軸部）	(6.4)	(7.5)	1.7	II	壁面に1本の柱(幅0.8cm・高0.6cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-87	98	Z10039
88	軸部（初軸部）	(6.0)	(6.5)	1.8	II	壁面に1本の柱(幅0.6cm・高0.7cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-88	91	Z10040
89	軸部（初軸部）	(6.3)	(8.5)	1.6	II	壁面に1本の柱(幅0.8cm・高0.5cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-89	92	Z10041
90	軸部（初軸部）	(6.3)	(7.0)	1.5	II	壁面に1本の柱(幅0.9cm・高0.5cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-90	97	Z10042
91	軸部（初軸部）	(6.6)	(6.6)	1.3	II	壁面に1本の柱(幅0.7cm・高0.5cm)と間口部、柱・間口部縁辺に黒色塗彩		49-91	93	Z10043
92	軸部（初軸部）	(5.2)	(6.8)	1.3	II	壁面に1本の柱(幅0.7cm・高0.5cm)と間口部、柱・間口部縁辺に黒色塗彩		49-92	89	Z10044
93	軸部（初軸部）	(5.6)	(5.6)	1.8	II	壁面に1本の柱(幅0.9cm・高0.8cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-93	90	Z10045
94	軸部（初軸部）	(3.5)	(8.8)	1.3		壁面に1本の柱(幅0.8cm・高0.5cm)と間口部、柱・間口部縁辺に赤色塗彩		49-94	88	Z10046
95	軸部（初軸部）	(4.9)	(5.8)	0.9	II	壁面に1本の柱の調整痕と間口部、間口部縁辺に赤色塗彩		49-95	100	Z10047
96	軸部（初軸部）	(5.8)	(6.8)	1.7		壁面に1本の柱(幅1.0cm・高0.8cm)、柱の左右壁面に間口部か、上端に内法長押か		49-96	79	Z10048
97	軸部（初軸部）	(7.2)	(5.0)	1.6		壁面に1状に粘土帯か(幅0.8cm・高0.8cm)		49-97	80	Z10049
98	軸部（二層以上）	F端幅12.9	11.5	奥行13.1		上端幅10.8cm、屋蓋受け部は下方に張り出す、隅部と中央部に将道り状の粘土帯、その間の張り出しは円弧状、隅と壁面中央に赤色塗彩で柱を表現	45-98	49-98	104	Z10050
99	軸部（二層以上）	(12.0)	(5.0)	奥行(2.4)		屋蓋受け部は下方に張り出す、隅部と中央部に将道り状の粘土帯、その間の張り出しは円弧状、壁面に間口部の一部と赤のみ隅部あり	45-99	49-99	107	Z10051～10052
100	軸部（二層以上）	(9.3)	(3.7)	(3.0)		屋蓋受け部は下方に張り出す、隅部と中央部に将道り状の粘土帯、その間の張り出しは円弧状		49-100	106	Z10053～10054
101	軸部（二層以上）	(10.5)	(6.9)	3.6		屋蓋受け部は下方に張り出す、隅部と中央部に将道り状の粘土帯、その間の張り出しは円弧状、隅部に黒色塗彩		49-101	109 112	Z10055～10056
102	軸部（二層以上）	(8.8)	(8.5)	1.6		屋蓋受け部は下方に張り出す、中央部に将道り状の粘土帯の調整痕、張り出しは円弧状か、隅に黒色塗彩で柱を表現、張り出し端部に黒色塗彩		49-102	105	Z10057
103	軸部（二層以上）	(8.1)	(6.5)	1.2		屋蓋受け部は下方に張り出す、隅・中央部に将道り状の粘土帯の調整痕、中央に赤色塗彩で柱を表現		49-103	108	Z10058
104	軸部（二層以上）	(4.2)	(4.9)	1.3		屋蓋受け部は下方に張り出す、張り出しは円弧状か		49-104	110	Z10059
105	軸部（二層以上）	(5.4)	(5.1)	0.9		黒色塗彩で柱を表現か		49-105	111	Z10060
106	軸部（三層）	上径3.8	高さ4.9	下径(8.6)		外面ロクロ調整・上端部手持ちヘラケズリ、内面ロクロ調整	45-106	49-106	114	Z10061

第23表　瓦塔（軸部・相輪部）属性表（2）

図版46　屋蓋部（1）

20
22
21
23
24
27
25
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
縮尺1/4
0
5
10
15
20cm

図版47　屋蓋部（2）

図版48　屋蓋部（3）・軸部（1）

縮尺1/4

0 5 10 15 20cm

図版49　軸部（2）・相輪部

V．付　章

1．関連研究・普及活動

（1）多賀城跡環境整備事業

多賀城跡環境整備事業は昭和45年度から５ヵ年計画を積み重ねる形で実施してきており、平成27年度を初年次とする第10次５ヵ年計画から、政庁南面地区を対象に整備工事を進めている（第24表）。これは当地区に位置する政庁南大路や城前官衙の遺構表示を中心としたものであり、多賀城創建1300年の記念の年に当たる令和６年の供用開始をめざしている。

令和４年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により事業を繰り越していた令和３年度整備工事と、令和４年度整備工事を実施し、そのうち令和３年度分は遺構表示工、園路広場工、便益施設工、張芝工等を実施し、令和５年３月３１日に完了した。令和４年度分は遺構表示工、管理用道路工、排水施設工、張芝工等を実施しており、工事の一部を令和５年度へ繰り越すこととなった。

城前官衙の遺構表示エリアの北半部の整備が完了したため、地元住民への周知と公開を目的として令和４年10月９日に「城前官衙プレオープンセレモニー」を開催し、来賓や地区住民約100名が参加した。

	年　度	整備地区	計画内容	対象面積
第10次５ヵ年計画	平成 27（2015）	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、総合解説広場補修	24,000㎡
	平成 28（2016）		政庁南大路復元舗装、地形測量	
	平成 29（2017）		基盤整備工、実施設計	
	平成 30（2018）		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
	令和 元（2019）		雨水排水工、災害復旧 政庁南大路石垣復元・路面復元舗装、大路関連遺構表示	
第11次５ヵ年計画	令和 2（2020）	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、城前官衙床張建物表示、建物構造復元	
	令和 3（2021）		城前官衙床張建物表示、土間建物表示、掘立柱塀表示 園路工、解説広場工、便益施設工、張芝工	
	令和 4（2022）		城前官衙土間建物表示、掘立柱塀表示、張芝工	
	令和 5（2023）		説明板、張芝、便益施設	
	令和 6（2024）	作貫地区	空堀露出展示、説明板、緑化修景	—

第24表　多賀城跡環境整備事業第10・11次５ヵ年計画（令和３年度までは実績）

（2）特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査や、工事に際する立会を行っている。令和４年度に扱った現状変更は、令和３年度以前の申請で繰り越しの２件（第25表１・２）と、今年度に申請があった２件（３・４）である。いずれも、多賀城市が事業主体である中央公園整備工事ならびに南門復元工事に伴い、継続的に実施されている事業である。１は植栽工事に伴う立会を行い、掘削が表土・盛土内に収まることを確認した。２は南門周辺の地形修復工事に伴い、板柵の設置、管理用道路入口造成、築地塀基礎工事を行うにあたって、一部切土が必要になることから立会を行っ

た。その結果、掘削が表土・盛土内に収まることを確認し、遺物は出土していない。3は、仮設電気引込柱の撤去に立ち会ったが、過去の発掘調査の埋戻し土に収まることを確認した。4は今後、施工に合わせて工事立会を実施する予定である。このほかに、現状変更許可の権限が市に移譲されている水道管・電柱等の工事に伴い、8件の立会を実施（一部は予定）している。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁許可	対応
1	中央公園整備工事（植栽）	多賀城市長	多賀城市市川字立石1-1ほか	平成29年2月9日	28受文庁第4号の1972 平成29年3月10日	工事立会 令和4年4月28日
2	南門復元工事（地形修復）	多賀城市長	多賀城市市川字坂下19-1ほか	令和3年10月7日	3文庁第1640号 令和3年11月19日	工事立会 令和4年7月11日 令和4年10月31日 令和5年2月21日
3	南門復元工事（仮設電気引込柱設置）	多賀城市長	多賀城市市川字田屋場40-1	令和4年11月15日	4文庁第3524号 令和4年12月16日	工事立会（無断現状変更） 令和4年12月27日
4	南門復元工事（築地塀復元工事等）	多賀城市長	多賀城市市川字坂下19-1ほか	令和5年1月11日	4文庁第4358号 令和5年2月17日	工事立会予定

第25表　令和4年度現状変更一覧

（3）多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第8次5ヵ年計画を進めていた。平成23年度以降は、東日本大震災による復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援を優先したため事業を休止していたが、集中復興期間が令和2年度で終了したため、令和3年度から事業を再開した。今年度は、第8次5ヵ年計画の4年次目として、大崎市教育委員会の共催を得て大崎市大吉山瓦窯跡の第2次調査を実施した。発掘調査面積は約260㎡で、総事業費は2,834千円（50％国庫補助）である。

今回は指定地の東部を対象として、窯4基、灰原2か所を面的に検出し、一部の窯の内部を精査した。その結果、窯の規模、構造や新旧関係が明らかになったほか、県内で初の出土例となる陽出蓮花文平瓦を含む多賀城第Ⅰ期の瓦が多数出土するなど、大きな成果を挙げることができ、その詳細を多賀城関連遺跡発掘調査報告書第38冊として刊行した。次年度は窯跡全体の様相や変遷を検討するため、指定地の西部を対象に調査を実施する予定である。

（4）遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した諸遺構の保存と活用を目的として、他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は、県内の城柵官衙遺跡の発掘調査として、東松島市赤井官衙遺跡、岩沼市原遺跡に赴き、担当者と意見交換しながら多賀城との関係や調査方法等についての基礎資料を得た。また、福島県南相馬市に赴き、地元の泉官衙遺跡をはじめとする各地の宮都・城柵官衙遺跡について、発掘遺構から復元整備に至るまでの考察事例やその過程で得られる学術的成果、復元後の課題や再整備方法などを検討し、有益な情報を得ることができた。

（5）公開講座の開催

当研究所の研究員がそれぞれの専門分野の視点から、これまでの調査研究の蓄積を踏まえて、多賀城跡や古代東北地方に関する一般向けの講座を開催した。会場は東北歴史博物館の３階講堂を使用し、毎回約50名の参加者を得た。

第１回　10月15日（土）13:30～15:00

①「多賀城の金属製品」（矢内雅之）　②「多賀城の鍛冶」（鈴木貴生）

第２回　10月29日（土）13:30～15:00

①「多賀城廃寺の鬼瓦を観察する」（初鹿野博之）　②「多賀城廃寺の土製品」（高橋栄一）

また、令和４年３月に多賀城跡出土漆紙文書が重要文化財に指定されたこと、多賀城跡が史蹟指定100年を迎えたことを記念して、平川南氏を講師に招き特別講演会を開催した。聴講者は講堂定員の145名であった。

多賀城歴史講座　特別講演会　11月５日（土）13：15～15：00

「多賀城漆紙文書　地下の正倉院文書は語る」講師：平川南氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）

（6）その他

1）現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページで公開するとともに、下記の現地説明会を行った。

大吉山瓦窯跡第２次発掘調査現地公開	古田和誠・矢内雅之	令和４年７月19～21日
多賀城跡第96次発掘調査現地説明会	初鹿野博之・鈴木貴生	令和４年９月17日

また、以下の団体の史跡見学等に関して説明を行った。

多賀城市埋蔵文化財調査センター歴史講座	白崎恵介	令和４年10月22日
多賀城跡城前地区ピアノコンサート現地説明	白崎恵介	令和４年10月29日
東北・歴史まちづくり推進会議現地視察	白崎恵介	令和４年11月11日
日本造園学会東北支部庭園見学会	白崎恵介	令和４年11月13日
塩竈市立浦戸小学校６年生社会科校外学習	初鹿野博之・古田和誠	令和４年11月25日
北海道・東北保存科学研究会現地視察	白崎恵介	令和５年１月19日
仙台地方振興事務所職員研修現地視察	白崎恵介	令和５年２月21日

2）資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

NHK仙台放送局、奥州市埋蔵文化財調査センター、大崎市教育委員会、(株)学研プラス、(株)KADOKAWA、(株)河北新報社、(株)河合出版、(株)仙台放送、(株)帝国書院、(株)日刊岩手建設工業新聞社、(株)雄山閣、(株)吉川弘文館、群馬県立博物館、斎宮活性化実行委員会、佐川正敏、佐藤敏幸、多賀城市議会事務局、多賀城市教育委員会、高橋透、館内魁生、千葉孝弥、椿野智之、東北学院大学博物館、名取市歴史民俗資料館、谷津愛奈、柳澤和明、亘理町立郷土資料館

3）各機関・委員会などへの協力

高橋栄一　秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田県払田柵跡環境整備審議会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会委員、特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会委員、多賀城市文化財保護委員会委員、栗原市史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討会委員、多賀城創建1300年記念事業実行委員会幹事会幹事、古代城柵官衙遺跡検討会世話人代表

白崎恵介　釜石市橋野高炉跡史跡整備検討委員会委員、松島町文化財保護委員会委員、松島町景観審議会委員、亘理町三十三間堂遺跡整備委員会委員、塩竈市文化財保護審議会委員、塩竈市文化財保存活用地域計画作成調査部会委員、東松島市赤井官衙遺跡群保存活用計画策定検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、多賀城創建1300年記念事業実行委員会幹事会幹事

初鹿野博之　東京大学総合研究博物館研究事業協力者

4）講演会・研究会などへの協力・執筆

矢内雅之「大吉山瓦窯跡と周辺の古代の遺跡」名生館学講座〈古代編〉
古川東大崎地区公民館　令和４年９月10日

高橋栄一「多賀城と東アジア」第３回日韓市民文化交流会
多賀城・七ヶ浜市民活動団体等連絡協議会　令和４年10月22日

白崎恵介「鎮守府と城前官衙の調査・整備」史都多賀城観光ボランティアガイドの会
多賀城市市民活動サポートセンター　令和４年10月24日

初鹿野博之「多賀城跡第96次調査」令和４年度宮城県遺跡調査成果発表会報告
栗原文化会館　令和４年12月10日

古田和誠「大吉山瓦窯跡 第２次発掘調査」　同上　令和４年12月10日

矢内雅之「大吉山瓦窯跡 第２次発掘調査」第49回古代城柵官衙遺跡検討会
南相馬市ホテル丸屋グランデ　令和５年２月18日

白崎恵介「多賀城跡外郭南門と城前官衙の復元」　同上　令和５年２月19日

初鹿野博之「多賀城の変遷と城下の方格地割の形成」公開講座　斎宮・多賀城・大宰府
いつきのみや地域交流センター　令和５年３月４日

白崎恵介「遺跡保護の多様なあり方を求めて　多賀城からの報告」日本遺跡学会
奈良文化財研究所　令和５年３月５日

5）連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県教育委員会教育長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

高橋　栄一（客員教授）　文化財科学研究演習

高橋　栄一（客員教授）・白崎　恵介（客員准教授）　文化財科学研究実習Ⅰ

2．組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則(抄)〉

（昭和41年4月26日教育委員会規則第4号　最終改正平成31年4月教育委員会第1号）

第13条の五　文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四　多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第21条　特別史跡多賀城附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2　多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名　称	位置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3　多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

一　特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。

二　特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。

三　特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。

四　庶務に関すること。

第24条　必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職　務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2　上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

〈職員〉

所　長　高橋　栄一

（兼博物館管理部長）　鈴木　端彦

（兼博物館副参事兼総括次長）　加藤　広

≪研究班≫

上席主任研究員（班長）	白崎　恵介
副主任研究員（副班長）	初鹿野　博之
研　究　員	古田　和誠
技　　師	鈴木　貴生
技　　師	矢内　雅之

≪（兼東北歴史博物館管理班）≫

（兼博物館次長（班長））	門脇　秀実
（兼博物館主任主査（副班長））	阿部　美歩
（兼博物館主任主査）	鉄本　紀章
（兼博物館主事）	菅原　皓平

3．沿革と実績

（1）宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年　月	事　　項
大正 11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法により史蹟指定（大正11.10.12）。指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、5カ年計画による多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第1次発掘調査実施（県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授）
37. 8	多賀城廃寺跡第2次発掘調査実施。主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査（第1次）開始。以後40年8月（第3次）まで実施。政庁地区の朝堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定（昭和41.4.11）
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査（第4次）を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置（委員長伊東信雄）。研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山窯跡の発掘調査実施
45. 3	「多賀城跡調査報告Ⅰ－多賀城廃寺跡－」刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48.10	金堀地区を対象とした第21次調査で計画様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示（昭和49.2.18）
49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手（昭和50年度まで継続）
49. 8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和54年度まで継続）
53. 4	研究第一科・同第二科の2科制となる。遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表。これにより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
54. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅰ「多賀城漆紙文書」刊行
55. 3	「多賀城跡　政庁跡　図録編」刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示（昭和55.3.24）
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手（昭和60年度まで継続）。初年度の調査で8世紀初頭の官衙中枢部を検出
57. 3	「多賀城跡　政庁跡　本文編」刊行
58.11	第43・44次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城南面地域の追加指定が官報告示（昭和59.3.27）
60. 9	名生館遺跡関連合戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	東山遺跡の発掘調査に着手（平成4年度まで継続）
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第53次調査で奈良時代の外郭東門を発見
平成 2. 6	栗木遺跡の追加指定が官報告示（平成2.6.28）
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門－政庁間整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦窯跡を発見
5. 9	山王遺跡千刈田地区の追加指定が官報告示（平成5.9.22）
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開（平成13年度まで継続）。政庁の全貌を解明
7. 6	第310回指導委員会において南門－政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城碑の重要文化財（古文書）指定が官報告示（平成10.6.30）
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2科制が廃され、研究所となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第51回河北文化賞を受賞
14. 8	亀岡遺跡の発掘調査に着手（平成15年度まで継続）
15. 3	「多賀城跡－発掘のあゆみ－」刊行
15. 6	伊治城跡の史跡指定が官報告示
16. 4	多賀城政庁跡の再整備に先立ち、政庁地区の調査に着手（平成20年度まで継続）
16. 5	木戸窯跡群の発掘調査に着手（平成18年度まで継続）
17. 4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第13号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19. 8	日の出山窯跡群の発掘調査に着手（平成22年度まで継続）
20. 4	多賀城政庁跡の再整備に着手（平成26年度まで継続予定）
22. 3	「多賀城跡　政庁跡　補遺編」刊行
22. 9	多賀城跡発掘調査50周年記念事業を開催
22.10	「多賀城跡－発掘のあゆみ2010－」刊行
22.11	第82次調査で第Ⅰ期の外郭東門を新たに発見
23. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅱ「多賀城跡木簡Ⅰ」刊行
24. 5	東日本大震災の復旧工事に伴い、政庁正殿跡を調査。宝亀11（780）年の火災による焼失と建替えを確認
25. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅲ「多賀城跡木簡Ⅱ」刊行
26. 2	多賀城跡出土木簡と多賀城跡出土漆紙文書の県指定有形文化財（古文書）指定が公報告示（平成26.2.25）
26. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅳ「多賀城跡木簡Ⅲ」刊行
28. 2	鎮守府符の文書面について報道発表
28. 2	特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画を策定
29. 3	「多賀城跡　外郭跡Ⅰ －南門地区－」刊行
30. 3	「多賀城跡　政庁南面地区－城前官衙遺構・遺物編－」刊行
31. 3	「多賀城跡　政庁南面地区Ⅱ－城前官衙遺跡編－」刊行
令和 元	第93次調査で第Ⅲ期以降の外郭西北門を新たに発見
2. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅴ「多賀城施釉陶磁器」刊行
2. 3	「多賀城跡調査研究所設立発足50周年記念誌－」刊行
2. 3	「多賀城跡－発掘のあゆみ2020－」刊行
3. 3	「多賀城跡　政庁南面地区Ⅲ－政庁南大路・南北大路－」刊行
4. 3	多賀城跡出土漆紙文書が重要文化財に指定される

（2）事業実績

1）多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	次数	発掘調査地区	発掘面積（㎡）	経費（千円）
第一次5カ年計画	昭和44	5次	政庁地区南東部	1,980	9,000
		6次	政庁地区北東部	2,079	
		7次	外郭南辺中央部（多賀城碑付近）	264	
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000
		9次	政庁地区南西部	2,046	
		10次	外郭西辺中央部	495	
		11次	外郭東辺南部	660	
	昭和46	12次	外郭中央地区北部	3,795	12,000
		13次	外郭東辺東門付近	1,600	
		14次	外郭東地区北部	2,086	
	昭和47	15次	瀧の池周辺	112	13,000
		16次	政庁地区北半部	1,320	
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729	
		18次	外郭中央部地区北部	2,937	
	昭和48	19次	政庁地区北西部	2,640	17,000
		20次	外郭南辺中央部	990	
		21次	外郭西地区中央部	1,485	
		22次	城外南方（高平遺跡）	3,465	
第二次5カ年計画	昭和49	23次	外郭東地区北部（字大畑）	3,300	17,000
		24次	外郭南東隅	2,640	
	昭和50	25次	多賀城廃寺跡南大門推定地	2,310	22,000
		26次	多賀城廃寺跡中門前方地区	2,310	
		27次	象社宮西隣市川久保地区	660	
	昭和51	28次	五万崎地区	2,310	22,000
		29次	五万崎地区	2,310	
	昭和52	30次	五万崎地区	1,980	22,000
		31次	政庁北方隣接地区	1,980	
	昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000	22,000
		33次	外郭西門地区	1,000	
	昭和54	34次	東山地区南東湿地	1,300	30,000
		35次	瀧の池南地区	900	
	昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800	30,000
		37次	多賀城外南地方（砂押川東岸）地区	700	
第三次5カ年計画	昭和56	38次	作貫南端低湿地（緊急調査）	50	35,000
		39次	外郭東地域中央部作貫地区	2,500	
		40次	外郭南辺築地東半中央部（立石地区・緊急）	80	
	昭和57	41次	外郭東辺南築部（旧屋敷築地区）	1,200	32,000
		42次	外郭東地域中央部（作貫地区）	500	
	昭和58	43次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	800	32,000
		44次	外郭中央地区中央部（政庁南方）	2,500	
第四次5カ年計画	昭和59	45次	坂下地区	70	29,000
		46次	外郭西門地区	750	
		47次	外郭西辺中央部	1,000	
	昭和60	48次	外郭南門地区	800	29,000
		49次	外郭北門推定地区	450	
	昭和61	50次	政庁南地区	900	29,000
		51次	外郭北東隅東地区	500	
	昭和62	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500	29,000
		53次	外郭東門北東地区	1,000	
	昭和63	54次	外郭東門東地区	1,000	29,000
		55次	外郭東辺中央部（作貫地区）	500	
第五次5カ年計画	平成元	56次	大畑地区北半部	1,550	29,000
		57次	外郭東辺南半部（西沢地区）	500	
	平成2	58次	大畑地区中央部	1,470	30,000
		59次	大畑地区中央部東側	900	
	平成3	60次	大畑地区中央部	1,450	30,000
		61次	瀧の池地区	150	
	平成4	62次	大畑地区南半部	1,100	35,000
		63次	大畑地区北半部	1,700	
	平成5	64次	大畑地区北部	3,000	35,000
第六次5カ年計画	平成6	65次	外郭東門北部・現状変更に伴う調査	2,200	36,000
	平成7	66次	大畑地区北西部	3,000	35,000
	平成8	67次	大畑地区西部	3,000	39,000
	平成9	68次	大畑地区西部・多賀城碑	2,650	36,000
	平成10	69次	城前地区南部	2,000	36,000
第七次5カ年計画	平成11	70次	城前地区南部	2,000	37,700
	平成12	71次	城前地区南部	2,000	32,300
	平成13	72次	南門西側築地塀跡・南門一政庁間道路跡	1,000	28,900
	平成14	73次	南門東側築地塀跡・南門一政庁間道路跡	1,800	26,000
	平成15	74次	南門一政庁間道路跡	1,000	25,220
		75次	外郭北辺中央部	500	
第八次5カ年計画	平成16	76次	政庁東脇殿・後殿・北辺地区	1,640	24,463
	平成17	77次	政庁東楼・西脇殿・南面地区	970	23,730
	平成18	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区	2,700	16,610
	平成19	79次	政庁・外郭南門間道路、城前・瀧地区	1,350	14,168
	平成20	80次	山王囲地区・政庁南西地区	930	12,752
第九次5カ年計画	平成21	81次	瀧の池地区・政庁南西地区	900	12,064
	平成22	82次	外郭東辺伊保石地区	580	11,460
	平成23	83次	外郭南辺五万崎地区	960	11,447
	平成24	84次	外郭南辺五万崎地区	445	11,294
		85次	政庁地区　正殿跡	415	
	平成25	86次	外郭南辺坂下地区	350	10,300
第十次5カ年計画	平成26	87次	外郭南辺山屋地・坂下地区	910	9,901
	平成27	88次	外郭南辺立石地区	390	9,424
		89次	政庁南大路・城前地区	280	
	平成28	90次	外郭南辺坂下地区	430	9,224
	平成29	91次	外郭南門山屋地区（南北大路）	720	10,347
	平成30	92次	外郭南辺五万崎地区	200	9,255
第十一次5カ年計画	令和元	93次	外郭西辺丸山地区	300	10,688
	令和2	94次	政庁地区北方	600	10,672
	令和3	95次	政庁地区北方	700	8,902
	令和4	96次	政庁地区北方	280	8,925
		97次	外郭南辺坂下地区	150	
	令和5	98次	外郭西辺新西久保地区		
		99次	政庁地区北方		

調査面積累計	120,803㎡
調査費用累計（千円）	1,198,746
指定地総面積	約1,070,000㎡
調査面積／総面積	約11%

2）多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費（千円）
第1次5ヵ年計画	昭和45	政庁地区	南門展示・東脇殿表示	10,000
	昭和46		正殿・築地塀表示	20,000
	昭和47		西脇殿・築地塀表示	25,000
	昭和48	外郭東門地区	北西門・築地塀表示 東門・整穴住居表示	20,000
	昭和49	六月坂地区	掘立柱建物・倉庫・道路表示	20,000
第2次5ヵ年計画	昭和50	外郭東南隅地区	水質遺構保存施設	20,000
	昭和51		湿地修景・園路	10,000
	昭和52	鴻の池地区	南辺築地塀表示	16,000
	昭和53		多賀城碑周辺修景	16,000
	昭和54	南門地区	南門・築地塀保護 南門周辺住居の地形修復・緑化修景	20,000
第3次5ヵ年計画	昭和55	南門地区	園路・便益施設・緑化修景	30,000
	昭和56	外郭南築地東半部	緑化修景	30,000
		園路（資料館-南門）	園路・便益施設・緑化修景	
	昭和57	外郭南門地区東斜面	園路	28,000
			遺構保護盛土・緑化修景	
	昭和58	作貫地区	建物表示・便益施設・緑化修景	30,000
	昭和59		土塁及び空堀表示・便益施設	27,000
第4次5ヵ年計画	昭和60	作貫地区	遺構露出展示・便益施設・緑化修景	27,000
	昭和61	政庁南地区	地形修復・道路復元・緑化修景	27,000
		作貫地区	便益施設	
		薬師地区	緑化修景	
	昭和62	作貫地区北部	園路・緑化修景・便益施設	27,000
		政庁地区	便益施設・園路・緑化修景	
		薬師地区	便益施設・園路・緑化修景	
	昭和63	作貫地区北部・五陵南西側部	便益施設・園路・緑化修景	27,000
	平成元	北辺地区南半部	便益施設・園路・緑化修景	27,112
第5次5ヵ年計画	平成2	北辺地区北半部	便益施設・園路・緑化修景	30,000
	平成3		便益施設・園路・緑化修景	30,000
	平成4		便益施設	30,000
		東門・大畑地区東側部	地形修復・園路・緑化修景	
	平成5		建物表示・便益施設	35,000
	平成6		便益施設	35,000
第6次5ヵ年計画	平成7	東門・大畑地区西側北半部	道路復元・築地塀表示・便益施設・緑化修景	30,000
	平成8		地形修復・道路復元・緑化修景	39,000
	平成9	南門地区	道路表示・便益施設	51,000
			多賀城碑覆屋解体修理	
	平成10	東門・大畑地区西側北半部	道路表示・排水・緑化修景	35,000
	平成11		建物表示・便益施設・緑化修景	31,500

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費（千円）
第7次5ヵ年計画	平成12	柏木遺跡	造成・排水・法面保護	14,400
	平成13		法面・園路・植栽・排水	19,700
	平成14		法面保護・園路	9,300
	平成15		法面・遺構表示・園路・植栽	9,020
	平成16		園路広場・排水・植栽・照明	8,266
第8次5ヵ年計画	平成17	外郭北辺東北隅（木道再整備）	案内板・標柱整備	15,738
	平成18		基盤整備・広場・自然育成	11,016
	平成19		構造物撤去・広場・便益施設・自然育成	9,462
	平成20		築地塀舗装撤去	8,514
	平成21		築地塀舗装撤去	8,500
第9次5ヵ年計画	平成22	政庁地区再整備	遺構表示（西脇殿・西楼）	8,084
	平成23		遺構表示（東脇殿・東楼）	8,104
	平成24		遺構表示（後殿）	7,956
	平成25		敷地造成（北殿）	7,560
	平成26		遺構表示（北殿）	8,636
第10次5ヵ年計画	平成27	政庁南面地区	政庁南大路・説明板・休憩施設再整備	8,193
	平成28		政庁南大路再整備・地形測量	13,000
	平成29		構造物撤去・実施設計	15,000
	平成30		基盤整備（造成・排水）	76,708
	令和元		政庁南大路復元・大路関連遺構表示	163,833
第11次5ヵ年計画	令和2	政庁南面地区	床張建物表示、建物構造復元	211,770
	令和3		床張建物表示、土間建物表示、掘立柱塀表示	133,170
	令和4		土間建物表示、掘立柱塀表示、便益施設	64,043
	令和5		説明板、便益施設、張芝	
	令和6	作貫地区	遺構露出展示再整備、便益施設、緑化修景	

宮城県による整備面積（令和4年度末）	
多賀城跡	**168,964 ㎡**
政庁地区	18,725 ㎡
六月坂地区	9,335 ㎡
南辺東地区	18,462 ㎡
南門地区・南辺西地区	13,824 ㎡
作貫地区・東辺地区	27,934 ㎡
北辺地区	33,947 ㎡
東門・大畑地区	25,299 ㎡
政庁南面地区	21,438 ㎡
柏木遺跡	**3,759 ㎡**

整備事業費総計	**1,643,585 千円**

3）多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積（㎡）	経費（千円）
第1次5ヵ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5ヵ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小館・内館地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小館地区の調査	1,020	7,000
第3次5ヵ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原窯跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連窯跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中枢部の調査	1,200	7,000
第4次5ヵ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊場野遺跡	地形図作成・発掘調査	多賀城関連用窯跡調査	600	14,000
第5次5ヵ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5ヵ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側直接線上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	亀岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	亀岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5ヵ年計画	平成16	木戸窯跡群	第1次発掘調査	A地点西側直接線の調査	620	6,115
	平成17	木戸窯跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	木戸窯跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	八月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	3,520
		日の出山窯跡群	試掘調査	A地点北側の調査	200	
	平成20	日の出山窯跡群	第1次調査	F地点南側の調査	490	3,168
第8次5ヵ年計画	平成21	日の出山窯跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山窯跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大吉山瓦窯跡	東日本大震災により中止		0	0
	平成24～令和2		事業休止		0	0
	令和3	大吉山瓦窯跡	地形図作成・第1次発掘調査	遺構分布状況の把握	145	2,824
	令和4	大吉山瓦窯跡	第2次発掘調査	指定地東部の窯および灰原の調査	260	2,834
	令和5	大吉山瓦窯跡	第3次発掘調査			

調査面積累計	39,360㎡
調査費用累計	306,285千円

4）研究成果等刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

「年報1969」（第5・6・7次調査）	昭和45年3月	
「年報1970」（第8・9・10・11次調査）	昭和46年3月	
「年報1971」（第12・13・14次調査）	昭和47年3月	
「年報1972」（第15・16・17・18次調査）	昭和48年3月	
「年報1973」（第19・20・21・22次調査）	昭和49年3月	
「年報1974」（第23・24次調査）	昭和50年3月	
「年報1975」（第25・26・27次調査、東外郭線南端部）	昭和51年3月	
「年報1976」（第28・29次調査）	昭和52年3月	
「年報1977」（第30・31次調査）	昭和53年3月	
「年報1978」（第32・33次調査、環境整備）	昭和54年3月	
「年報1979」（第34・35次調査、環境整備）	昭和55年3月	
「年報1980」（第36・37次調査）	昭和56年3月	
「年報1981」（第38・39・40次調査）	昭和57年3月	
「年報1982」（第41・42次調査）	昭和58年3月	
「年報1983」（第43・44次調査）	昭和59年3月	
「年報1984」（第45・46・47次調査、環境整備）	昭和60年3月	
「年報1985」（第46・48・49次調査）	昭和61年3月	
「年報1986」（第49・50・51次調査）	昭和62年3月	
「年報1987」（第50・52・53次調査）	昭和63年3月	
「年報1988」（第54・55次調査）	平成元年3月	
「年報1989」（第56・57次調査）	平成2年3月	
「年報1990」（第58・59次調査）	平成3年3月	
「年報1991」（第60・61次調査）	平成4年3月	
「年報1992」（第62・63次調査）	平成5年3月	
「年報1993」（第64次調査）	平成6年3月	
「年報1994」（第65次調査、環境整備）	平成7年3月	
「年報1995」（第66次調査）	平成8年3月	
「年報1996」（第67次調査）	平成9年3月	
「年報1997」（第68次調査、多賀城碑覆屋解体修理）	平成10年3月	
「年報1998」（第69次調査）	平成11年3月	
「年報1999」（第70次調査）	平成12年3月	
「年報2000」（第71次調査）	平成13年3月	
「年報2001」（第72次調査、環境整備）	平成14年3月	
「年報2002」（第73次調査）	平成15年3月	
「年報2003」（第74・75次調査）	平成16年3月	
「年報2004」（第76次調査）	平成17年3月	
「年報2005」（第77次調査、環境整備）	平成18年3月	
「年報2006」（第78次調査）	平成19年3月	
「年報2007」（第79次調査）	平成20年3月	
「年報2008」（第80次調査）	平成21年3月	
「年報2009」（第81次調査）	平成22年3月	
「年報2010」（第82次調査、環境整備）	平成23年3月	
「年報2011」（第83次調査）	平成24年3月	
「年報2012」（第84・85次調査）	平成25年3月	
「年報2013」（第86次調査）	平成26年3月	
「年報2014」（第87次調査）	平成27年3月	
「年報2015」（第88・89次調査、環境整備）	平成28年3月	
「年報2016」（第90次調査）	平成29年3月	
「年報2017」（第91次調査）	平成30年3月	
「年報2018」（第92次調査）	平成31年3月	
「年報2019」（第93次調査）	令和2年6月	
「年報2020」（第94次調査）	令和3年3月	
「年報2021」（第95次調査）	令和4年3月	
「年報2022」（第96・97次調査）	令和5年3月	

②多賀城周辺遺跡調査報告書

「桃生城跡Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第1冊	昭和50年3月
「桃生城跡Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第2冊	昭和51年3月
「伊治城跡Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第3冊	昭和53年3月
「伊治城跡Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第4冊	昭和54年3月
「伊治城跡Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第5冊	昭和55年3月
「名生館遺跡Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第6冊	昭和56年3月
「名生館遺跡Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第7冊	昭和57年3月
「名生館遺跡Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第8冊	昭和58年3月
「名生館遺跡Ⅳ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第9冊	昭和59年3月
「名生館遺跡Ⅴ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第10冊	昭和60年3月
「名生館遺跡Ⅵ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第11冊	昭和61年3月
「南山遺跡Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第12冊	昭和62年3月
「南山遺跡Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第13冊	昭和63年3月
「南山遺跡Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第14冊	平成元年3月
「南山遺跡Ⅳ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第15冊	平成2年3月
「南山遺跡Ⅴ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第16冊	平成3年3月
「南山遺跡Ⅵ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第17冊	平成4年3月
「南山遺跡Ⅶ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第18冊	平成5年3月
「下伊場野窯跡」	多賀城周辺遺跡調査報告書第19冊	平成6年3月
「桃生城跡Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第20冊	平成7年3月
「桃生城跡Ⅳ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第21冊	平成8年3月
「桃生城跡Ⅴ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第22冊	平成9年3月
「桃生城跡Ⅵ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第23冊	平成10年3月
「桃生城跡Ⅶ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第24冊	平成11年3月
「桃生城跡Ⅷ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第25冊	平成12年3月
「桃生城跡Ⅸ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第26冊	平成13年3月
「桃生城跡Ⅹ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第27冊	平成14年3月
「亀岡遺跡Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第28冊	平成15年3月
「亀岡遺跡Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第29冊	平成16年3月
「木戸窯跡群Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第30冊	平成17年3月
「木戸窯跡群Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第31冊	平成18年3月
「木戸窯跡群Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第32冊	平成19年3月
「六月坂遺跡ほか」	多賀城周辺遺跡調査報告書第33冊	平成20年3月
「㐂の出山窯跡群Ⅰ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第34冊	平成21年3月
「㐂の出山窯跡群Ⅱ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第35冊	平成22年3月
「㐂の出山窯跡群Ⅲ」	多賀城周辺遺跡調査報告書第36冊	平成23年3月
「大古山瓦窯跡Ⅰ」	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第37集	令和4年3月
「大古山瓦窯跡Ⅱ」	多賀城関連遺跡発掘調査報告書第38集	令和5年3月

③研究紀要

「研究紀要Ⅰ」		昭和49年3月
「研究紀要Ⅱ」		昭和50年3月
「研究紀要Ⅲ」		昭和51年3月
「研究紀要Ⅳ」		昭和52年3月
「研究紀要Ⅴ」		昭和53年3月
「研究紀要Ⅵ」		昭和54年3月
「研究紀要Ⅶ」		昭和55年3月

④総括調査報告書・資料集

「多賀城跡 政庁跡 図録編」		昭和55年3月
「多賀城跡 政庁跡 本文編」		昭和57年3月
「多賀城跡 政庁跡 補遺編」		平成22年3月
「多賀城跡 外郭跡Ⅰ－南門地区－」		平成29年3月
「多賀城跡 政庁南面地区－城前官衙遺構・遺物編－」		平成30年3月
「多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ－城前官衙総括編－」		平成31年3月
「多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ－政庁南大路・南北大路－」		令和3年3月
「多賀城漆紙文書」	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ	昭和54年3月
「多賀城跡木簡Ⅰ」	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ	平成23年3月
「多賀城跡木簡Ⅱ」	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ	平成25年3月
「多賀城跡木簡Ⅲ」	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ	平成26年3月
「多賀城施釉瓦塔」	宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ	令和2年3月

⑤整備計画など

「特別史跡多賀城跡整備基本計画」		平成28年3月
「特別史跡多賀城跡浮島緑化修景基本方針」		令和3年3月

⑥概説書など

「多賀城と古代日本」		昭和50年3月
「多賀城と古代東北」		昭和60年3月
「多賀城跡－発掘のあゆみ－」		平成15年3月
「多賀城跡－発掘のあゆみ2010－」		平成22年9月
「多賀城跡－発掘のあゆみ2020－」		令和2年3月
「多賀城跡調査研究所沿革史」		令和2年3月

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みやぎけんたがじょうあとちょうさけんきゅうしょねんぽう２０２２　たがじょうあと
書　　名	宮城県多賀城跡調査研究所年報　２０２２　多賀城跡
副　書　名	多賀城跡－第96・97次調査－
巻　　次	宮城県多賀城跡調査研究所年報　２０２２
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報
シリーズ番号	２０２２
編 著 者 名	高橋栄一・白崎恵介・初鹿野博之・古田和誠・鈴木貴生・矢内雅之
編 集 機 関	宮城県多賀城跡調査研究所
所　在　地	〒985-0862　宮城県多賀城市高崎１丁目22-1　TEL　022-368-0102　FAX　022-368-0104
発行年月日	20230328

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
特別史跡 多賀城跡（たがじょうあと） 附寺跡（つけたてあと）	宮城県多賀城市（みやぎけんたがじょうし） 市川（いちかわ）・浮島（うきしま）	04209	004	38° 18′ 24″	140° 59′ 18″	2022年 4月26日 / 2022年 10月12日	第96次 調査 280㎡ 第97次 調査 150㎡	調査計画 に基づく 学術調査
				世界測地系準拠 （ＧＲＳ８０）				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	掘立柱建物 切土 整地層 竪穴建物 土坑 溝 鍛冶炉	土師器・須恵器・須恵系土器・青磁・白磁・緑釉陶器・灰釉陶器、瓦、塼、石製品、鉄製品、鉄滓	

要　約

【第96次調査】第95次調査で検出したSB3415・3450掘立柱建物の東側において遺構の分布を把握すること、加えて、沢状地形内の堆積層の分布や年代などを把握し、地形と遺構分布との関連性を確認することを目的とした。調査の結果、以下の成果を得た。

①A区では、竪穴建物１棟、土坑１基、溝２条を検出した。竪穴建物は出土遺物から第Ⅲ期以降と推定される。

②B区では、掘立柱建物１棟とこれに伴う切土・整地層・溝３条、竪穴建物１棟、土坑３基、溝７条を検出した。切土の埋土・堆積土には鍛冶関連遺物、漆紙文書・漆付着土器が含まれており、調査区北側の近辺に鍛冶・漆工房が存在していた可能性が高い。年代は第Ⅲ期と考えられる。竪穴建物は掘立柱建物より新しく、第Ⅲ期以降と考えられる。

③過去の調査成果も含めると、第Ⅲ期以降に政庁北側のエリアが活発に利用することが明らかとなった。

【第97次調査】丘陵から低地に至る部分における遺構の状況等を把握することを目的とした。調査の結果、以下の成果を得た。

①旧地形は10世紀前葉～12世紀前葉頃に削平を受けており、第Ⅰ期外郭区画施設は確認できなかった。

②第Ⅰ期外郭南門の西側の旧地形は、舌状に張り出す丘陵と考えられること、これまでの調査により、丘陵部に構築される区画施設は土塀または築地塀と考えられていることから、この地点の区画施設の構造は土塀または築地塀の可能性が高まった。

SX3466 出土遺物

宮城県多賀城跡調査研究所年報　2022
多　賀　城　跡

令和５年３月 28 日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目 22－1
ＴＥＬ（022）368－0102
ＦＡＸ（022）368－0104
印刷所　株式会社　トーユー